

徳川林政史研究所蔵 旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態 数量

一〇一 (御軍用御書付之写)

寛政六・同一〇

帖ほか 一一

* 本箱入り。本箱には「御軍用御書付之写奉請取、右御書付ハ御国元ニ差置、猶又右御書付写取之、当表ニ指置」と墨書されている。寛政六年の軍役改正に関するもの。

第一帖 御軍役之定(寛政六年九月)

第二帖 御家中江渡ル御扶持路銀之定(寛政六年九月)

第三帖 御家中江渡ル夫馬之定(寛政六年九月)

第四卷 御旗御馬印之図(寛政六年九月)

第五卷 御家中役旗差物之図(寛政六年九月)

第六通 御軍用御書付写御渡被置候分目録(寛政六年九月)

第七冊 御軍用諸記目録(寛政六年九月)

第八通 (御軍用諸記目録写 寛政六年九月付 同年一二月写)

第九冊 御軍用追加(寛政一〇年四月)

第一〇通 (御家中家来笠驗雛形)

第一通 (旗印雛形断簡)

一〇二 (五中録)

寛文五年筆

並河元良(著)

軸

一

* 本箱入り。徳川綱誠の学問のために父光友が並河元良に命じて「中教之説」を記したものである。徳川綱誠の自筆と伝えられる。

一〇三 (御下屋敷関係絵図)

鋪

四一

* 御成先寺院に関するものと推測される第一一鋪・第二一鋪を除き、名古屋城下の御下屋敷に関わる絵図を一括している。第一鋪から第三鋪は「宝暦元未年出来 御下屋敷御殿奥表絵図 三枚統」と書かれた本箱入り。

第一鋪 宝暦元未年出来 御下屋鋪南御庭絵図

第二鋪 宝暦元未年出来 御下屋鋪御殿奥表絵図

第三鋪 宝暦元未年出来 御下屋敷北御庭絵図

第四鋪 (御下屋敷田畑絵図)

第五鋪 御下屋敷内田畑之図

第六鋪 源順様思召を以北御庭^(ママ)・御建物等之図

第七鋪 墨引絵図扣(御下屋敷南御庭絵図)

第八鋪 東山御長屋(間取図)

第九鋪 (城下法花寺町筋其外町並略図)

第一〇鋪 (御間・御勝手周辺略図)

第一一鋪 (高照寺絵図)

第一二鋪 白鷗亭絵図

第一三鋪 白鷗亭(略図)

第一四鋪 白鷗亭之図面

第一五鋪 (長屋間取図)

第一六鋪 (大奥御殿跡繩張朱引図)

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態

数 量

二(一二二)

第一七鋪 (先方之御殿跡繩張朱引図)

第一八鋪 御下屋敷南御庭図面(略図)

第一九鋪 元白鷗亭御茶屋之図面

第二〇鋪 (家屋間取図)

第二一鋪 天道山高照寺墨引壹印(御膳所周辺図)

第二三冊 文政二卯年 御庭御景色絵図

第二三鋪 文政五年午二月改 御下屋敷束畑墨引

第二四鋪 天保十四年卯八月 御比丘尼居所之図面但三枚綴

第二五鋪 天保十五辰六月出来 御下屋敷北御庭中図面

第二六鋪 御下屋敷役所図面(弘化四年頃)

第二七鋪 嘉永二酉年二月廿三日写 御下屋敷脇広場内江囲ひ込二相成候図面(一枚綴)

第二八鋪 南比丘尼居所ニ物置・同心居小屋取建場所之図(嘉永五年十一月)

第三〇鋪 御下屋敷内御供屋長屋取建場所之図(嘉永七年二月)

第二九鋪 御下屋敷脇広場広方図面(嘉永六年九月写)

第三一鋪 (広場広まり方御談之節添図 嘉永七年閏七月 四枚一綴)

第三二鋪 (御供役所幕張出来方御年寄衆休息所補理方等之図面 安政二年五月)

第三三鋪 安政四巳年十月 御作事方懸合ニ添来ル図面写(御覽所絵図)

第三四鋪 (銃陣惣裁役立合見分之節繩張間敷絵図 文久元年八月)

第三五鋪 慶応元年丑十月 御談書ニ添ひ候図面写(御比丘尼居所付近朱引図)

第三七鋪 御下屋敷御殿絵図

第三六鋪 御下屋敷御殿并席之墨引

第三八鋪 (御下屋敷内田畑絵図 五枚一綴)

第三九鋪 慶応元丑十一月 御作事奉行方地所引渡方懸合ニ添断来候図面(御下屋敷御比丘尼北明地女中養生場取建地所絵図)

第四〇鋪 大隊調之節惣裁役江地所渡方御談ニ付御答達ニ添出候図面之下(文久元年七月)

第四一鋪 入記(御下屋敷絵図類入置候ニ付 文政三年二月)

二〇一三 (御旗御馬印之図・御家中役旗差物之図)

江 戸 写

帖 四

* 「御旗御馬印之図」「御家中役旗差物之図」が二組ずつ残存している。

二〇一三 (御軍用御書付)

江 戸 写

軸 ほか 一二

* 木箱入り。寛政六年九月の軍役改定にともなうもの。

第一 卷 御軍備之図書目録(寛政六年九月)

第二 卷 寛政六年九月改正 御陣中掟

第三 帖 行軍之式(寛政六年九月)

第四 鋪 御旗本御陣營之図

第五鋪 総軍宮陣準繩

第七鋪 百騎一備布列之図

第九鋪 御旗本之図

第一鋪 小御備図

第六鋪 五十騎一備布列之図

第八鋪 五十騎一備別陣營之図

第一〇鋪 小御備御旗本之図

第二鋪 御備図

一三一 四 手配之事〔源明様御筆御内密御書付〕〔異変之節御固ニ付 寛政六年筆

黒印状〕

徳川宗睦〔筆〕

状 一

*本箱入り。包紙とも。包紙には「四号 御大切戊 源明様御内密御書付」と書かれた貼紙あり。

一三一 五 武家諸法度 安政六年筆

状 一

*本箱入り。包紙とも。包紙には「十一号 大切戊 武家諸法度 安政六年九月廿五日」と書かれた貼紙あり。

一三一 八 御家中惣御人数積〔御家中御人数積〕 江戸 写

蓬左 A

帖 一

一三一 九 殿様・中将様・両少将様知行・切米取渡夫馬惣寄目録 江戸 写

蓬左 A

帖 一

〔夫馬惣寄目録〕〔延宝五年〕

一三一 一〇 応高夫馬相渡割符之元〔知行取夫馬割符〕〔延宝五年〕 江戸 写

蓬左 A

帖 一

一三一 一二 知行取夫馬相渡節相印之覚〔知行取江夫馬相渡節相印〕 江戸 写

蓬左 A

帖 一

〔延宝五年〕

一三一 一三 〔知行・切米取御国并所々残人〕〔延宝五年〕 江戸 写

蓬左 A

帖 一

一三一 一三 御切米取夫馬割符定〔切米取夫馬割符〕〔延宝五年〕 江戸 写

蓬左 A

帖 一

一三一 一四 切米取夫馬相渡節相印之覚〔切米取江夫馬相渡節相印〕 江戸 写

蓬左 A

帖 一

〔延宝五年〕

一三一 一五 応高夫馬相渡割符之元〔中将様・摂津守様・出雲守様 江戸 写

蓬左 A

帖 一

知行取夫馬割符〕〔延宝五年〕

一三一 一六 〔中将様・摂津守様・出雲守様御切米取江渡夫馬割符〕 江戸 写

蓬左 A

帖 一

〔延宝五年〕

番 号 表 題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

一三一七

尾州御国境方所々出口式拾五ヶ所江早速懸合之刻可指
遣夫馬割出シ并村付[所々出口へ可指遣夫馬割之覚](延
宝五年カ)

江戸 写

蓬左 A

帖

一

*紙帙入り。

一三一六

尾州・濃州御領分人馬改之元(延宝五年)

江戸 写

蓬左 A

帖

一

*紙帙入り。

一三一七

[尾州・濃州絵図]

江戸 写

蓬左 A

鋪

一

*紙帙入り。

一三一六

[覚書](夫馬寄場之覚・尾州濃州御領分耕作見廻之覚)

江戸 写

蓬左 A

帖

一

一三一六

[兵法之書](正保二年成立)

江戸 写

藤原玄信(著)

帖

一

一三一四

[御葉方 御手鑑]

江戸 写

帖

二

*大型の横帖で折り目部分が弱い。取り扱いには注意を要する。

一三一四

伝通院ノ図(江戸伝通院図)

江戸 写

鋪

一

*紙帙入り。

一三一四

[紅葉山物絵図]

嘉永二年写

鋪

一

一三一五

東叡山絵図(東叡山惣絵図)

寛政七年写

鋪

一

*袋とも。紙帙入り。

一三一七

士林浜洞(延享四年序)

江戸 写

松平君山(編)

蓬左 A・邸中

縦

一三

*尾張藩士の系譜集。惣目録(第一冊)・序目(第二冊)・五十音順索引(第三冊、後年の編集および本編・附録(第一・二・四冊)第一・二・六冊)からなる。この史料には、作成契機を同じくする同形式の数種類の写本があったと考えられ、本史料群では少なくとも二種類が残存するが、後年の整理の過程でこれらは混在する形で番号が付与されている。そこで本目録では、地部側面に番号が墨書されていない写本を別系本としてとらえ、細目の末尾に※印を付けて注記した。

- 第一冊 士林派洞序・凡例・綱領・士林派洞目錄
第二冊 士林派洞序 凡例 綱領 士林派洞目錄 ※別系本
第三冊 士林派洞五十音順
第四冊 卷第一 甲之部一 幕下御附属衆(成瀬)
第五冊 卷第二 甲之部一 幕下御附属衆(竹腰・渡辺・石河)
第六冊 卷第三 甲之部一 幕下御附属衆(山村)
第七冊 卷第四 甲之部一 幕下御附属衆(千村)
第八冊 卷第五 甲之部一 御附属列衆(滝川・津田・石黒)
第九冊 卷第六 甲之部一 御附属列衆(玉置・津金・奥平・西尾・倉林)
第一〇冊 卷第七 乙之部一 初附御部屋衆(平岩・中根)
第一一冊 卷第八 乙之部一 御部屋後附衆(鈴木)
第一二冊 卷第九 乙之部一 御部屋後附衆(酒井・小畑・稲吉・青山・朝岡・山本)
第一三冊 卷第十 乙之部一 御部屋後附衆(本多・大塩・天野・天野)
第一四冊 卷第十一 乙之部一 弓削衆(星野・石川・荒川・磯)
第一五冊 卷第十二 乙之部一 弓削衆(相原・高田・村上・川口・今井・内藤・岡本・市川・安藤・安藤・小藤)
第一六冊 卷第十三 乙之部一 弓削衆(磯貝・関・荆部・渡辺・鈴木・村田・志村・帯金・中野)
第一七冊 卷第十四 乙之部一 弓削衆(小田切・米倉・中島・上田・徳山・岩間・阿部・本間)
第一八冊 卷第十五 乙之部一 弓削衆(丸山・深沢・山口・上屋・阿部・松平・稲垣・佐枝・加藤・若林・三沢)
第一九冊 卷第十六 乙之部一 弓削衆(石川・藤江・平井・前島・野呂瀬・浜島・細野)
第二〇冊 卷第十七 乙之部一 弓削衆(佐治・柴山・取田・都筑・佐藤・中根・坂井・平沢)
第二一冊 卷第十八 乙之部一 弓削衆(大河内・相原・岡・平井・志村・守屋・堀田・権田・横内)
第二二冊 卷第十九 乙之部一 弓削衆(芦沢・橘田・高橋・海保・横内・藤井・竹居・牛込・高橋・天野)
第二三冊 卷第二十 乙之部一 弓削衆(川合・飯沼・浜島・桜口・小菅・鹿取・近藤・加藤・山崎・平尾・渋谷・岡部)
第二四冊 卷第二十一 乙之部一 弓削衆(川合・飯沼・浜島・桜口・小菅・鹿取・近藤・加藤・山崎・平尾・渋谷・岡部) ※別系本
第二五冊 卷第二十一 乙之部一 弓削衆(神谷・片山・三村・深沢・大田・大熊・徳光・都丸・海野・清水・土屋・塩川)

番 号 表 題

旧蓬左文庫所藏史料目録(下)

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態

数 量

六(一二五)

第二六冊	卷第二十二	丙之部一	御朱印二十人衆(跡部・馬場・小尾・蘿木・幡野)
第二七冊	卷第二十三	丙之部一	御朱印二十人衆(井出・曲淵・山寺・青木・大森・鈴木)
第二八冊	卷第二十三	丙之部一	御朱印二十人衆(井出・曲淵・山寺・青木・大森・鈴木) ※別系本
第二九冊	卷第二十四	丙之部二	駿河詰衆(本多・鮎川・榊原・野呂・丹羽)
第三〇冊	卷第二十五	丁之部一	松平甚太郎衆(阿部・小笠原・松本)
第三一冊	卷第二十六	丁之部一	松平甚太郎衆(富永)
第三二冊	卷第二十七	丁之部一	松平甚太郎衆(伊奈・尾崎・尾崎・小沢・尾崎・尾崎・石川・奥平)
第三三冊	卷第二十八	丁之部一	松平甚太郎衆(山内・西郷)
第三四冊	卷第二十九	丁之部一	松平甚太郎衆(近藤・後藤・近藤・近藤・左右田)
第三五冊	卷第三十	丁之部一	松平甚太郎衆(朝岡・小山・林・粕谷・太田・高梨・長屋・尾崎)
第三六冊	卷第三十一	丁之部一	松平甚太郎衆(服部・平岩・奥平・富永)
第三七冊	卷第三十二	丁之部一	松平甚太郎衆(加藤・石川・平岩・小笠原・辰巳)
第三八冊	卷第三十三	丁之部一	松平甚太郎衆(鳥居・鳥居・山崎・江原・木村)
第三九冊	卷第三十四	丁之部一	忍新参衆(遠山・大沢)
第四〇冊	卷第三十五	丁之部一	忍新参衆(成田)
第四一冊	卷第三十六	丁之部二	忍新参衆(高木・水野)
第四二冊	卷第三十七	丁之部二	忍新参衆(荒川・寺尾・久野・吉原)
第四三冊	卷第三十八	丁之部二	忍新参衆(朝比奈・舍人・島沢)
第四四冊	卷第三十九	丁之部二	忍新参衆(杉山・彦坂・大橋・浅利・村上)
第四五冊	卷第四十	丁之部二	忍新参衆(山崎・吉田・村瀬)
第四六冊	卷第四十一	丁之部二	忍新参衆(水野・石原・林・坪和・小野寺・朝岡・杉崎・朝倉)
第四七冊	卷第四十二	丁之部二	忍新参衆(岡寺・加藤・大津・石川・荻野・野中・田中)
第四八冊	卷第四十三	丁之部二	忍新参衆(小菅・渡辺・近藤・原・岡田・竹屋・中村・三宅)
第四九冊	卷第四十四	丁之部二	忍新参衆(馬場・野呂・山崎・戸田・都筑・須永)

- 第五〇冊 卷第四十四 丁之部 忍新參衆(馬場・野呂・山崎・戸田・都筑・須永) ※別系本
- 第五一冊 卷第四十五 丁之部 忍新參衆(佐々・須賀・寄田・今井・浅井・安田)
- 第五二冊 卷第四十六 丁之部 忍新參衆(田代・山岡・岡田・宇野・鮫島・田代・鈴木・小野沢・一色)
- 第五三冊 卷第四十七 丁之部 忍新參衆(中野・太田・中野・渡辺・内藤・永田)
- 第五四冊 卷第四十八 丁之部 忍新參衆(長坂・林・行方・植松・伴・西岡・手島)
- 第五五冊 卷第四十九 丁之部 忍新參衆(比木・梶・羽鳥・平野・藤沢・矢島)
- 第五六冊 卷第五十 丁之部 忍新參衆(宮崎・都筑・永井・久米)
- 第五七冊 卷第五十一 丁之部 忍新參衆(本多・蜷川・神谷・野村・加藤)
- 第五八冊 卷第五十二 丁之部 忍新參衆(佐藤・市川・平尾・鳥居・加藤)
- 第五九冊 卷第五十三 丁之部 忍新參衆(土屋・栢野・手島・荻原・大久保・増田・谷口)
- 第六〇冊 卷第五十四 丁之部 忍新參衆(戸田・須賀井・各務・今泉・久々宇・朝倉・新野・向坂・加藤)
- 第六一冊 卷第五十五 丁之部 忍新參衆(岩田・牧野・鈴木・杉浦・藤田)
- 第六二冊 卷第五十六 丁之部 忍新參衆(杉山・西沢・平岡・大原・御宿・桜木)
- 第六三冊 卷第五十七 丁之部 忍新參衆(桜井・岡崎・山中・岡部・新井・村井・金子)
- 第六四冊 卷第五十八 丁之部 忍新參衆(寺西・阿知波・松井・海保)
- 第六五冊 卷第五十九 戊之部 尾張衆(生駒・兼松)
- 第六六冊 卷第六十 戊之部 尾張衆(横井)
- 第六七冊 卷第六十一 戊之部 尾張衆(中村・毛利)
- 第六八冊 卷第六十二 戊之部 尾張衆(津田・沢井)
- 第六九冊 卷第六十三 戊之部 尾張衆(下方)
- 第七〇冊 卷第六十四 己之部 清洲新參衆(中川・長岡・津田・大橋・稲富・安倍)
- 第七一冊 卷第六十五 己之部 尾州清洲新參衆(熊沢・高力・朝岡・安藤・上野)
- 第七二冊 卷第六十六 己之部 清洲新參衆(堀田・大道寺・田嶋・稲垣)
- 第七三冊 卷第六十七 己之部 清洲新參衆(山田・水野・吉田・雨宮・室賀・飯沼・佐々)
- 第七四冊 卷第六十八 己之部 清洲新參衆(魚住・埴原・江坂・勝野)

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態

数 量

第七五冊	卷第六十九	己之部	清洲新参衆(安井・雑賀・山本・大崎)
第七六冊	卷第七十	己之部	清洲新参衆(千賀・里村・鳥居・河野・野呂・井上)
第七七冊	卷第七十一	己之部	清洲新参衆(逸水・沢・小久保・駒林・小川・水野)
第七八冊	卷第七十二	庚之部	御外戚衆(志水・市辺)
第七九冊	卷第七十三	庚之部	御外戚衆(山下・竹中・浅野・吉田・坂崎)
第八〇冊	卷第七十四	庚之部	駿臣衆(天津・熊井・青山・内藤・小見山)
第八一冊	卷第七十五	辛之部	駿河新参衆(上岐・一色・肥田・大野・飯田・太田)
第八二冊	卷第七十六	辛之部	駿河新参衆(間宮・吉田)
第八三冊	卷第七十七	辛之部	駿河新参衆(水野・長野・牧)
第八四冊	卷第七十八	辛之部	駿河新参衆(赤林・東・三枝・三浦・秋元・南部)
第八五冊	卷第七十九	辛之部	駿河新参衆(河村・須野崎・下條・小笠原・大村)
第八六冊	卷第八十	壬之部一	元和以後新参衆(東條・川澄・古屋)
第八七冊	卷第八十一	壬之部一	元和以後新参衆(本多・中西・稲葉・飯島)
第八八冊	卷第八十二	壬之部一	元和以後新参衆(井野口・田辺・渥美・恒川・三宅)
第八九冊	卷第八十三	壬之部一	元和以後新参衆(湯本・酒井・広瀬)
第九〇冊	卷第八十四	壬之部一	元和以後新参衆(稲生・稲葉・福富・鈴木・榊原・沼田・鈴木)
第九一冊	卷第八十五	壬之部一	元和以後新参衆(野崎・五味・武野)
第九二冊	卷第八十六	壬之部一	元和以後新参衆(原・津田・鈴木・朝比奈・安藤)
第九三冊	卷第八十七	壬之部一	元和以後新参衆(吉田・河村・神谷・恩田・石川・吉田・足立)
第九四冊	卷第八十八	壬之部一	元和以後新参衆(大島・長野・林・青木・古高)
第九五冊	卷第八十九	壬之部一	元和以後新参衆(小原・津田・福田・箕形・波多野・太田・飯尾・佐藤・今泉)
第九六冊	卷第九十	壬之部一	元和以後新参衆(上田・佐藤・市浦・稲葉・谷田)
第九七冊	卷第九十一	壬之部一	元和以後新参衆(林・馬場・速水・林・富田・鈴木・小山田)
第九八冊	卷第九十二	壬之部一	元和以後新参衆(佐藤・青野・舟橋・丹羽・福尾)

- 第九九冊 卷第九十三 壬之部一 元和以後新参衆(郡筑・井上・三輪・旧井・山内・栗木・大熊・本間)
- 第一〇〇冊 卷第九十四 壬之部一 元和以後新参衆(永田・後藤・園田・滝本・御友・岸上・寺町・春田・岡本・鈴木)
- 第一〇一冊 卷第九十五 壬之部一 元和以後新参衆(神尾・桜山・朝倉・真鍋・茅原田・梶原・服部)
- 第一〇二冊 卷第九十六 壬之部一 元和以後新参衆(松本・伊部・渡辺・野原・大島・松岡・矢田・辰巳)
- 第一〇三冊 卷第九十七 壬之部一 元和以後新参衆(能勢・中村・野垣・大島・河野・朝比奈・大野・佐伯・上泉・三宅)
- 第一〇四冊 卷第九十八 壬之部一 元和以後新参衆(瀬尾・西尾・石原・松田・戸山・市村)
- 第一〇五冊 卷第九十九 壬之部一 元和以後新参衆(石川・林・日置・笹岡・糟谷・瀬戸・服部・並河・吉岡)
- 第一〇六冊 卷第一百 壬之部一 元和以後新参衆(大塩・川崎・坂・赤堀・伊藤・水野・中根・松尾・深田)
- 第一〇七冊 卷第一百一 壬之部一 元和以後新参衆(堀・菅谷・鈴木)
- 第一〇八冊 卷第一百二 壬之部一 元和以後新参衆(中島・沖野・兒島・正木・竹田・諏訪部・賀島)
- 第一〇九冊 卷第一百三 壬之部一 元和以後新参衆(近藤・山田・梶村・大野・岡野・成瀬・高間・吉田・志水・坂井・浦井・楠・金森)
- 第一一〇冊 卷第一百四 壬之部一 元和以後新参衆(梶田・水谷・小川・碓水・磯谷・山上・大島・山口・高木・上田)
- 第一一一冊 卷第一百五 壬之部一 元和以後新参衆(内藤・兒玉・尾関・高野瀬・前田・佐分・高野・酒井)
- 第一一二冊 卷第一百六 壬之部一 元和以後新参衆(水野・高木・角田・杉立・森村・大槻・石井・服部・山内・栗田)
- 第一一三冊 卷第一百七 壬之部一 元和以後新参衆(鈴木・片桐・落合・今村・片桐・大野・水野・岩屋)
- 第一一四冊 卷第一百八 壬之部一 元和以後新参衆(柳生・安田・井上・山吹・富田・坂・西村・山本・三沢・林・安井・小林・伊勢)
- 第一一五冊 卷第一百九 壬之部一 元和以後新参衆(間島・榑原・和田・石原・立入・高木・小山・林)
- 第一一六冊 卷第一百 壬之部二 瑞公御部屋新参衆(山澄・桜井・佐久間・岩田・池部・吉田・稲葉・大泉・庵原)
- 第一一七冊 卷第一百十一 癸之部 慶安以後新参衆(京極・多羅尾・渡辺・服部・羽田野・山高・舟越)
- 第一一八冊 卷第一百十二 癸之部 慶安以後新参衆(中條・高田・神谷・鈴木・清水・三浦・進・八尾・海部)
- 第一一九冊 卷第一百十三 癸之部 慶安以後新参衆(織田・蒔田・服部・大塚・鍋田・近松・湯浅・佐尾)
- 第一二〇冊 卷第一百十四 癸之部 慶安以後新参衆(安藤・飯川・副田・岩本・水野・水野・鈴木)
- 第一二一冊 卷第一百十五 癸之部 慶安以後新参衆(赤尾・石川・本多・平野・小池・村尾・柘植・落合・高浜・浜田・赤池・永井・細井)
- 第一二二冊 卷第一百十六 癸之部 慶安以後新参衆(西川・大井・石谷・小川・佐藤・吉村・山田・小沢・佐藤・浅岡・横井・弓場)
- 第一二三冊 卷第一百十七 癸之部 慶安以後新参衆(山田・平野・太田・山名・市瀬・海野・近藤・岡田・岡田)

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態

数 量

- 第二四冊 卷第百十八 癸之部 慶安以後新参衆(村井・山本・杉野・和田・荒尾・松村・小川・奥村)
- 第二五冊 卷第百十九 癸之部 慶安以後新参衆(四宮・藤井・高津・天野・正木・太田・丹羽・太田・藤村・坪内・国枝)
- 第二六冊 卷第百二十 癸之部 慶安以後新参衆(横地・森本・酒井・川崎・坂野・本郷・大藤・坂部・市川・平野・岡田)
- 第二七冊 卷第百二十一 癸之部 慶安以後新参衆(芝山・小島・朝岡・轟・小野・木村・大久保・大久保・住山・野間)
- 第二八冊 卷第百二十二 癸之部 慶安以後新参衆(杉浦・神野・建部・森寺・岡本・辻・大脇・天野・永田)
- 第二九冊 卷第百二十三 甲之部 断絶家系(稲葉・西村・成瀬) 卷第百二十四 乙之部 断絶家系(岩間・岩下・下・天野・朝日・佐枝・長崎・勝・手川・酒井・小池)
- 第三〇冊 卷第百二十五 丙之部 断絶家系(秋山・伊藤・伊藤) 卷第百二十六 丁之部 断絶家系(松井・伊奈・小笠原) 卷第百二十七 丁之部 断絶家系(加藤・野本・奥津・尾関・豊田・木村・松井・山崎・新見・伊達・小林・石堂・河野・加藤・鈴木・熊木・田中・深尾・酒卷・相田・坂井・八田・鈴木・中村・奥山・奥津・山本・甲斐庄・柿沼) 卷第百二十八 乙之部 断絶家系(韭山・藤田・川瀬・柳下・小川・長谷川・武藤・三宅・櫛田・伊奈・増田・矢島) 卷第百二十九 辛之部 断絶家系(横田・上田・園田・矢崎・土屋・山城・佐久間・村田・本多・粟生・桜井) 卷第百三十 壬之部 断絶家系(長谷川・佐藤・久松・南部・幸村・清水・畔田・鈴木・松平)
- 第三一冊 卷第百三十一 壬之部 断絶家系(鳥居・柴田・櫛原・早川・蜂屋・蜂屋・星野・津田・久米・宇津木・天野・山内・片桐・大西・稲葉・飯沼・牧)
- 第三二冊 卷第百三十二 壬之部 断絶家系(新開・両角・油川・赤上・都筑・滝見・川内・増島・石黒・興津・岡島・小田野) 卷第百三十三 癸之部 断絶家系(樋口・多賀谷・福富・川口・高木・志村・橋爪・佐々木・小串)
- 第三四冊 士林浜回附録上 家系当時姓名(甲之部・乙之部・丙之部・丁之部)
- 第三五冊 士林浜回附録中 家系当時姓名(丁之部・戊之部・己之部・庚之部・辛之部)
- 第三六冊 士林浜回附録下 家系当時姓名(壬之部・癸之部)

一三 八 士林浜回統編

天保二年写

松平君山・霍山・南山(編)

蓬左A・寺社

縦 二七

* 寺社奉行所系本。第一冊の末尾に「右士林浜回廿五冊者以寄合松平九兵衛(南山)所蔵書令写之官庫ニ納置者也 于時天保二卯年十二月日」という寺社奉行水野藤兵衛ほか六名による奥書あり。寛政四年までの記述が見られる。なお第二冊は檢索の便宜のために後年になって編集されたものである。

第一冊 士林浜回統編目録

士林派河統編索引 五十音順

- 第二冊 士林派河統編索引 五十音順
- 第三冊 卷第一(壇原・神谷・酒井・兼康・森・小出・浅井・加藤・石黒・高橋・柳川・大沢・田中・岡田改佐竹)
- 第四冊 卷第二(美南川・栗崎・石川・中島・高橋・宇野・沢辺・武田・福岡・秦・小川)
- 第五冊 卷第三(関・長坂・早川・人見・丹羽・上田・木下・久野・加藤・東條)
- 第六冊 卷第四(中島・高麗・三浦・上村・鈴木・三村・高屋・林)
- 第七冊 卷第五(飯田・中尾・鈴木・池田・中川・小泉)
- 第八冊 卷第六(黒田・岡本・上野・桜井・八木・丸山・谷村・守崎・平岩)
- 第九冊 卷第七(浅井・林・天野・川崎・森・奥沢・木崎・蔭山・山口・松岡・水谷・小塩)
- 第一〇冊 卷第八(横山・座光寺・星合・大島・三浦・山田・青山・七沢・荒木・杉山・井口)
- 第一一冊 卷第九(野々日・丹羽・池田・伊藤・中村・大野・鹿野間・川上・友成・渡辺・大橋・野村)
- 第一二冊 卷第十(石堂・生駒・飯沼・正木・岩瀬・中沢・松村・中川・柏谷・拝郷)
- 第一三冊 卷第十一(沢田・恩田・飯田・武藤・太田・高田・安達・木村・太田・河原)
- 第一四冊 卷第十二(高木・神田・五味・広沢・市江・吉田・富永・鈴木・小田原・水谷・三輪)
- 第一五冊 卷第十三(鈴木・河村・松井・清見原・初鹿野・八木・兼杉・小沢・桜井・早川・広沢)
- 第一六冊 卷第十四(安井・半田・藤村・桑原・鬼頭・立家・蘭田・渡辺・大森・天野・遠藤・榊原)
- 第一七冊 卷第十五(杉浦・小笠原・中尾・柴崎・森・服部・鈴木・天野・山高・矢部)
- 第一八冊 卷第十六(磯松・松永・内堀・柘植・神谷・岩田・石川・坂井・星野・吉川)
- 第一九冊 卷第十七(坪内・佐久間・梶山・仙名・大脇・建部・檜原・布施・牧・深萱・林・原)
- 第二〇冊 卷第十八(福沢・林・岡田・大内・大井・赤井・永平・大島・松平・伊勢)
- 第二一冊 卷第十九(外岡・宮崎・松原・堀江・土肥・棚橋・小関・稲葉・広瀬・柿崎)
- 第二二冊 卷第二十(加藤・稲留・大島・津田・宇都宮・今村・津田・真野・内田)
- 第二三冊 卷第二十一(松田・加藤・久世・佐藤・皆川・森川・佐野・前田・田代・仲・神戸・大久保・村主・渡辺・神倉)
- 第二四冊 卷第二十二(古川・遠山・名倉・渡辺・里見・浅井・津田・関口・加藤・加藤・日江井・日江井・天野・駒井・柘植・三輪・内田・丹羽・内藤・榊原・大塚・宇野・佐野・長尾・青木・山中・原田・鈴木・吉田・竹内)
- 第二五冊 卷第二十三(井上・久野・船橋・小川・清水・小笠原・小倉・浅井・加藤・宮脇・半田・半田・清水・七宮・七宮・高木・宮沢・磯野・高)

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

野・坂井・八木・阿部・青山・青山・清水・金子・上田・榊原・榊原・百々)

第二六冊 卷第二十四(伊藤・山田・富山・桂・金森・近藤・橋本・近藤・重野・権田・富田・真野・小川・青山・久世・久世・浅野・近藤・

坂本・佐藤・雲川・小林・八尾・飯田・増田・八木・本多・松山・村上・林)

第二七冊 卷第二十五(宮川・佐藤・生駒・新沢・近藤・寺岡・鈴木・落合・小出・鳥居・富田・磯村・水野・服部・古川・松田・上井・田中・河

野・児島・相羽・石塚・一色・細川・渡辺・福井・中川・榎原・岡田・川口)

一六 二 御日記頭書

江戸後期写

日記所

縦

九

*第一冊表紙に「御日記頭書九冊・同九冊・同端本式冊合計廿冊、右ハ明治三十年十一月第壹卷欠亡之分出来、二部完備ニ付訂正」と朱書された貼紙あり。また見返しには「旧日記所本申 御日記頭書 九冊 第百九十八番」と書かれた貼紙あり。第六冊の末尾には天保五年十一月に編集した旨の奥書あり。

第一冊 凡例 義直卿(慶長五〇慶安三年)

第二冊 光友卿(慶安三〇元禄六年)

第三冊 綱誠卿(元禄六〇同二年) 吉通卿(元禄一〇正徳三年) 五郎太様(正徳三年)

継友卿(正徳三〇享保一五年)

第四冊 宗春卿(享保一五〇元文四年) 宗勝卿(元文四〇宝暦二年)

第五冊 宗睦卿(宝暦一一〇寛政二年)

第六冊 斉朝卿(寛政一二〇文政一〇年)

第七冊 斉温卿(文政一〇〇天保一〇年)

第八冊 斉莊卿(天保一〇弘化二年)

第九冊 慶藏卿(弘化二〇嘉永二年)

一六 三 御日記

江戸後期写

縦

三三

第一冊 寛政四年(二月〇二月)

第二冊 寛政五年上(正月〇四月) ※寛政五年中は欠本

第三冊 寛政五年下(九月〇二月)

第四冊 寛政六年上(正月〇四月)

第五冊 寛政六年中(五月〇八月)

第六冊 寛政六年下(九月〇二月)

第七冊 寛政七年上(正月〇四月)

第八冊 寛政七年中(五月〇八月)

第九冊 寛政七年下(九月〇二月)

第一〇冊 寛政八年上(正月〇四月)

第一一冊 寛政八年中(五月〇八月)

第一二冊 寛政八年下(九月〇二月)

第一三冊 寛政九年上(正月〇四月)

第一四冊 寛政九年中(五月〇八月)

第一五冊 寛政九年下(九月〇二月)

第一六冊 寛政十年上(正月〇四月)

第一七冊 寛政十年中(五月〇八月)

第一八冊 寛政十年下(九月〇二月)

第一九冊 寛政十一年上(正月〇四月)

第二〇冊 寛政十一年中(五月〇八月)

第二一冊	寛政十一年下(九月～十二月)	第二三冊	寛政十二年上(正月～四月)
第二二冊	寛政十二年上(五月～八月)	第二四冊	寛政十二年下(九月～十二月)
第二五冊	享和元年上(正月～四月)	第二六冊	享和元年中(五月～八月)
第二七冊	享和元年下(九月～十二月)	第二八冊	享和二年上(正月～四月)
第二九冊	享和二年中(五月～八月)	第三〇冊	享和二年下(九月～十二月)
第三一冊	享和三年上(正月～四月)	第三一冊	享和三年中(五月～八月)
第三二冊	享和三年下(九月～十二月)		
第一冊	慶長五年一月～同十七年	第二冊	慶長一八年～元和二年
第三冊	元和三年	第四冊	元和四年
第五冊	元和五年	第六冊	元和六年
第七冊	元和七年	第八冊	元和八年
第九冊	元和九年	第一〇冊	寛永元年
第二一冊	寛永二年	第二二冊	寛永三年
第二三冊	寛永四年	第二四冊	寛永五年
第二五冊	寛永六年	第二六冊	寛永七年
第二七冊	寛永八年	第二八冊	寛永九年
第二九冊	寛永一〇年	第三〇冊	寛永一一年
第三一冊	寛永一二年	第三一冊	寛永一三年
第三三冊	寛永一四年	第三四冊	寛永一五年
第三五冊	寛永一六年	第三六冊	寛永一七年
第三七冊	寛永一八年	第三八冊	寛永一九年
第三九冊	寛永二〇年	第三〇冊	正保元年
第四一冊	正保二年	第三二冊	正保三年
第四三冊	正保四年	第三四冊	慶安元年

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

第三五冊 慶安二年

第三六冊 慶安三年

一六一五 敬公実録

江戸写

岡田挺之(著)

日記懸・記録懸

縦 三

*第一冊見返しに「旧日記所本甲 敬公実録 参冊 第百十六番」と書かれた貼紙あり。内表紙裏に「此三冊者御先代御側江上候御本とハ異同茂有之候哉難計、此御本誤甚た有之候得とも表紙附置候 文政五年午八月」と記されている。江戸本との校合の結果を示したものなど訂正の書き込みや貼紙が多数施されている。

第一冊 上(巻第一〜巻第三 慶長五〜寛永六年)
第三冊 下(巻第七〜巻第九 寛永一九〜慶安三年)

第二冊 中(巻第四〜巻第六 寛永七〜同一八年)

一六一七 敬公実録(巻一・巻七・巻八欠)

江戸後期写

岡田挺之(著)

縦 七

*第一冊の見返しに「旧日記所本甲 敬公実録 七冊 第百十五番」と書かれた貼紙、内表紙には「乾五拾七番七冊」という貼紙あり。訂正本で加筆修正が行われており、特に第一冊には朱筆の訂正付箋が多数施されている。

第一冊 巻第二(元和〜寛永二年)
第三冊 巻第四(寛永七〜同一〇年)
第五冊 巻第六(寛永一五〜同一八年)
第七冊 巻第十(慶安三年)

第二冊 巻第三(寛永三〜同六年)
第四冊 巻第五(寛永一一〜同一四年)
第六冊 巻第九(慶安元〜同二年)

一六一八 敬公実録(巻一・巻四・巻五欠)

江戸後期写

岡田挺之(著)

縦 七

*第一冊の見返しに「旧日記所本甲 敬公実録 七冊 第百十四番」と書かれた貼紙、内表紙には「乾五拾七番端本七冊」「三度目奥田与三郎補訂」という貼紙あり。七冊とも各記事の右傍にそれぞれの典拠が記されている。

第一冊 巻第一(慶長五〜元和元年)
第三冊 巻第六(寛永一五〜同一八年)
第五冊 巻第八(正保一〜正保四年)
第七冊 巻第十(慶安三年)

第二冊 巻第三(寛永三〜同六年)
第四冊 巻第七(寛永一九〜正保元年)
第六冊 巻第九(慶安元〜同二年)

一六一〇 (敬公御実録補訂)

江戸後期写

岡田挺之(著)
奥田豊次郎(補)

縦 四

*第一冊見返しに「旧日記所本甲 敬公御実録補訂 四冊 第百十九番」「奥田豊次郎補訂」と書かれた貼紙あり。

- 第一冊 上(慶長五〃寛永三年)
第二冊 中ノ上(寛永四〃同一四年)
第三冊 中ノ下(寛永二五〃正保三年)
第四冊 下(正保二〃慶安三年)

一六一二 敬公御実録調下

江戸 写

日記懸

縦 九

*日記懸の蔵書印は第九冊のみに押印。

- 第一冊 元和二年
第二冊 元和四年
第三冊 元和四年
第四冊 元和四年
第五冊 元和五年
第六冊 元和七年
第七冊 元和八年
第八冊 元和九年
第九冊 慶安元〃同二年

一六一三 敬公御実録調下抜取帳

江戸 写

縦 一

*見返しに「旧日記所本申 敬公御実録調下抜取帳 壹冊 第百十八番」と書かれた貼紙、内表紙に「乾五拾五番」という貼紙あり。内表題横には「追而き たんなく切すて可申事」と記されている。

一六一三 敬公御事蹟集録(天保一五年)

江戸後期写

蓬左 A

一八

*綴糸部分に「御尊崇書籍之部 第二部 仮設五十六号」と書かれた小札がかかっている。第二冊は天保一四年六月付の凡例を持つ別系本で、第四冊も同様であると推定される。

- 第一冊 凡例 御幼名始御改名之御次第 御叙任之御次第 御書判御印形之写 卷第一(慶長五年)
第二冊 凡例 卷第一(慶長五年) ※別系本 第三冊 卷第二(慶長六年)
第四冊 卷第二(慶長六年) ※別系本 第五冊 卷第三(慶長七年)
第六冊 卷第四(慶長八年) 第七冊 卷第五(慶長九年)
第八冊 卷第六(慶長一〇年) 第九冊 卷第七(慶長一一年)
第一〇冊 卷第八(慶長一二年) 第一冊 卷第九(慶長一三年)
第二冊 卷第十(慶長一四年・慶長十四西より同十九年迄御城御引建一卷) 第一四冊 卷第十二(慶長一六年)
第三冊 卷第十一(慶長一五年) 第一六冊 卷第十四(慶長一八年)
第一五冊 卷第十三(慶長一七年) 第一八冊 冬御陣御人数姓名等之部
第二七冊 卷第十五(慶長一十九年・大坂冬御陣一卷・元和元年)

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態

数 量

一六―一四 (御初代之記草稿)

江戸 写

*第一冊見返しに「旧日記所本甲 御初代之記草稿 拾四冊 第百十一番」と書かれた貼紙あり。

第一冊 卷一(慶長五〇元和六年)

第二冊 卷二(元和七〇寛永五年)

第三冊 卷三(寛永六〇同八年)

第四冊 卷四(寛永九〇同一年)

第五冊 卷五(寛永一二〇同四年)

第六冊 卷六(寛永一五〇同七年)

第七冊 卷七(寛永一八〇同二〇年)

第八冊 卷八(正保元〇同二年)

第九冊 卷九(正保三〇同四年)

第一〇冊 卷十(慶安元〇同三年)

一六―一六 瑞龍公実録

江戸 写

本多六兵衛(編)

蓬左 A・尾府 A

縦

四

第一冊 慶安三〇万治三年

第二冊 万治四〇寛文一二年

第三冊 寛文一三〇天和三年

第四冊 天和四〇元禄一四年

一六―一七 瑞龍公御年譜(瑞龍公御年譜 吉見越前守感書写)

寛政五年写

本多六兵衛(編)

尾記録・日記懸

縦

二

*第一冊見返しに「旧日記所本甲 瑞龍公御年譜 式冊 第百十二番」と書かれた貼紙あり。一三八―一六「瑞龍公実録」と同内容で、第一冊に卷一・卷二、第二冊に卷三・卷四を収める。

一六―一八 (瑞龍公編年録)

江戸 写

本多六兵衛(編)

張府 B

縦

四

*一三八―一六「瑞龍公実録」と同内容。第四冊の末尾に明治一〇年九月付で伊藤祐乗により校補が行われた旨の奥書あり。

一六―一九 (瑞龍公改正草稿)

江戸 写

蓬左 A

縦

一

*見返しに「旧日記所本 瑞龍公改正稿 壹冊 第四十七番」と書かれた貼紙あり。

一六―二三 (真巖院様御年譜・源戴様紀年録・同附録)

弘化三・嘉永四年写

縦

一

*見返しに「真巖院様御年譜・源戴様紀年録・同附録 合一冊にノ箱」と書かれた下ケ札あり。「真巖院様御年譜」は文化九年写の御祐筆部屋による写本(底本は沼田半左衛門家所蔵本)を弘化三年に御日記所が転写したもの。「源戴様紀年録・同附録」(人見璣邑著)は嘉永四年に神谷克楨が書き写したものである。

一六―二三 尾城始君知

江戸 写

縦

一

*徳川義直に関する伝記で、別題は「尾陽始君知」。

一六―五 〔視聴日録書拔〕^{〔口カ〕} 文政五年写 尾記録・日記懸 縦 三

*第一冊の見返しに「旧日記所本甲 視聴日録書拔 参册 第三百七十番」と書かれた貼紙あり。公儀の記録である「視聴日録」より徳川義直関係(第一冊・第二冊)、光友関係(第三冊)の記事を書き抜いたもの。第一冊・第二冊は文政五年以前につくられていたが、文政五年に国元からの要請により光友関係の書拔帳(第三冊)が作成された。内容は元和八年より慶安四年におよぶ。第三冊には尾記録の蔵書印は押されていない。

一六―七 〔御黒印由緒書〕(寛政三年) 寛政二年頃写 日記懸 縦 一

*見返しに「旧日記所本甲 御黒印由緒書 壹册 第三百三十三番」と書かれた貼紙あり。寛政三年四月付のものを中心に尾張藩主三十八名から提出させた由緒書付をまとめたもの。なお本史料は、本来は一四五―一九の一部をなすものであったと考えられる。

一六―六 〔御家中由緒書〕(寛政三年) 江戸後期写 縦 六

*寛政三年に尾張藩士から提出させた由緒書付を「いろは」順にまとめたものだが、前半部を欠く。第一冊の見返しに「旧日記所本甲 御家中由緒書 四册 第三百十一番」と書かれた貼紙あり。右の記述より、残存している分は当初四册から成っていたと考えられるが、後年の改装により現在は六册に分冊され、冊順の異同も見られる。

- 第一冊 一ノ一(よ之部・たそ之部・つ之部) 第二冊 一ノ二(つ之部・な之部)
- 第三冊 二ノ一(む之部・う之部・の之部・く之部・や之部・まけ之部・ふ之部・こえ之部・て之部)
- 第四冊 三(あ之部・さ之部)
- 第五冊 二ノ二(きゆめ之部・み之部・し之部・そ之部・ひも之部)
- 第六冊 四(せ之部・す之部・雑之部)

一六―元 〔高附〕(天保七年頃成立) 江戸写 縦 四

*寛政五年八月作成の惣帳方による「役寄帳」を基礎に、その後の役職の任免などを加筆してつくられたもの。記載内容の下限が天保七年であることから、その時期の作成と推測される。第一冊見返しに「旧日記所本乙 高附 四册 第六十一番」の貼紙、第三冊の内表紙裏に「御右筆部屋留役 高附 壹册 かノ箱」の下ケ札、第四冊の本文冒頭に「御右筆組頭 高附 壹册 かノ箱」と書かれた下ケ札あり。

- 第一冊 御医師・御儒者 第二冊 御右筆
- 第三冊 御右筆部屋留役 第四冊 御右筆組頭

一六―四 〔源敬様御黒印之写〕 江戸写 縦 二

*徳川義直が発給した朱印状・黒印状などを編年体でまとめたもの。第一冊は慶長九ノ元和九年、第二冊は寛永元ノ慶安二年および年号不明分を収める。第二冊の見返しに「旧日記所本甲 源敬様御黒印写 式册 第百八番」と書かれた貼紙あり。

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態 数量

一六一四 (支配役寄)(天保七年頃成立)

江戸 写

*一三八―三九「高附」と同様の経緯でつくられたもの。第一冊(第一〇冊)には「式支配役寄やノ箱」というような下ケ札があり、本目録での細目掲載順はこの下ケ札の数字の順とした。第一〇冊の見返しに「旧日記所本乙支配役寄 拾四冊 第六十二番」と書かれた貼紙あり。

第一冊 殿様御部屋御供番・殿様御部屋下書

第二冊 御台所頭・御賄頭・御賄頭並

第三冊 御弓役

第四冊 明倫堂

第五冊 京都御買物奉行

第六冊 金瘡医師・御厩別当・御馬預・御馬乗

第七冊 定府御馬廻

第八冊 御同朋・御同朋格・御同朋並・御絵師

第九冊 扶持人・御記録所書役・囲碁役

第一〇冊 御小人頭・御中間頭・御中間頭格・定番御中間頭・御厩御中間頭

第十一冊 奥組・奥組並

第十二冊 御供番・御供番並・御使番格

第十三冊 御使番

第十四冊 御使役

一六一三 (宝暦年中 御勘定方分限帳)

江戸 写

*見返しに「旧日記所本甲 御勘定方分限帳 壹冊 第百三十五番」の貼紙あり。記載内容の下限は明和三年となっている。

日記所

縦

一

一六一四 分限考

江戸 写

日記懸

縦

一

*見返しに「旧日記所本甲 分限考 壹冊 第百三十一番」と書かれた貼紙あり。

一六一四 (張臣規格)

江戸 写

記録懸・日記懸
・尾記録

縦

一

*尾張藩士の格式を示す八家士上格について述べたもの。見返しに「旧日記所本甲 張臣規格 壹冊 第百三十九番」と書かれた貼紙あり。

一六一四 (張臣興廃録)

江戸 末期写

日記所

縦

一

*御徒格以上の尾張藩士の賞罰についてまとめたもの。記述は寛政二年より安政元年におよぶ。見返しに「旧日記所本甲 張臣興廃録 壹冊 第百三十三番」と書かれた貼紙あり。

一六一四

尾州名古屋御城廓内諸士宅地草創以来転換聞書(宝永 四亥迄廓内外御家中宅地変易)

江戸 写

日記所

縦

一

*見返しに「旧日記所本甲 宝永四亥迄廓内外御家中宅地変易 壹冊 第三百四十番」と書かれた貼紙あり。

一元一 一 [寛永侍知行帳] (寛永七年成立カ)

享和二年写

蓬左A・日記懸 縦 一

・尾記録

*末尾に「右一冊御文庫ニ有之候処、為見合取寄候付写置候事 享和二年戌七月」という奥書あり。見返しに「旧日記所本甲 寛永庚午侍惣知行帳 壹冊 第二百八十三番」と書かれた貼紙あり。

一元一 二 [寛永八年分限帳]

江戸 写

尾記録・記録懸 縦 一

・日記懸

*見返しに「旧日記所本甲 寛永八年御家給人分限帳 壹冊 第二百五十八番」と書かれた貼紙あり。

一元一 三 [寛永八年 御家給人分限帳]

江戸 写

邸中 縦 一

*表紙に「此分限帳、鈴木彦右衛門藏本、文政三辰年十一月尾州より」という朱書がある。見返しに「旧日記所本乙 寛永八年御家給人分限帳 壹冊 第六十九番」と書かれた貼紙あり。

一元一 四 [寛永年中分限帳]

江戸 写

尾記録・記録懸 縦 一

・日記懸

*第一丁に「此分限帳寛永五年比ノ分限帳也、此内ニ石川市正相見候、市正五年九月病死也」という記述がある。見返しに「旧日記所本甲 寛永年中分限帳 壹冊 第二百十六番」と書かれた貼紙あり。

一元一 五 [寛永五年給人分限帳]

江戸 写

尾記録・記録懸 縦 一

・日記懸

*見返しに「旧日記所本甲 寛永五年給人分限帳 壹冊 第二百十八番」と書かれた貼紙あり。

一元一 七 [慶安分限帳] (慶安元年改)

江戸 写

尾記録・日記懸 縦 一

*見返しに「旧日記所本甲 慶安年中分限帳 壹冊 第二百十四番」と書かれた貼紙あり。

一元一 八 [正徳年中分限帳]

江戸 写

日記所 縦 一

*見返しに「旧日記所本甲 正徳年中分限帳 壹冊 第二百十七番」と書かれた貼紙あり。

一元一 九 [明暦三年丁酉分限帳]

江戸 写

日記所 縦 一

*見返しに「旧日記所本甲 明暦三年丁酉分限帳 壹冊 第二百十三番」と書かれた貼紙あり。

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態

数 量

一三―二 〔元禄八亥頃分限帳〕

嘉永七年写

日記所

縦

一

*見返しに「旧日記所本甲 元禄八亥頃分限帳 巻冊 第三百五十九番」と書かれた貼紙あり。末尾に「此元禄分限帳ハ元禄八亥年頃之分限ヲ相見候、御鉄炮玉葉奉行石原東一郎蔵書なるを借り写し置御書物とハなしぬ 嘉永七年寅六月」という奥書あり。

一三―三 〔延享四卯分限帳〕

嘉永七年写カ

日記所

縦

一

*末尾に「此延享四卯分限帳ハ、御鉄炮玉葉奉行石原東一郎蔵書なるを借り受写置御書物とハなしぬ」という奥書あり。

一三―三 明治二年己巳十二月之姿 内家分限帳〔明治三年分限帳〕

明治初年写

日記所

縦

一

*見返しに「旧日記所本乙 内家分限帳 巻冊 第七番」と書かれた貼紙あり。

一三―四 〔寛政分限帳〕〔寛政一一年カ〕

江戸 写

日記所

縦

一

*見返しに「旧日記所本甲 寛政十一己未分限帳 巻冊 第三百十八番」と書かれた貼紙あり。

一三―五 〔嘉永三庚戌分限帳〕

江戸 末期写

日記所

縦

二

*第一冊の見返しに「旧日記所本甲 嘉永三年庚戌分限帳 二冊 第三百十九番」と書かれた貼紙あり。

一三―七 〔安政御役名順〕

江戸 末期写

日記所

縦

一

*見返しに「旧日記所本甲 安政御役名順 巻冊 第三百十八番」と書かれた貼紙あり。

一三―八 〔天保十三年寅六月出来 御出入之衆由緒書〕

江戸後期写

日記所

縦

一

*尾張藩に出入りする懇意の大名・旗本らについて記したもの。見返しに「旧日記所本甲 御出入之衆由緒書 巻冊 第四百十三番」と書かれた貼紙あり。

一三―三 〔尾州寛永分限帳・紀州宝永分限帳・同寛政御礼式帳・文政年間写 水戸家大概順〕

文政年間写

尾記録・記録懸

縦

一

*「尾州寛永分限帳」「紀州家大概順」(いずれも文政元年に御右筆部屋留役御記録掛りが転写したもの)・「寛政五丑歳御礼式」「水戸家大概順」(文政五年写)・「紀州御役名順」(文政一一年写)の五種類を収める。見返しに「旧日記所本甲 尾州寛永分限帳・紀州宝永分限帳・同寛政御礼式帳・水戸家大概順 巻冊 第四百十七番」と書かれた貼紙あり。

一三―三 両家在江戸在尾州吟味頭書

江戸後期写

縦

一

*成瀬氏・竹腰氏の参府・在国の別を記したもの。記述は元和三年より嘉永二年に至る。見返しに「旧日記所本乙 両家在江戸在尾州吟味頭書 巻冊 第七

十四番」と書かれた貼紙あり。

一元一四 (両家衆上下往古ヨリ仕来吟味留)

江戸後期写

縦 一

* 一三九一三と同じ形式で記されたもの。記述は元和三年に始まり文化二年で終わっている。見返しに「旧日記所本甲 両家衆上下往古ヨリ仕来吟味ノ留 壹冊 第百一十番」と書かれた貼紙あり。

一元一五 (寛政二戌年差出有之 竹腰由緒書)

江戸後期写

縦 一

* 竹腰正信・成方・正晴の系譜書および附録を収める。題簽には後筆で「五」と記されているが一冊のみが現存する。見返しに「旧日記所本乙 竹腰由緒書 壹冊 第七十一番」と書かれた貼紙あり。

一元一六 (慶長十三年 本参侍帳)

江戸後期写

尾記録・日記懸

縦 一

* 見返しに「旧日記所本甲 本参侍帳 壹冊 第百一十七番」と書かれた貼紙あり。

一元一七 国字分名集(文政年間成立)

江戸後期写

日記懸

縦 二

* 文政二年に刊行された旗本の武鑑を転写したもの。乾巻は万石以下一〇〇〇石まで、坤巻は一〇〇〇石より五〇〇石までの旗本を「いろは」順に配列する。見返しに「旧日記所本甲 国字分名集 式冊 第百四十二番」と書かれた貼紙あり。

一元一八 役名規式(弘化二年 役名規式)

弘化二年筆

縦 一

* 尾張藩の諸職の支配系統や役順を示したもの。短冊状の紙片を貼り込む形式をとっている。

一元一九 (文化年中成 支配方明際)

文化年間筆

縦 一

* 役職ごとに就任者の閥歴を記した紙片を貼り込んだもの。記載形式は一三八一三九「高附」や一三八一四一「支配役寄」に近似している。見返しに「旧日記所本乙 支配方明際 壹冊 第八十七番」と書かれた貼紙、「支配方明際 壹冊 かノ箱」というドケ札あり。

一元二〇 御国御領分御殿御屋敷等当時存亡吟味之留(嘉永元申 十月出来 尾州并岐阜御殿等当時存亡吟味留)

嘉永元年筆

御日記所(編)

縦 一

* 見返しに「嘉永元年十月出来 尾州并岐阜御殿等当時存亡吟味留 壹冊 第百七十六番」と書かれた貼紙あり。

一元二一 御屋敷吟味年順頭書

江戸 写

縦 一

* 元和二年より慶安三年までの江戸・大坂屋敷に関する記事を列挙したもの。表紙に「旧藩日記所坤百式拾四」という朱書あり。

一元二二 官邸使覽写(江戸御屋敷使覽)

江戸 写

日記所

縦 一

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番 号 表 題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

*明暦二年より天明三年までの尾張藩江戸屋敷に関する記事を収める。見返しに「旧日記所本甲 江戸御屋敷便覧 巻冊 第二百七十四番」と書かれた貼紙あり。

一元一四 (寛政十三四年春出来 御屋敷吟味)

寛政一三年筆

邸中

縦

*見返しに「旧日記所本乙 御屋敷吟味 巻冊 第八十番」と書かれた貼紙あり。

一元一三 (江戸・尾州・大坂 御屋敷吟味一卷)

寛政一三年頃筆

尾記録・日記懸 縦

*一三九一三四とほぼ同内容だが、前半部を中心に下ケ札や朱書が多く見られることから、下書ではないかと考えられる。見返しに「旧日記所本甲 江戸・尾州・大坂 御屋敷吟味一卷 式冊 第二百六十六番」と書かれた貼紙あり。

一元一五

竹腰山城守殿家ニ所持有之候二條御城御普請之節覚書
・図面等之写(寛永中二條御城御普請之節覚書図面等之写)

江戸 写

尾記録・日記懸 縦

*末尾に「二條御城指図」三枚(袋入り)を添える。

一元一四 甲州高目録(甲州村高附)(元和元年)

文政八年写

尾記録・日記懸 縦

*見返しに「旧日記所本甲 甲州村高附 巻冊 第二百八十六番」と書かれた貼紙あり。末尾に「此村高附ハ堀与五郎蔵書を以其俟写置之 文政八四年十二月 御記録所附」という奥書あり。

一元一四 (諸留書付并絵図等目録)

江戸 写

尾記録・日記懸 縦

*見返しに「旧日記所本甲 諸留書付并絵図等目録 巻冊 第二百一番」と書かれた貼紙、「諸留書付并絵図等目録二冊」という下ケ札あり。第一丁裏には「留書方雑帳目録一 諸留書付并絵図等目録 事蹟録調之節役所方差出候由ニ而御勝手方御勘定所ニ有之ニ付写置」と記されており、また末尾には「此巻冊役所江請取置候様留書住山新八郎申聞候付請取之候事」という奥書がある。記載されている帳面類の年次は延享三年が下限となっている。

一元一四 (尾濃御国境吟味一卷)(寛文〳文化)

江戸後期写

尾記録・日記懸 縦

一元一四 (御家御代々御条目・火事御定)(寛永〳天保)

江戸後期写

日記所 縦

*見返しに「旧日記所本甲 御家御代々御条目・火事御定 巻冊 第二百廿一番」と書かれた貼紙あり。

一元一四 (校合物伺留)

文政二年筆

縦

*見返しに「旧日記所本甲 校合物伺留 巻冊 第二百八十番」と書かれた貼紙あり。

三六― 留 文化三寅年以來留帳寄編集之節引書留冊目錄(留帳寄 江戸後期写 日記懸 縦 一
引書目錄)

*見返しに「旧日記所本申 留帳寄編集之節引書留之目錄 沓冊 第百九十九番」と書かれた貼紙あり。

三六― 罌 御記録・御実録其外校合起源吟味書拔(天明六〃文化元 江戸後期写 縦 一
年)

*見返しに「旧日記所本申 御記録・御実録其外校合起源吟味書拔 沓冊 第百四番」と書かれた貼紙あり。

三六― 罌 (江戸ヨリ差越候御帳覚留)(文政年間 江戸後期写 縦 一

*「御側江上り居候御日記下帳江戸ヨリ取寄写出来相成候下帳之扣」と「江戸方ニ有之御年譜草稿八郎左衛門仍尋彼地江引合取寄置候目錄之事」の二つからなる。見返しに「旧日記所本申 江戸ヨリ差越候御帳覚留 沓冊 第百四十番」と書かれた貼紙あり。

三六― 罌 毎月御側江差上候頭書之内懸ケ紙為見合張置候帳 弘化二〃嘉永年 御側懸留役(編 縦 一
間筆)

*見返しに「旧日記所本乙 毎月御側江差上候頭書之内懸ケ紙為見合張置候帳 沓冊 第七十一番」と書かれた貼紙あり。

三六― 罌 御櫓長持式棹之人記写(御櫓長持二棹之人記写) 江戸後期写 御勘定奉行(編 尾記録・日記懸 縦 一

*見返しに「文政元寅年十二月御勘定奉行差出候御櫓長持二棹之人記写」と書かれた貼紙あり。

三六― 罌 (江戸表御日記所御用向当分被見合候付懸合一卷)(天保 江戸末期写 縦 一
一五〃弘化四年)

*見返しに「旧日記所本申 江戸表御日記所御用向当分被見合候付懸合一卷 沓冊 第百九十九番」と書かれた貼紙あり。

三六― 罌 (御記録調方之心得帳) 江戸後期写 日記懸 縦 一

*見返しに「旧日記所本申 御記録調方ノ心得帳 沓冊 第百九十八番」と書かれた貼紙あり。

三六― 罌 (御記録調方追々伺等覚) 寛政九〃文化二 年筆 縦 一
年筆

*見返しに「旧日記所本申 御記録調方追々伺等覚 沓冊 第百五番」と書かれた貼紙あり。

三六― 罌 (寛永覚書) 江戸 写 蓬左A・尾記録・日記懸 縦 一

番 号 表 題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

*御日記懸による写。寛永一〇年より慶安三年までの記事を収める。末尾に御側本「寛永日記」と校合を行った旨の奥書あり。

一元一 癸

〔慶長覚書〕

江戸 写

邸中

縦

一

*慶長三年より元和二年までの記事を収める。

一元一 丑

〔敬公御上下抄〕

文政二年筆

御記録御用懸(編)

尾記録・日記懸 縦

一

*徳川義直の上洛や関東下向の日付について、江戸表からの問い合わせに応じて私録などから調査した結果をまとめたもの。見返しに「旧日記所本甲敬公御上下抄 卷冊 第三十三番」と書かれた貼紙あり。

一元一 丑

〔慶安元年子七月廿日 有馬御湯治之時御供路銀並に道中御上下有馬にて御遣〕

江戸 写

尾記録・日記懸 縦

一

一元一 子

〔旧事帳〕

江戸 写

邸中

縦

一

*徳川義直の行動を中心に、元和元年から同九年に起こった出来事を月日順に列挙したもの。

一元一 子

尾陽産物志(元文元年頃成立カ)

江戸 写

金湯・徳図記

縦

三

*別題「尾張国産物志」。見返しに「旧日記所本乙 尾陽産物志 参冊 第六十五番」「特 尾陽産物志 共三冊」と書かれた貼紙あり。

一元一 子

木曾山内 生立難木葉図

江戸 写

縦

一

一元一 子

御国産吟味之留

天保一一年筆

御日記所(編)

縦

一

*御側御用人佐藤源左衛門の求めにより、御日記所において国産の品々を取り調べて提出した留帳の控。

一元一 子

〔御成記〕

江戸 写

御記録所(編)

邸中

縦

二

*第一冊には、元和九年二月の「公方様尾張中納言殿江御成次第」、寛永二年二月の「大御成記」を、第二冊には慶安三年六月の「御代替聞書」、元禄六年四月の「御代替以来聞書日記」、元禄二年七月の「御代替聞書」を収録している。第一冊の見返しに「坤九拾四番」「御成記」冊」という貼紙、「東下 半村 21 御家写 167 御成記」冊」と書かれた下ケ札あり。

一元一 六

〔武家命令究事〕

江戸 写

蓬左A・邸中

縦

二

*尾張藩が発した触書を諸書から抜き出してまとめたもので、第一冊は寛永一〇年より慶安二年まで、第二冊は慶安三年より元禄六年までの記事を収める。

一元一 七

〔相応院様御紋吟味之留〕

文政二年筆

記録懸・日記懸 縦

一

*相応院(徳川義直の生母於亀之方)の紋形について、御側大寄合からの尋問に応じて作成されたもの。

一五―七 (木曾路旧跡書)

嘉永七年筆

縦 四

*江戸へ下向する際の往還近くに位置する寺社や名所・旧跡などを書き上げさせたもの。

第一冊 御下り之節御見通ニ可成ヶ所之分 杉出町町方支配(寅正月)・(小牧御代官支配所神社仏閣名所旧跡書上)

第二冊 木曾路宿並濃州分神社仏閣名所旧跡之記(太田御代官支配所・寅二月)

第三冊 木曾路往還名所旧跡并神社寺院村名等調帳(寅二月)

第四冊 本山宿方板橋宿迄神社寺院名所旧跡等書上(嘉永七年三月)

一五―八 寺社領之事

明治 写カ

縦 一

*見返しに「旧日記所本乙 寺社領之事 壹冊 第六番」と書かれた貼紙あり。版心に「徳川」と印刷された野紙に書き写されている。

一五―九 (瑞龍院様御代奉書并諸書付類之写)

江戸 写

縦 三

*第二冊・第三冊の外題は「瑞龍院様御代諸御書付類之写」となっている。

一五―十

寛政五年筆

縦 一

(芳樹院殿御初御歴代之内御位牌三州大樹寺江源敬様
々御寄附之儀吟味并大樹寺御由緒之記)

*幕府の問い合わせにより取り調べた内容を書き留めたもの。見返しに「旧日記所本甲 芳樹院殿御初御歴代之内御位牌三州大樹寺江源敬様御寄附之儀吟味并大樹寺御由緒ノ記 壹冊 第一百番」と書かれた貼紙あり。

一五―一〇

(公義御感状御書御褒美書出写)(天和四年成立)

江戸 写

御日記懸り(編)

尾記録・日記懸

縦 一

・記録懸

*天和四年に幕府の命によって尾張藩士が所持する家康・秀忠の御書の写を提出させた際にまとめられたものの写。見返しに「旧日記所本甲 公義御感状御書御褒美書出写 壹冊 第一百七番」と書かれた貼紙あり。

一五―一〇

綱吉公綱誠公麴町亭御成略記(綱吉公御成略記)(元禄一 江戸 写

邸中

縦 一

〇年)

*見返しに「旧日記所本甲 綱吉公御成略記 壹冊 第百八番」と書かれた貼紙あり。

一五―一〇

江戸 写

縦 一

(河州安福寺山内瑞龍院様御石碑面御法号其余銘文吟
味之事・安福寺歴代諱等之事・此外右寺へ尋之一件)

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態

数 量

(文化・嘉永)

*文化一三年正月付の表題史料のほか、文政二年の「靈宝目録」「虫千品目録」「御寄附并拝領之品目録」、嘉永五年の「境内町数初当時之模様御尋ニ付書付」を収める。

一五―三

平岩出之衆之内佐枝主馬組 大坂御陣御供帳(平岩出之衆之内 大坂御陣御供之帳) 江戸 写

尾記録・日記懸 縦 一

*御日記懸による写。見返しに「東下 半村34 雑史 大坂御陣御供之帳 一冊 写1599」という貼紙、内表紙に「坤百番」と朱書された貼紙あり。

一五―四

大坂冬御陣之記

江戸後期写

御日記懸り(編)

尾記録・日記懸 縦 一

*見返しに「東下 半村28 雑史 大坂冬御陣之記 一冊 写1605」と書かれた貼紙あり。第一丁裏には文久二年八月付の校訂に関する貼紙がある。

一五―五

大坂御陣之節相用ひ候差物家々持伝并記録等之写(寛政七年) 江戸後期写

邸中 縦 一

*内表紙には「四冊之内」とある。見返しに「東下 半村32 雑史 大坂御陣之節相用ひ候差物家々持伝并記録之寄 一冊 写1590」と書かれた貼紙あり。

一五―六

大坂夏御陣御金拝借帳

江戸後期写

御記録所(編)

尾記録・日記懸 縦 一

*見返しに「東下 半村30 雑史 大坂夏御陣御金拝借帳 一冊 写1588」と書かれた貼紙あり。内表紙には「事蹟録」との校合を行った旨の貼紙がみられる。また末尾には「右之者御金拝借冬御陣之記江誤入有之候付綴分候」という文政二年正月付の奥書あり。

一五―六

(御記録)下留帳寄・類聚頭書

江戸 写

縦 一

*「旧日記所本甲 御記録下留帳寄・類聚頭書 老冊 第二百六十九番」と書かれた紙片がはさみ込まれている。

一五―七

(千賀家古記録)(慶長五〇慶安四年)

江戸後期写

尾記録・記録懸 縦 一

*末尾に「文政二年己卯七月千賀与八郎方差出候付表紙付置也」という御記録御用懸による奥書あり。

一五―八

源懿様御代より御改革等書拔(源懿様御代ヨリ御改革等書拔)(天保一〇弘化二年) 江戸 写

縦 一

*見返しに「旧日記所本乙 源懿様御代ヨリ御改革等書拔 老冊第七十六番」と書かれた貼紙あり。

一五―九

(夫銀・路銀御扶持方極)

江戸 写

日記所 縦 一

一五―一五
〔敬公御夢想倭漢〕(寛永四年)
*見返しに「旧日記所本甲 夫銀・路銀御扶持方極 壹冊 第二百番」と書かれた貼紙あり。
江戸後期写
記録懸・日記懸 縦 一

一五―一六
〔御軍用記録〕
*御右筆部屋御日記懸による写。見返しに「敬公御夢想倭漢 壹冊 第百番」と書かれた貼紙あり。
寛政五年写
尾記録・日記懸 縦 一

一五―一六
〔江戸御普請之時無役之帳〕(寛永五年)
*内表紙裏に「此書御軍用御用ニ付長屋三太夫藏書之由差出候付写置候也 寛政五年丑三月」という記述あり。見返しに「旧日記所本甲御軍用記録 壹冊 第百六十六番」と書かれた貼紙あり。
江戸後期写
日記懸 縦 一

一五―一六
〔江戸御普請之時無役之帳〕(寛永五年)
*寛永五年極月に平岩弥右衛門・間宮權太夫・長野数之助が記したものの写。見返しに「旧日記所本甲 江戸御普請ノ時無役之帳 壹冊 第百三十二番」と書かれた貼紙あり。
江戸末期写
日記所 縦 一

一五―一六
性高院様江相勤当時相続之家并別家(文化三年・安政二年)
*文化三年および安政二年作成の書上を御日記所が書き写したものの。
江戸末期写
日記所 縦 一

一五―一七
〔座頭・盲女配当錢極〕(寛政三年)
*見返しに「座頭・盲女共へ配当申請方当所極ノ趣ニテ差出候帳 壹冊 第百六番」と書かれた貼紙あり。末尾に「此壹冊、御右筆部屋ニ有之候付、借用いたし写置ク者也 天保四年巳正月」という奥書あり。
天保四年写
縦 一

一五―一七
〔温故録〕(宝永二・宝暦二二年)
*江戸城への登城や御成・参詣などの先例を記したもの。見返しに「旧日記所本甲 温故録 壹冊 第百五番」と書かれた貼紙あり。
江戸 写
邸中 縦 一

一五―一八
〔泰心院様御部屋一卷〕(役寄帳)
*見返しに「旧日記所本乙 泰心院様御部屋一卷 壹冊 第七十九番」と書かれた貼紙あり。
江戸 写
縦 一

一五―一八
御冥加普請之記并図(寛政二年自序)
*見返しに「旧日記所本甲 御冥加普請之記并図 壹冊 第百五十九番」「坤印 御冥加普請之記并図 一」と書かれた貼紙あり。
江戸後期刊
一東実雄〔著〕
版元未詳
縦 一

一五―一八
〔古記録〕(運上奉行御用日記・後欠)
*見返しに「旧日記所本甲 御冥加普請之記并図 壹冊 第百五十九番」「坤印 御冥加普請之記并図 一」と書かれた貼紙あり。
元禄一七年筆
縦 一

番 号 表 題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

*正月一三日より二月七日までの記事を収める。見返しに「旧日記所本甲 古記録 卷冊 第百六十五番」と書かれた貼紙あり。

三九一〇八 「父母等之忌并産穢御免相成候日数根究」(天保七年)

江戸 写

縦 一

*見返しに「旧日記所本甲 父母等ノ忌并産穢御免相成候日数根究 卷冊 第百七十三番」と書かれた貼紙あり。

三九一二〇 於尾州御場懸り勤向

江戸 写

縦 一

*見返しに「旧日記所本甲 於尾州御場懸り勤向 卷冊 第百廿九番」と書かれた貼紙あり。

三九一二二 尾州ニ而御鷹野御成之節奥向取扱之究

江戸 写

縦 一

*見返しに「旧日記所本甲 尾州ニ而御鷹野御成之節奥向取扱ヒノ究 卷冊 第百廿七番」と書かれた貼紙あり。

三九一二三 服忌覚書(増補 服忌覚書)(元文ノ文政)

江戸 写

縦 一

*第一丁に「明治三十年十月 服忌之儀追加之部者当時御用ひ無之旨竹内宮内権大属金谷書記申聞候事 取扱 中野惣太郎」という貼紙あり。見返しに

「旧日記所本甲 増補服忌覚書 卷冊 第百七十三番」と書かれた貼紙あり。

三九一二四 「御家年中頭書」

江戸後期写

縦 一四

*本文中には訂正の押紙や見せ消し箇所が多く見られる。第一冊の見返しに「旧日記所本乙 御家年中頭書 拾四冊 第六十四番」と書かれた貼紙あり。

第一冊 正月の中頭書

第二冊 二月中頭書

第三冊 三月中頭書

第四冊 四月中頭書

第五冊 五月中頭書

第六冊 閏五月中頭書

第七冊 六月中頭書

第八冊 七月中頭書

第九冊 八月中頭書

第一〇冊 閏八月中頭書

第一一冊 九月中頭書

第一二冊 十月中頭書

第一三冊 十一月中頭書

第一四冊 十二月中頭書

三九一三〇 御隠居御家督ニ付公辺御礼品等一卷 尾州取扱(文政一 江戸後期写

〇年)

縦 一

三九一三三 「御虞祭御祔祭取扱留」

弘化三年写

縦 一

「元一」三〔年中頭書〕

江戸 写

縦 二〇

*第一冊の見返しには「旧日記所本乙 年中頭書 式拾冊 第九十一番」と書かれた貼紙があるが、実際には二種類以上の端本を組み合わせて年間を通せるように並べ替えた形で構成されている。

第一冊	年中頭書	第二冊	御敬日
第三冊	正月中頭書	第四冊	二月中頭書
第五冊	二月中頭書	第六冊	三月中頭書
第七冊	三月中頭書	第八冊	四月中頭書
第九冊	四月中頭書	第一〇冊	閏五月中頭書
第一一冊	六月中頭書	第一二冊	七月中頭書
第一三冊	八月中頭書	第一四冊	閏八月中頭書
第一五冊	閏八月中頭書	第一六冊	九月中頭書
第一七冊	十月中頭書	第一八冊	十月中頭書
第一九冊	十一月中頭書	第二〇冊	十二月中頭書

「元一」四 日記

安永二〜寛政一
二年筆

縦 四

*各冊の見返しに「日記宅冊 辛第九番 16」(第一冊)、「日記宅冊 辛第十番 17」(第二冊)、「日記宅冊 辛第十一番 18」(第三冊)、「日記宅冊 辛第十二番 19」(第四冊)と書かれた貼紙あり。旧蓬左文庫によって付けられた下ケ札には「女中方日記」とある。

第一冊	安永二年一二月	第二冊	安永六年一二月
第三冊	寛政一一年正月〜三月	第四冊	寛政二二年一〇月〜一二月

「元一」元 公辺諸向年中仕込下書

天保〜明治筆

縦 二一

*「公辺諸向年中仕込下書」(第一冊)と「慶応年中天璋院様一件留」(第二冊)からなる。第一冊には、拝領物に対する返書など、尾張藩の奥向から公儀へ差し出す書簡の下書などが収められており、明治三年まで書き継がれている。第二冊は、こうした文書のうち、天璋院関係をまとめたものと推測される。

「元一」四 年頭御用達しものひかへ〔年頭御用御達しものひかへ〕

江戸 写

表御右筆間〔編〕

縦 二一

(天明〜慶応)

*年頭の御用品の調達について御広敷御用人へ達した内容を書き留めたもの。第一冊は天明六〜天保一二年、第二冊は天保二〜慶応三年の記事を収める。各冊の見返しに「年頭御用達物扣宅冊 辛第十七番 20」(第一冊)、「年頭御用達物扣宅冊 辛第十八番 21」(第二冊)と書かれた貼紙あり。

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態 数 量

三〇一四 御帰国ニ付御発駕之節御式之次第

江戸 写

* 題簽に「三十三」という朱筆あり。訂正の掛紙が多数みられる。

三〇一五 御参府ニ付御着座之節御式之次第(御参府ニ付御著座之当日御式書)

江戸 写

* 題簽に「三十三」という朱筆あり。

三〇一六 (所々御屋敷構公方様御成道相成候節御手当之定)

江戸 写

* 御在居御屋敷・市ヶ谷御屋敷・川田久保屋敷・麴町御屋敷・向御屋敷・戸山御屋敷・高田御屋敷・築地御屋敷における「定」を収める。題簽に「八」という朱筆あり。

三〇一七 江戸御寺近所若火災有之且御位牌奉退候節之御儀定(寛政九年)

江戸 写

* 題簽に「十八」という朱筆あり。

三〇一八 (領知御黒印・御制札御判物書法)(寛政六年)

江戸 写

* 題簽に「七」という朱筆あり。

三〇一九 御隠居御家督ニ付大凡頭書写

文政一〇年写

公 辺 方 (編)

* 第一丁に本史料が文政九年の「御内沙汰之趣」にしたがって取り調べた内容の写である旨の記述あり。

三〇二〇 殿様御六十御賀帳(寛政四年)

江戸 写

三〇二一 (御成御用ニ関スル留帳)

江戸 写

* 元禄一〇年に行われた將軍綱吉の尾張藩麴町屋敷への御成に関するもの。

第一冊 御成御用相勤候江戸・尾州諸職人初メ四件

第二冊 御成御殿御座敷并杉戸之絵割

第三冊 殿様・右兵衛督様・摂津守様・出雲守様・但馬守様・稲姫様 御内証方御献上之御道具

第四冊 御成御殿御役人衆休所江出ル御道具 御居宅御馳走所之席江出ル御道具

第五冊 御茶道方江拵相渡御道具

縦 八

縦 一

縦 一

縦 一

縦 一

縦 一

縦 一

縦 一

第六冊 御休息之間ニ御飭置直ニ御献上之御道具 御手土産ニ被遊候様ニと御献上之御道具

第七冊 御成書院御床御筆御懸物之前ニ御飭 外数件

第八冊 御成御殿御役人衆休所へ出ル御道具席付 御居宅御馳走所江出ル御道具席付 御広間方江出ル御道具共

一六―二〇六 (利姫様御引移御婚礼御用向) 安政三年筆 縦 一

* 十一月一五日より十二月一四日までの記事を収める。表紙に「三さつ之内」とあるところから本来は三冊組であったと考えられるが、現存するのは一冊のみ。見返しに「利姫様御引移御婚礼御用留 壹冊 辛第三番36」と書かれた貼紙あり。

一六―二〇七 (利姫様芸州家江御縁組御内意并御多組被仰出之留) 嘉永四〇同七年筆 縦 一

* 嘉永四年五月一六日より同七年七月一八日までの記事を収める。見返しに「利姫様芸州家江御縁組御内意并御縁組被仰出之留 壹冊 辛第四番35」と書かれた貼紙あり。

一六―二〇七 (利姫様御紐解御祝の留) 天保一三年筆 縦 一

* 一〇月一四日より十二月二日までの記事を収める。第一丁に「利姫様御紐解御祝の留 壹冊 辛第一番34」と書かれた貼紙あり。

一六―二〇八 (中将様・愛姫様御婚礼御式被為整候留) 文政一〇同一年筆 縦 一

* 文政一一年六月九日より同一二年九月二四日までの記事を収める。見返しに「中将様・愛姫様御婚礼御式被為整候留 壹冊 辛第二番33」と書かれた貼紙あり。

一六―二〇八 鎌倉御道順・御泊割・御行列 江戸 写 横半 一

一六―二〇九 御直段積書(召物・帶地其外ニ付) 江戸 筆 近江屋市右衛門 ほか二名 縦 一

* 御広敷御用へ宛てて差し出されたもの。見返しに「御直段積書 壹冊 辛第四十二番28」と書かれた貼紙あり。

一六―二一〇 (御精進日) 江戸末期写 縦 一

* 「公義御精進日」「御家御精進日」「四ツ谷御家江付御精進」を記したもので、徳川慶勝の時代に作成されたものと考えられる。見返しに「御精進日 壹冊 辛第五番32」という貼紙あり。

一六―二一一 不時御登城之御次第御城帳并御手続書按(文化〰天保) 江戸後期写 縦 一

* 第一冊には内表紙に「斉朝卿御代」という朱筆があり、文化三年二月より文政九年五月までの記事を収める。第二冊は文政一〇年八月より天保三年三

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番号表

題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

月までの内容を収録している。第二冊の見返しに「旧日記所本乙 不時御登城之御次第御城帳并御手統書抜 式冊 第八十二番」と書かれた貼紙あり。

150-1 (御記録)

江戸後期写

滝川忠暁(奉命)

張府B

縦

三五

*尾張藩の編年記録。滝川忠暁が命を受け、成田喜起・小笠原成章・中西長憲が総裁をつとめ、大塚長幹・角田彪が修撰し、水野孟清が起稿抄録を担当した。後掲する「御日記(一四三―五)」の呼び方にならって「公辺御記録」「御家御記録」とも呼ばれるが、題簽には「御家」の表記はみられない。

- | | | | | | |
|------|--------|-------|-------|---------|-------|
| 第一冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 元禄十四年 | 自正月至六月 | 御滞府 |
| 第二冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 元禄十四年 | 自七月至十二月 | |
| 第三冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 元禄十五年 | 自正月至六月 | 御滞府 |
| 第四冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 元禄十五年 | 自七月至十二月 | |
| 第五冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 元禄十六年 | 自正月至六月 | 御滞府 |
| 第六冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 元禄十六年 | 自七月至十二月 | |
| 第七冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 宝永元年 | 自正月至六月 | 御滞府 |
| 第八冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 宝永元年 | 自七月至十二月 | |
| 第九冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 宝永二年 | 自正月至六月 | 御滞府 |
| 第一〇冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 宝永二年 | 自七月至十二月 | |
| 第一一冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 宝永三年 | 自正月至六月 | 御滞府 |
| 第一二冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 宝永三年 | 自七月至十二月 | |
| 第一三冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 宝永四年 | 自正月至六月 | 御滞府 |
| 第一四冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 宝永四年 | 自七月至十二月 | |
| 第一五冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 宝永五年 | 自正月至六月 | 御滞府 |
| 第一六冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 宝永五年 | 自七月至十二月 | |
| 第一七冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 宝永六年 | 自正月至六月 | 御帰国 |
| 第一八冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 宝永六年 | 自七月至十二月 | |
| 第一九冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 宝永七年 | 自正月至六月 | 三月御参府 |
| 第二〇冊 | 円覚院様御代 | 公辺御記録 | 宝永七年 | 自七月至十二月 | |

- 第二一冊 円覚院様御代 公辺御記録 正徳元年 自正月至六月 四月御帰国
- 第二二冊 円覚院様御代 公辺御記録 正徳元年 自七月至十二月
- 第二三冊 円覚院様御代 公辺御記録 正徳二年 自正月至六月 三月御参府
- 第二四冊 円覚院様御代 公辺御記録 正徳二年 自七月至十二月
- 第二五冊 円覚院様御代 公辺御記録 正徳三年 自正月至六月 御滞府
- 第二六冊 円覚院様御代 真巖院様八月廿九日御家督 晃禪院様十一月十一日御家督 公辺御記録 正徳三年 自七月至十二月
- 第二七冊 晃禪院様御代 公辺御記録 正徳四年 自正月至六月 御滞府
- 第二八冊 晃禪院様御代 公辺御記録 正徳四年 自七月至十二月
- 第二九冊 晃禪院様御代 公辺御記録 正徳五年 自正月至六月 御滞府
- 第三〇冊 晃禪院様御代 公辺御記録 正徳五年 自七月至十二月
- 第三一冊 晃禪院様御代 公辺御記録 享保元年 自正月至六月 御滞府
- 第三二冊 晃禪院様御代 公辺御記録 享保元年 自七月至十二月
- 第三三冊 晃禪院様御代 公辺御記録 享保二年 自正月至六月 四月御帰国
- 第三四冊 晃禪院様御代 公辺御記録 享保二年 自七月至十二月
- 第三五冊 晃禪院様御代 公辺御記録 享保三年 自正月至六月 三月御参府
- 第三六冊 晃禪院様御代 公辺御記録 享保三年 自七月至十二月
- 第三七冊 晃禪院様御代 公辺御記録 享保四年 自正月至六月 四月御帰国
- 第三八冊 晃禪院様御代 公辺御記録 享保四年 自七月至十二月
- 第三九冊 晃禪院様御代 公辺御記録 享保五年 自正月至六月 三月御参府
- 第四〇冊 晃禪院様御代 公辺御記録 享保五年 自七月至十二月
- 第四一冊 晃禪院様御代 公辺御記録 享保六年 自正月至六月 四月御帰国
- 第四二冊 晃禪院様御代 公辺御記録 享保六年 自七月至十二月
- 第四三冊 晃禪院様御代 公辺御記録 享保七年 自正月至六月 三月御参府
- 第四四冊 晃禪院様御代 公辺御記録 享保七年 自七月至十二月
- 第四五冊 晃禪院様御代 公辺御記録 享保八年 自正月至六月 四月御帰国

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態

数 量

第四六冊	晃禪院様御代 公辺御記録	享保八年	自七月至十二月		
第四七冊	晃禪院様御代 公辺御記録	享保九年	自正月至六月 三月御参府		
第四八冊	晃禪院様御代 公辺御記録	享保九年	自七月至十二月		
第四九冊	晃禪院様御代 公辺御記録	享保十年	自正月至六月 四月御帰国		
第五〇冊	晃禪院様御代 公辺御記録	享保十年	自七月至十二月		
第五一冊	晃禪院様御代 公辺御記録	享保十一年	自正月至六月 三月御参府		
第五二冊	晃禪院様御代 公辺御記録	享保十一年	自七月至十二月		
第五三冊	晃禪院様御代 公辺御記録	享保十二年	自正月至六月 四月御帰国		
第五四冊	晃禪院様御代 公辺御記録	享保十二年	自七月至十二月		
第五五冊	晃禪院様御代 公辺御記録	享保十三年	自正月至六月 三月御参府		
第五六冊	晃禪院様御代 公辺御記録	享保十三年	自七月至十二月		
第五七冊	晃禪院様御代 公辺御記録	享保十四年	自正月至六月 四月御帰国		
第五八冊	晃禪院様御代 公辺御記録	享保十四年	自七月至十二月		
第五九冊	晃禪院様御代 公辺御記録	享保十五年	自正月至六月 三月御参府		
第六〇冊	晃禪院様御代 章善院様十一月廿八日御家督 公辺御記録	享保十五年	自七月至十二月		
第六一冊	章善院様御代 公辺御記録	享保十六年	自正月至六月 四月御帰国		
第六二冊	章善院様御代 公辺御記録	享保十六年	自七月至十二月		
第六三冊	章善院様御代 公辺御記録	享保十七年	自正月至六月 三月御参府		
第六四冊	章善院様御代 公辺御記録	享保十七年	自七月至十二月		
第六五冊	章善院様御代 公辺御記録	享保十八年	自正月至六月 四月御帰国		
第六六冊	章善院様御代 公辺御記録	享保十八年	自七月至十二月		
第六七冊	章善院様御代 公辺御記録	享保十九年	自正月至六月 三月御参府		
第六八冊	章善院様御代 公辺御記録	享保十九年	自七月至十二月		
第六九冊	章善院様御代 公辺御記録	享保二十年	自正月至六月 閏三月御帰国		

- 第七〇冊 章善院様御代 公辺御記録 享保二十年 自七月至十二月
- 第七一冊 章善院様御代 公辺御記録 元文元年 自正月至六月 三月御参府
- 第七二冊 章善院様御代 公辺御記録 元文元年 自七月至十二月
- 第七三冊 章善院様御代 公辺御記録 元文二年 自正月至六月 四月御帰国
- 第七四冊 章善院様御代 公辺御記録 元文二年 自七月至十二月
- 第七五冊 章善院様御代 公辺御記録 元文三年 自正月至六月 三月御参府
- 第七六冊 章善院様御代 公辺御記録 元文三年 自七月至十二月
- 第七七冊 章善院様御代 源戴様正月十三日御相続 公辺御記録 元文四年 自正月至六月 四月御帰国
- 第七八冊 源戴様御代 公辺御記録 元文四年 自七月至十二月
- 第七九冊 源戴様御代 公辺御記録 元文五年 自正月至六月 三月御参府
- 第八〇冊 源戴様御代 公辺御記録 元文五年 自七月至十二月
- 第八一冊 源戴様御代 公辺御記録 寛保元年 自正月至六月 四月御帰国
- 第八二冊 源戴様御代 公辺御記録 寛保元年 自七月至十二月
- 第八三冊 源戴様御代 公辺御記録 寛保二年 自正月至六月 三月御参府
- 第八四冊 源戴様御代 公辺御記録 寛保二年 自七月至十二月
- 第八五冊 源戴様御代 公辺御記録 寛保三年 自正月至六月 四月御帰国
- 第八六冊 源戴様御代 公辺御記録 寛保三年 自七月至十二月
- 第八七冊 源戴様御代 公辺御記録 延享元年 自正月至六月 三月御参府
- 第八八冊 源戴様御代 公辺御記録 延享元年 自七月至十二月
- 第八九冊 源戴様御代 公辺御記録 延享二年 自正月至六月 四月御帰国
- 第九〇冊 源戴様御代 公辺御記録 延享二年 自七月至閏十二月
- 第九一冊 源戴様御代 公辺御記録 延享三年 自正月至六月 三月御参府
- 第九二冊 源戴様御代 公辺御記録 延享三年 自七月至十二月
- 第九三冊 源戴様御代 公辺御記録 延享四年 自正月至六月 四月御帰国
- 第九四冊 源戴様御代 公辺御記録 延享四年 自七月至十二月

番 号 表 題

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

三六(一五五)

第九五冊	源戴様御代 公辺御記録	寛延元年	自正月至六月 三月御参府
第九六冊	源戴様御代 公辺御記録	寛延元年	自七月至十二月
第九七冊	源戴様御代 公辺御記録	寛延二年	自正月至六月 四月御帰国
第九八冊	源戴様御代 公辺御記録	寛延二年	自七月至十二月
第九九冊	源戴様御代 公辺御記録	寛延三年	自正月至六月 三月御参府
第一〇〇冊	源戴様御代 公辺御記録	寛延三年	自七月至十二月
第一〇一冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦元年	自正月至閏六月 四月御帰国
第一〇二冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦元年	自七月至十二月
第一〇三冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦二年	自正月至六月 三月御参府
第一〇四冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦二年	自七月至十二月
第一〇五冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦三年	自正月至六月 四月御帰国
第一〇六冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦三年	自七月至十二月
第一〇七冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦四年	自正月至六月 三月御参府
第一〇八冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦四年	自七月至十二月
第一〇九冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦五年	自正月至六月 四月御帰国
第一一〇冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦五年	自七月至十二月
第一一一冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦六年	自正月至六月 三月御参府
第一一二冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦六年	自七月至十二月
第一一三冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦七年	自正月至六月 四月御帰国
第一一四冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦七年	自七月至十二月
第一一五冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦八年	自正月至六月 三月御参府
第一一六冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦八年	自七月至十二月
第一一七冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦九年	自正月至六月 四月御帰国
第一一八冊	源戴様御代 公辺御記録	宝暦九年	自七月至十二月

- 第一一九冊 源戴様御代 公辺御記録 宝曆十年 自正月至六月 正月御参府
 第一二〇冊 源戴様御代 公辺御記録 宝曆十年 自七月至十二月
 第一二一冊 源戴様御代 公辺御記録 宝曆十一年 自正月至六月 三月御帰国
 第一二二冊 源戴様御代 源明様八月五日御家督 公辺御記録 宝曆十一年 自七月至十二月
 第一二三冊 源明様御代 公辺御記録 宝曆十二年 自正月至六月 御滞府
 第一二四冊 源明様御代 公辺御記録 宝曆十二年 自七月至十二月
 第一二五冊 源明様御代 公辺御記録 宝曆十三年 自正月至六月 四月御帰国
 第一二六冊 源明様御代 公辺御記録 宝曆十三年 自七月至十二月
 第一二七冊 源明様御代 公辺御記録 明和元年 自正月至六月 四月御参府
 第一二八冊 源明様御代 公辺御記録 明和元年 自七月至閏十二月
 第一二九冊 源明様御代 公辺御記録 明和二年 自正月至六月 五月御帰国
 第一三〇冊 源明様御代 公辺御記録 明和二年 自七月至十二月
 第一三一冊 源明様御代 公辺御記録 明和三年 自正月至六月 三月御参府
 第一三二冊 源明様御代 公辺御記録 明和三年 自七月至十二月
 第一三三冊 源明様御代 公辺御記録 明和四年 自正月至六月 四月御帰国
 第一三四冊 源明様御代 公辺御記録 明和四年 自七月至十二月
 第一三五冊 源明様御代 公辺御記録 明和五年 自正月至六月
 第一三六冊 源明様御代 公辺御記録 明和五年 自七月至十二月
 第一三七冊 源明様御代 公辺御記録 明和六年 自正月至六月 四月御帰国
 第一三八冊 源明様御代 公辺御記録 明和六年 自七月至十二月
 第一三九冊 源明様御代 公辺御記録 明和七年 自正月至閏六月 三月御参府
 第一四〇冊 源明様御代 公辺御記録 明和七年 自七月至十二月
 第一四一冊 源明様御代 公辺御記録 明和八年 自正月至六月 四月御帰国
 第一四二冊 源明様御代 公辺御記録 明和八年 自七月至十二月
 第一四三冊 源明様御代 公辺御記録 安永元年 自正月至六月 三月御参府

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態

数 量

第一四四冊	源明様御代 公辺御記録	安永元年	自七月至十二月
第一四五冊	源明様御代 公辺御記録	安永二年	自正月至六月 三月御帰国
第一四六冊	源明様御代 公辺御記録	安永二年	自七月至十二月
第一四七冊	源明様御代 公辺御記録	安永三年	自正月至六月 三月御参府
第一四八冊	源明様御代 公辺御記録	安永三年	自七月至十二月
第一四九冊	源明様御代 公辺御記録	安永四年	自正月至六月 四月御帰国
第一五〇冊	源明様御代 公辺御記録	安永四年	自七月至閏十二月
第一五一冊	源明様御代 公辺御記録	安永五年	自正月至六月 三月御参府
第一五二冊	源明様御代 公辺御記録	安永五年	自七月至十二月
第一五三冊	源明様御代 公辺御記録	安永六年	自正月至六月 四月御帰国
第一五四冊	源明様御代 公辺御記録	安永六年	自七月至十二月
第一五五冊	源明様御代 公辺御記録	安永七年	自正月至六月 三月御参府
第一五六冊	源明様御代 公辺御記録	安永七年	自七月至十二月
第一五七冊	源明様御代 公辺御記録	安永八年	自正月至六月 四月御帰国
第一五八冊	源明様御代 公辺御記録	安永八年	自七月至十二月
第一五九冊	源明様御代 公辺御記録	安永九年	自正月至六月 三月御参府
第一六〇冊	源明様御代 公辺御記録	安永九年	自七月至十二月
第一六一冊	源明様御代 公辺御記録	天明元年	自正月至六月 八月御帰国
第一六二冊	源明様御代 公辺御記録	天明元年	自七月至十二月
第一六三冊	源明様御代 公辺御記録	天明二年	自正月至六月 八月御参府
第一六四冊	源明様御代 公辺御記録	天明二年	自七月至十二月
第一六五冊	源明様御代 公辺御記録	天明三年	自正月至六月 四月御帰国
第一六六冊	源明様御代 公辺御記録	天明三年	自七月至十二月
第一六七冊	源明様御代 公辺御記録	天明四年	自正月至六月 三月御参府

- 第一六八冊 源明様御代 公辺御記録 天明四年 自七月至十二月
- 第一六九冊 源明様御代 公辺御記録 天明五年 自正月至六月 四月御帰国
- 第一七〇冊 源明様御代 公辺御記録 天明五年 自七月至十二月
- 第一七一冊 源明様御代 公辺御記録 天明六年 自正月至六月 三月御参府
- 第一七二冊 源明様御代 公辺御記録 天明六年 自七月至十二月
- 第一七三冊 源明様御代 公辺御記録 天明七年 自正月至六月 御滞府
- 第一七四冊 源明様御代 公辺御記録 天明七年 自七月至十二月
- 第一七五冊 源明様御代 公辺御記録 天明八年 自正月至六月 御滞府
- 第一七六冊 源明様御代 公辺御記録 天明八年 自七月至十二月
- 第一七七冊 源明様御代 公辺御記録 寛政元年 自正月至閏六月 九月御帰国
- 第一七八冊 源明様御代 公辺御記録 寛政元年 自七月至十二月
- 第一七九冊 源明様御代 公辺御記録 寛政二年 自正月至六月 三月御参府
- 第一八〇冊 源明様御代 公辺御記録 寛政二年 自七月至十二月
- 第一八一冊 源明様御代 公辺御記録 寛政三年 自正月至六月 御滞府
- 第一八二冊 源明様御代 公辺御記録 寛政三年 自七月至十二月
- 第一八三冊 源明様御代 公辺御記録 寛政四年 自正月至六月 御滞府
- 第一八四冊 源明様御代 公辺御記録 寛政四年 自七月至十二月
- 第一八五冊 源明様御代 公辺御記録 寛政五年 自正月至六月 御滞府
- 第一八六冊 源明様御代 公辺御記録 寛政五年 自七月至十二月
- 第一八七冊 源明様御代 公辺御記録 寛政六年 自正月至六月 御滞府
- 第一八八冊 源明様御代 公辺御記録 寛政六年 自七月至十二月
- 第一八九冊 源明様御代 公辺御記録 寛政七年 自正月至六月 御滞府
- 第一九〇冊 源明様御代 公辺御記録 寛政七年 自七月至十二月
- 第一九一冊 源明様御代 公辺御記録 寛政八年 自正月至六月 御滞府
- 第一九二冊 源明様御代 公辺御記録 寛政八年 自七月至十二月

番 号 表 題

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

四〇(一五九)

第一九三冊	円覚院様御代 御記録	元禄十四年	自正月至六月 御滞府
第一九四冊	円覚院様御代 御記録	元禄十四年	自七月至十二月
第一九五冊	円覚院様御代 御記録	元禄十五年	自正月至六月 御滞府
第一九六冊	円覚院様御代 御記録	元禄十五年	自七月至十二月
第一九七冊	円覚院様御代 御記録	元禄十六年	自正月至六月 御滞府
第一九八冊	円覚院様御代 御記録	元禄十六年	自七月至十二月
第一九九冊	円覚院様御代 御記録	宝永元年	自正月至六月 御滞府
第二〇〇冊	円覚院様御代 御記録	宝永元年	自七月至十二月
第二〇一冊	円覚院様御代 御記録	宝永二年	自正月至六月
第二〇二冊	円覚院様御代 御記録	宝永二年	自七月至十二月
第二〇三冊	円覚院様御代 御記録	宝永三年	自正月至六月 御滞府
第二〇四冊	円覚院様御代 御記録	宝永三年	自七月至十二月
第二〇五冊	円覚院様御代 御記録	宝永四年	自正月至六月 御滞府
第二〇六冊	円覚院様御代 御記録	宝永四年	自七月至十二月
第二〇七冊	円覚院様御代 御記録	宝永五年	自正月至六月 御滞府
第二〇八冊	円覚院様御代 御記録	宝永五年	自七月至十二月
第二〇九冊	円覚院様御代 御記録	宝永六年	自正月至六月 六月御帰国
第二一〇冊	円覚院様御代 御記録	宝永六年	自七月至十二月
第二一一冊	円覚院様御代 御記録	宝永七年	自正月至六月 三月御参府
第二一二冊	円覚院様御代 御記録	宝永七年	自七月至十二月
第二一三冊	円覚院様御代 御記録	正徳元年	自正月至六月 四月御帰国
第二一四冊	円覚院様御代 御記録	正徳元年	自七月至十二月
第二一五冊	円覚院様御代 御記録	正徳二年	自正月至六月 三月御参府
第二一六冊	円覚院様御代 御記録	正徳二年	自七月至十二月

- 第二七冊 円覚院様御代 御記録 正徳三年 自正月至六月 御滞府
- 第二八冊 円覚院様御代 真巖院様八月廿九日御家督 晃禪院様十一月十一日御家督 御記録 正徳三年 自七月至十二月
- 第二九冊 晃禪院様御代 御記録 正徳四年 自正月至六月 御滞府
- 第三〇冊 晃禪院様御代 御記録 正徳四年 自七月至十二月
- 第三一冊 晃禪院様御代 御記録 正徳五年 自正月至六月 御滞府
- 第三二冊 晃禪院様御代 御記録 正徳五年 自七月至十二月
- 第三三冊 晃禪院様御代 御記録 享保元年 自正月至六月 御滞府
- 第三四冊 晃禪院様御代 御記録 享保元年 自七月至十二月
- 第三五冊 晃禪院様御代 御記録 享保二年 自正月至六月 四月御帰国
- 第三六冊 晃禪院様御代 御記録 享保二年 自七月至十二月
- 第三七冊 晃禪院様御代 御記録 享保三年 自正月至六月 三月御参府
- 第三八冊 晃禪院様御代 御記録 享保三年 自七月至十二月
- 第三九冊 晃禪院様御代 御記録 享保四年 自正月至六月 四月御帰国
- 第三〇冊 晃禪院様御代 御記録 享保四年 自七月至十二月
- 第三一冊 晃禪院様御代 御記録 享保五年 自正月至六月 三月御参府
- 第三二冊 晃禪院様御代 御記録 享保五年 自七月至十二月
- 第三三冊 晃禪院様御代 御記録 享保六年 自正月至六月 四月御帰国
- 第三四冊 晃禪院様御代 御記録 享保六年 自七月至十二月
- 第三五冊 晃禪院様御代 御記録 享保七年 自正月至六月 三月御参府
- 第三六冊 晃禪院様御代 御記録 享保七年 自七月至十二月
- 第三七冊 晃禪院様御代 御記録 享保八年 自正月至六月 四月御帰国
- 第三八冊 晃禪院様御代 御記録 享保八年 自七月至十二月
- 第三九冊 晃禪院様御代 御記録 享保九年 自正月至六月 三月御参府
- 第四〇冊 晃禪院様御代 御記録 享保九年 自七月至十二月
- 第四一冊 晃禪院様御代 御記録 享保十年 自正月至六月 四月御帰国

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態

数 量

第二四二冊	晃禪院様御代 御記録	享保十年	自七月至十二月	
第二四三冊	晃禪院様御代 御記録	享保十一年	自正月至六月 三月御参府	
第二四四冊	晃禪院様御代 御記録	享保十一年	自七月至十二月	
第二四五冊	晃禪院様御代 御記録	享保十二年	自正月至六月 四月御帰国	
第二四六冊	晃禪院様御代 御記録	享保十二年	自七月至十二月	
第二四七冊	晃禪院様御代 御記録	享保十三年	自正月至六月 三月御参府	
第二四八冊	晃禪院様御代 御記録	享保十三年	自七月至十二月	
第二四九冊	晃禪院様御代 御記録	享保十四年	自正月至六月 四月御帰国	
第二五〇冊	晃禪院様御代 御記録	享保十四年	自七月至十二月	
第二五一冊	晃禪院様御代 御記録	享保十五年	自正月至六月 三月御参府	
第二五二冊	晃禪院様御代 章善院様十一月廿八日御家督 御記録	享保十五年	自七月至十二月	
第二五三冊	章善院様御代 御記録	享保十六年	自正月至六月 四月御帰国	
第二五四冊	章善院様御代 御記録	享保十六年	自七月至十二月	
第二五五冊	章善院様御代 御記録	享保十七年	自正月至六月 三月御参府	
第二五六冊	章善院様御代 御記録	享保十七年	自七月至十二月	
第二五七冊	章善院様御代 御記録	享保十八年	自正月至六月 四月御帰国	
第二五八冊	章善院様御代 御記録	享保十八年	自七月至十二月	
第二五九冊	章善院様御代 御記録	享保十九年	自正月至六月 三月御参府	
第二六〇冊	章善院様御代 御記録	享保十九年	自七月至十二月	
第二六一冊	章善院様御代 御記録	享保二十年	自正月至六月 閏三月御帰国	
第二六二冊	章善院様御代 御記録	享保二十年	自七月至十二月	
第二六三冊	章善院様御代 御記録	元文元年	自正月至六月 三月御参府	
第二六四冊	章善院様御代 御記録	元文元年	自七月至十二月	
第二六五冊	章善院様御代 御記録	元文二年	自正月至六月 四月御帰国	

- 第二六六冊 章善院様御代 御記録 元文二年 自七月至十二月
- 第二六七冊 章善院様御代 御記録 元文三年 自正月至六月 三月御参府
- 第二六八冊 章善院様御代 御記録 元文三年 自七月至十二月
- 第二六九冊 章善院様御代 源戴様正月十三日御相統 御記録 元文四年 自正月至六月 四月御帰国
- 第二七〇冊 源戴様御代 御記録 元文四年 自七月至十二月
- 第二七一冊 源戴様御代 御記録 元文五年 自正月至六月 三月御参府
- 第二七二冊 源戴様御代 御記録 元文五年 自七月至十二月
- 第二七三冊 源戴様御代 御記録 寛保元年 自正月至六月 四月御帰国
- 第二七四冊 源戴様御代 御記録 寛保元年 自七月至十二月
- 第二七五冊 源戴様御代 御記録 寛保二年 自正月至六月 三月御参府
- 第二七六冊 源戴様御代 御記録 寛保二年 自七月至十二月
- 第二七七冊 源戴様御代 御記録 寛保三年 自正月至六月 四月御帰国
- 第二七八冊 源戴様御代 御記録 寛保三年 自七月至十二月
- 第二七九冊 源戴様御代 御記録 延享元年 自正月至六月 三月御参府
- 第二八〇冊 源戴様御代 御記録 延享元年 自七月至十二月
- 第二八一冊 源戴様御代 御記録 延享二年 自正月至六月 四月御帰国
- 第二八二冊 源戴様御代 御記録 延享二年 自七月至閏十二月
- 第二八三冊 源戴様御代 御記録 延享三年 自正月至六月 三月御参府
- 第二八四冊 源戴様御代 御記録 延享三年 自七月至十二月
- 第二八五冊 源戴様御代 御記録 延享四年 自正月至六月 四月御帰国
- 第二八六冊 源戴様御代 御記録 延享四年 自七月至十二月
- 第二八七冊 源戴様御代 御記録 寛延元年 自正月至六月 三月御参府
- 第二八八冊 源戴様御代 御記録 寛延元年 自七月至十二月
- 第二八九冊 源戴様御代 御記録 寛延二年 自正月至六月 四月御帰国
- 第二九〇冊 源戴様御代 御記録 寛延二年 自七月至十二月

番 号 表 題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

第二九一冊	源戴様御代 御記録 寛延三年 自正月至六月 三月御参府
第二九二冊	源戴様御代 御記録 寛延三年 自七月至十二月
第二九三冊	源戴様御代 御記録 宝暦元年 自正月至閏六月 四月御帰国
第二九四冊	源戴様御代 御記録 宝暦元年 自七月至十二月
第二九五冊	源戴様御代 御記録 宝暦二年 自正月至六月 三月御参府
第二九六冊	源戴様御代 御記録 宝暦二年 自七月至十二月
第二九七冊	源戴様御代 御記録 宝暦三年 自正月至六月 四月御帰国
第二九八冊	源戴様御代 御記録 宝暦三年 自七月至十二月
第二九九冊	源戴様御代 御記録 宝暦四年 自正月至六月 三月御参府
第三〇〇冊	源戴様御代 御記録 宝暦四年 自七月至十二月
第三〇一冊	源戴様御代 御記録 宝暦五年 自正月至六月 四月御参府 ^(帰国)
第三〇二冊	源戴様御代 御記録 宝暦五年 自七月至十二月
第三〇三冊	源戴様御代 御記録 宝暦六年 自正月至六月 三月御参府
第三〇四冊	源戴様御代 御記録 宝暦六年 自七月至十二月
第三〇五冊	源戴様御代 御記録 宝暦七年 自正月至六月 四月御帰国
第三〇六冊	源戴様御代 御記録 宝暦七年 自七月至十二月
第三〇七冊	源戴様御代 御記録 宝暦八年 自正月至六月 三月御参府
第三〇八冊	源戴様御代 御記録 宝暦八年 自七月至十二月
第三〇九冊	源戴様御代 御記録 宝暦九年 自正月至六月 四月御帰国
第三一〇冊	源戴様御代 御記録 宝暦九年 自七月至十二月
第三一一冊	源戴様御代 御記録 宝暦十年 自正月至六月 正月御参府
第三一二冊	源戴様御代 御記録 宝暦十年 自七月至十二月
第三一三冊	源戴様御代 御記録 宝暦十一年 自正月至六月 三月御帰国
第三一四冊	源戴様御代 源明様八月五日御家督 御記録 宝暦十一年 自七月至十二月

- 第三一五冊 源明様御代 御記録 宝曆十二年 自正月至六月 御滞府
- 第三一六冊 源明様御代 御記録 宝曆十二年 自七月至十二月
- 第三一七冊 源明様御代 御記録 宝曆十三年 自正月至六月 四月御帰国
- 第三一八冊 源明様御代 御記録 宝曆十三年 自七月至十二月
- 第三一九冊 源明様御代 御記録 明和元年 自正月至六月 四月御参府
- 第三二〇冊 源明様御代 御記録 明和元年 自七月至閏十二月
- 第三二一冊 源明様御代 御記録 明和二年 自正月至六月 五月御帰国
- 第三二二冊 源明様御代 御記録 明和二年 自七月至十二月
- 第三二三冊 源明様御代 御記録 明和三年 自正月至六月 三月御参府
- 第三二四冊 源明様御代 御記録 明和三年 自七月至十二月
- 第三二五冊 源明様御代 御記録 明和四年 自正月至六月 四月御帰国
- 第三二六冊 源明様御代 御記録 明和四年 自七月至十二月
- 第三二七冊 源明様御代 御記録 明和五年 自正月至六月 三月御参府
- 第三二八冊 源明様御代 御記録 明和五年 自七月至十二月
- 第三二九冊 源明様御代 御記録 明和六年 自正月至六月 四月御帰国
- 第三三〇冊 源明様御代 御記録 明和六年 自七月至十二月
- 第三三一冊 源明様御代 御記録 明和七年 自正月至閏六月 三月御参府
- 第三三二冊 源明様御代 御記録 明和七年 自七月至十二月
- 第三三三冊 源明様御代 御記録 明和八年 自正月至六月 四月御帰国
- 第三三四冊 源明様御代 御記録 明和八年 自七月至十二月
- 第三三五冊 源明様御代 御記録 安永元年 自正月至六月 三月御参府
- 第三三六冊 源明様御代 御記録 安永元年 自七月至十二月
- 第三三七冊 源明様御代 御記録 安永二年 自正月至六月 三月御帰国
- 第三三八冊 源明様御代 御記録 安永二年 自七月至十二月
- 第三三九冊 源明様御代 御記録 安永三年 自正月至六月 三月御参府

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

第三四〇冊	源明様御代 御記録	安永三年	自七月至十二月
第三四一冊	源明様御代 御記録	安永四年	自正月至六月 四月御帰国
第三四二冊	源明様御代 御記録	安永四年	自七月至閏十二月
第三四三冊	源明様御代 御記録	安永五年	自正月至六月 三月御参府
第三四四冊	源明様御代 御記録	安永五年	自七月至十二月
第三四五冊	源明様御代 御記録	安永六年	自正月至六月 四月御帰国
第三四六冊	源明様御代 御記録	安永六年	自七月至十二月
第三四七冊	源明様御代 御記録	安永七年	自正月至六月 三月御参府
第三四八冊	源明様御代 御記録	安永七年	自七月至十二月
第三四九冊	源明様御代 御記録	安永八年	自正月至六月 四月御帰国
第三五〇冊	源明様御代 御記録	安永八年	自七月至十二月
第三五一冊	源明様御代 御記録	安永九年	自正月至六月 三月御参府
第三五二冊	源明様御代 御記録	安永九年	自七月至十二月
第三五三冊	源明様御代 御記録	天明元年	自正月至六月 八月御帰国
第三五四冊	源明様御代 御記録	天明元年	自七月至十二月
第三五五冊	源明様御代 御記録	天明二年	自正月至六月 八月御参府
第三五六冊	源明様御代 御記録	天明二年	自七月至十二月
第三五七冊	源明様御代 御記録	天明三年	自正月至六月 四月御帰国
第三五八冊	源明様御代 御記録	天明三年	自七月至十二月
第三五九冊	源明様御代 御記録	天明四年	自正月至六月 三月御参府
第三六〇冊	源明様御代 御記録	天明四年	自七月至十二月
第三六一冊	源明様御代 御記録	天明五年	自正月至六月 四月御帰国
第三六二冊	源明様御代 御記録	天明五年	自七月至十二月
第三六三冊	源明様御代 御記録	天明六年	自正月至六月 三月御参府

第三六四冊	源明様御代 御記録	天明六年 自七月至十二月
第三六五冊	源明様御代 御記録	天明七年 自正月至六月 御滞府
第三六六冊	源明様御代 御記録	天明七年 自七月至十二月
第三六七冊	源明様御代 御記録	天明八年 自正月至六月 御滞府
第三六八冊	源明様御代 御記録	天明八年 自七月至十二月
第三六九冊	源明様御代 御記録	寛政元年 自正月至閏六月 九月御帰国
第三七〇冊	源明様御代 御記録	寛政元年 自七月至十二月
第三七一冊	源明様御代 御記録	寛政二年 自正月至六月 三月御参府
第三七二冊	源明様御代 御記録	寛政二年 自七月至十二月
第三七三冊	源明様御代 御記録	寛政三年 自正月至六月 御滞府
第三七四冊	源明様御代 御記録	寛政三年 自七月至十二月
第三七五冊	源明様御代 御記録	寛政四年 自正月至六月 御滞府
第三七六冊	源明様御代 御記録	寛政四年 自七月至十二月
第三七七冊	源明様御代 御記録	寛政五年 自正月至六月 御滞府
第三七八冊	源明様御代 御記録	寛政五年 自七月至十二月
第三七九冊	源明様御代 御記録	寛政六年 自正月至六月 御滞府
第三八〇冊	源明様御代 御記録	寛政六年 自七月至十二月
第三八一冊	源明様御代 御記録	寛政七年 自正月至六月 御滞府
第三八二冊	源明様御代 御記録	寛政七年 自七月至十二月
第三八三冊	源明様御代 御記録	寛政八年 自正月至六月 御滞府
第三八四冊	源明様御代 御記録	寛政八年 自七月至十二月
第三八五冊	御記録附尾	

一四一 四 藩士名寄

明治初年写

*第一二冊の冒頭に「をの部」一冊(尾崎・尾上・刑部・落合・恩田など)が欠冊になっている可能性を指摘した平岩十右衛門による掛紙あり。「か上」(第一三冊と第一四冊の間)および「た上」(第一六冊と第一七冊の間)が欠本になっている。

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

蓬左 A

縦

四五

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

第一冊 一上(石川・石黒・石原・石井・石田・石堂・石塚・石谷・石垣)

第二冊 一中(岩田・岩井・岩屋・岩付・岩間・岩本・岩崎・岩塚・岩堀・岩城・岩腰・岩越・岩佐・岩松・岩味・磯谷・磯貝・磯村・磯野・磯松・磯田・磯部・五十嵐・飯田・飯沼・飯尾・飯島・飯川)

第三冊 一下(今井・今泉・今村・今津・稲葉・稲生・稲吉・稲富・稲垣・稲森・稲熊・伊藤・伊東・伊部・伊奈・伊勢・伊沢・伊賀・今堀)

第四冊 以下ノ下(庵原・生駒・猪谷・猪村・猪飼・一色・池田・池尾・池沢・池部・井上・井野口・井田・井出・井元・井村・井川・市川・市村・市橋・市江・市瀬・市辺・市浦・市岡・市野・一野・大飼・入谷・泉・板倉・家田・員部)

第五冊 は上(林・服部・波多野・羽田野・秦・羽鳥)

第六冊 は下(早川・早野・速水・原・原田・馬場・浜島・飯万島・浜田・坂野・伴・坂・埴原・蜂須賀・花井・長谷川・長谷部・橋本・井和・半田・拝郷・春田)

第七冊 に(丹羽・西尾・西村・西岡・西川・西田・西沢・西原・西島・西垣・西脇・西山・西浜・新野・新沢・蜷川)

第八冊 ほ(本田・本多・本間・本部・本阿弥・星野・星合・堀・堀田・堀江・堀尾・細井・細野・細川・宝生・堀部)

第九冊 と(東条・鳥居・遠山・富永・富田・取田・土肥・土岐・土井・戸田・舎人・都丸・徳山・徳光・徳田・徳本・豊田・豊泉・豊島・豊・友松・百々・外山・外岡・外波・轟・富岡・富山)

第一〇冊 ち・り・ぬ・を(上千村・千田・近松・中条・茅原田・茶屋・張・長・立家・沼田・沼波・織田・萩原・萩野・萩須・岡・岡本・岡田・岡崎・岡寺・岡部・岡島・岡野・岡村・岡谷)

第一一冊 を中(大久保・大窪・太田・大田・大橋・大崎・大森・大野・大津・大沢・大島・大塚・大塩・大脇・大熊・大河内・大内・大岡・大村・大倉・大原・大海・大泉・大槻・大井・大宮・大口・大月・大関・大竹・大谷・大鹿)

第一二冊 を下(小笠原・小川・小山・小山田・小瀬・小塩・小野・小野田・小野沢・小野沢・小田切・小尾・小島・小倉・小鹿・小田・小田木・小幡)

第一三冊 わ(和田・渡辺・若林・若尾・若井・若原・脇田・鷺津・鷺巢)

第一四冊 か中(鏡島・鹿取・鹿島・川村・川崎・河内・川口・川出・川合・河合・川澄・川角・川瀬・川上・川原・河野・川島・川方・川松・河田)

第一五冊 か下(神谷・神尾・神戸・神部・神田・神間・神波・神子・兼松・神納・兼康・金森・金子・金柳・片野・片山・片岡・片桐・片倉・高麗・高力・梶原・梶・梶川・梶田・粕谷・上泉・勝野・勝田・勝川・勝沼・笠原・笠間・海部・海保・各務・蟹江・桂・桂林・栢野・柿崎・甲斐・辛島・亀岡・蒲・鴨居・狩野・亀井・亀谷)

第一六冊 よ(横井・横内・横地・横山・横田・吉田・吉原・吉沢・吉川・吉村・吉見・吉岡・吉野・吉雄・吉井・米倉・米本・寄田・肆矢)
第一七冊 た中(高木・高橋・高津・高梨・高垣・高野・高田・高野瀬・高崎・高羽・高屋・高浜・高取・高間・高柳・高瀬・高山・高本・高岡・高島・田中・田村・田宮・田島・田代・田辺・田崎・田付・田原)

第一八冊 た下・そ(武野・竹野・武田・武内・竹田・竹腰・竹尾・竹村・竹内・竹中・竹山・竹居・竹井・竹川・竹端・大道寺・大本・滝川・滝本・谷・谷口・谷田・谷川・谷崎・棚橋・多羅尾・多賀・多々羅・玉置・立川・立花・立井・立松・辰巳・種田・種野・館・伊達・俵・鷹見・副田・園田・祖父江・染川)

第一九冊 つ(塚田・塚本・津金・都筑・都築・土屋・津田・津坂・津村・恒川・柘植・角田・角淵・葛木・坪内・辻・辻村・筒井・月ヶ瀬・妻木・椿井)

第二〇冊 な上(成瀬・成田・内藤・長野・長岡・長坂・永坂・長屋・長尾・長瀬・長戸・長縄・長崎・長江・長沼)

第二一冊 な中(永田・永井・永平・南部・南宮・行方・並河・名倉・猶原・夏目)

第二二冊 な下(中西・中根・中村・中川・中尾・中野・中沢・中島・中山・中田・中路・中井・中瀬)

第二三冊 む・う(村上・村井・村田・村瀬・村松・室賀・武藤・向井・向山・梅村・白井・白居・碓氷・上田・上野・上床・植松・上村・植村・上杉・上原・浦井・浦野・魚住・内田・内山・内堀・内木・牛込・牛田・牛村・宇野・宇佐美・海野・鶴飼・海辺・浮田)

第二四冊 の・く(野呂・野呂瀬・野崎・野村・野垣・野々垣・野田・野中・野間・能勢・野瀬・野々村・野尻・野々部・能島・久野・久米・久世・久々宇・久保・倉林・熊谷・熊沢・熊井・栗田・栗木・栗崎・国枝・日下部・桑原・桑山・桑島・黒田・黒部・黒宮・楠・楠本・工藤・暮地)

第二五冊 や上(山下・山内・山高・山寺・山村・山田・山森)

第二六冊 や中(山本・山中・山澄・山崎・山口・山吹・山川・山上・山岡・山脇・山腰・山名・山科・山木・山緑・山路・山羽)

第二七冊 や下(八尾・八木・八巻・安田・安井・矢部・矢島・矢野・矢神・柳生・柳川・柳田・柳沢・柳・梁瀬・社本)

第二八冊 ま上(松野・松田・松平・松井・松本・松原・松岡・松永・松村・松下・松山・松並・松波・松倉・曲淵・松浦・松尾)

第二九冊 ま下(牧・牧野・蒔田・馬杉・馬島・馬淵・増田・増井・増藤・益子・正木・前島・前田・真鍋・真野・間宮・間島・間瀬・丸山・丸井・丸淵・増山)

第三〇冊 こ上(後藤・近藤・小菅・小沢・小久保・小畑・小森・小池・小寺・小見山・小林・小出・小泉・小牧・小塚・小崎・小松原・小堀)

第三一冊 こ下・え・て(駒林・駒井・駒田・児島・小島・児玉・児川・五味・権田・五明・古瀬・金春・小和瀬・米野・江口・江原・江崎・江本・江場・江見・江間・蛇江・遠藤・寺町・寺西・寺尾・寺岡・寺田・寺野・寺沢・寺島・寺山・手島)

第三二冊 あ上(朝比奈・朝岡・朝倉・朝田・朝日・浅井・浅田・浅野・浅利・浅尾・会津)

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

第三三冊	あ中(阿部・阿知波・天野・赤林・赤堀・赤井・赤尾・赤松・青山・青木・青野・安藤)			
第三四冊	あ下(足立・安達・荒川・荒尾・荒木・新井・荒井・秋元・秋山・秋田・芦沢・渥美・雨宮・鮎川・相川・相原・会田・東・有馬・跡部・甘利・淡河・味岡・茜部・有田・愛知・麻生)			
第三五冊	さ上(佐治・佐藤・佐尾・佐分・佐久間・佐々木・佐々・左右田・佐合・佐野・佐枝・佐橋・佐溝・佐竹・佐口・三枝・桜井・桜木・桜山・桜林・桜川・佐光)			
第三六冊	さ下(礪原・酒井・坂井・坂崎・坂部・里見・里村・沢・沢井・沢田・沢登・斎藤・斎田・西郷・笹岡・篠岡・難賀・向坂・座光寺)			
第三七冊	き・ゆ・め(橋田・橋川・木村・木下・木全・木部・岸・岸上・鬼頭・菊池・菊川・北村・北川・北沢・湯浅・湯本・弓場・遊佐・毛受)			
第三八冊	み上(水野・水谷・水垣・水崎)			
第三九冊	み下(三浦・三宅・三沢・三尾・三輪・三和・三村・三好・三井・三木・三橋・三谷・三上・宮脇・宮川・宮崎・宮城・宮島・宮沢・宮田・宮地・宮戸・箕形・箕浦・箕田・御宿・御友・溝口)			
第四〇冊	し(下方・下条・下間・下矢・島・島崎・志村・柴山・芝山・清水・志水・柴田・芝崎・洪谷・進・進藤・篠田・篠崎・七宮・四宮・神野・神保・塩川・重松・白井・白石・白木・白岩・城田・繁野・霜田・社本・斯波・新見・真海・塩田)			
第四一冊	ひ上(平岩・平野・平松・平岡・平沢・平尾・平川・平井・平手・平田)			
第四二冊	ひ下(肥田・久永・菱田・広野・広瀬・広沢・広田・広井・日比野・日根野・日江井・日比・人見・足田・比本・彦坂・樋口・日高・東・土方・水室)			
第四三冊	も・せ(森・森村・森本・森寺・森田・森崎・森川・森島・森居・森岡・守崎・毛利・諸井・本杉・本康・最上・森下・千賀・千・仙川・関・関口・関戸・瀬尾・瀬田・瀬戸・瀬木)			
第四四冊	す上(鈴木・鈴村)			
第四五冊	す下(杉山・杉浦・杉村・杉坂・杉野・杉崎・杉田・杉立・杉本・杉原・須野崎・須賀井・須賀・末永・須田・諏訪・諏訪部・住山・菅谷・鷺見・村主・角田・首藤)			

一四一三 (鸚鵡籠中記)

江戸後期写

朝日重章(著)

蓬左A・張府B 縦

三七

*第一冊冒頭にある目次は、昭和一二年に作成して綴じ込まれたもの。

第一冊	鸚鵡籠中記目次 卷一(元禄四年六月〜十二月)	第二冊	卷二(元禄五年)
第三冊	日記補遺(貞享元〜元禄四年・元禄九〜同一一年六月)	第四冊	卷三(元禄六年)

第五冊 卷四(元禄七年)

第七冊 卷六(元禄九年)

第九冊 卷七下(元禄一〇年)

第十一冊 (卷九・元禄一二年)

第十三冊 卷十一(元禄一四年)

第十五冊 卷十三(元禄一六年)

第十七冊 卷十五(宝永二年)

第十九冊 卷十七(宝永四年)

第二十一冊 (卷十八下・宝永五年七月〜十二月)

第二十三冊 (卷二十上・宝永七年正月〜五月)

第二十五冊 卷二十二(宝永八年四月に正徳と改元)

第二十六冊 卷二十三上(正徳三年正月〜九月) ※卷二十三上は原本が欠番となっている

第二十七冊 卷二十三下(正徳三年九月〜十二月)

第二十九冊 卷二十四下(正徳三年七月〜十二月)

第三十一冊 卷二十五下(正徳四年七月〜十二月)

第三十三冊 卷二十六下(正徳五年七月〜十二月)

第三十五冊 卷二十七下(享保元年七月〜十二月)

第三十七冊 卷二十八下(享保二年七月〜十二月)

第六冊 卷五(旧年之補遺漏・元禄八年)

第八冊 卷七上(元禄一〇年・漢文体)

第一〇冊 (卷八・元禄一一年)

第一二冊 卷十(元禄一三年)

第一四冊 卷十二(元禄一五年)

第一六冊 卷十四(元禄一七年三月に宝永と改元)

第一八冊 卷十六(宝永三年)

第二〇冊 (卷十八上・宝永五年正月〜六月)

第二二冊 (卷十九・宝永六年)

第二四冊 (卷二十下・宝永七年六月〜十二月)

第二八冊 卷二十四上(正徳三年正月〜六月)

第三〇冊 卷二十五上(正徳四年正月〜六月)

第三二冊 卷二十六上(正徳五年正月〜六月)

第三四冊 卷二十七上(正徳六年正月〜六月 六月に享保と改元)

第三六冊 卷二十八上(享保二年正月〜六月)

二四一 参河徳川歴代

*大正一七〜慶長三年の記述は、大須賀忠政の増補による。

江戸 写

大須賀康高等(編)

蓬左 A

縦

一〇

第一冊 序 卷第一上下(徳川家御代々系図之事ほか)

第二冊 卷第二〜卷第五(家持・満義・政義・親季四代之事ほか)

第三冊 卷第六〜卷第九(蔵人被追放三木 附信孝以今川訴訟并信孝為敵事ほか)

第四冊 卷第十〜卷第十四(参州原木合戦 付上和田勢子上官寺事ほか)

第五冊 卷第十五〜卷第十九(家康公召山本常刀兵法御尋事ほか)

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

五二(二七〇)

番 号 表 題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

- 第六冊 卷第二十〜卷第二十四(天野三平下女夢 付正月廿日御連歌起本事ほか)
第七冊 卷第二十五〜卷第二十八(斎藤柴田山崎軍 付光秀最期并被生捕斎藤之事ほか)
第八冊 卷第二十九〜卷第三十二(秀吉立楽田ヲ趣長久手 付本多忠勝武勇并忠勝軍事ほか)
第九冊 卷第三十三〜卷第三十六(井伊直政入夜討篠郭 付近藤長野高名事ほか)
第一〇冊 卷第三十七〜卷第四十(天正十八年庚寅関東御入国御知行割之事ほか)

一四二 御系図

江戸前期筆

徳川義直(筆)

帖

一

*梨子地時絵の箱入り。その外側は二重の木箱で保護されている。最も外側の木箱には「御系図」と書かれており、蓋に「老部 第八十四番」と書かれた貼紙あり。「一」号御箱 尊 御系図「一折」という下ケ札あり。

一四三 続修御系図(寛政三年自序)

江戸後期筆

徳川宗睦(編)

縦・状

三

*漆塗りの箱入り。その外側も木箱で保護されている。天保一一年正月付の「続修御系図凡例」(徳川斉朝撰述)および凡例作成の経緯を記した弘化四年五月付の「書付」を付す。

一四四 御年譜(正保三年自序)

正保三年筆

徳川義直(著)

縦

五

*梨子地時絵の箱入り。その外側も木箱で保護されている。木箱には「老部 第八十五号」と書かれた貼紙あり。第一冊に「三」号御箱 尊 御年譜 御正本五冊」という下ケ札あり。

第一冊 卷第一 自天文十一年至天正三年

第二冊 卷第二 自天正三年至同十二年

第三冊 卷第三 自天正十三年至慶長四年

第四冊 卷第四 自慶長五年至同十五年

第五冊 卷第四 自慶長十六年至元和三年

一四一五 (御日記)

江戸後期写

縦

一七三

*公辺御日記(各冊の底部に「乾」という記載あり)八六冊と、御家御日記(同様に「坤」という記載あり)八六冊の二種類からなる。また公辺・御家とも享保九年から同・〇年までの分(公辺は第七五冊〜第八六冊、御家は第一六一冊〜第一七二冊)は、表紙の色・題簽の書式・中表紙などが他のものとは異なり、別系本もしくは追加本と考えられる。なおこの分の各冊の中表紙には、「を」と朱書された貼紙がある。

第一冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 慶安三年 自六月至十二月 十二月御帰国

第二冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 慶安四年 自正月至十二月 三月御参府

第三冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 承応元年 自正月至十二月 御滞府

- 第四冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 承応二年 自正月至十二月 御滯府
- 第五冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 承応三年 自正月至十二月 御滯府
- 第六冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 明暦元年 自正月至十二月 御滯府
- 第七冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 明暦二年 自正月至十二月 御滯府
- 第八冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 明暦三年 自正月至十二月 御滯府
- 第九冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 万治元年 自正月至十二月 七月御帰国
- 第一〇冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 万治二年 自正月至十二月 七月御参府
- 第一一冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 万治三年 自正月至十二月 十二月御帰国
- 第一二冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 寛文元年 自正月至十二月 十月御参府
- 第一三冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 寛文二年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第一四冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 寛文三年 自正月至十二月 三月御参府
- 第一五冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 寛文四年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第一六冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 寛文五年 自正月至十二月 三月御参府
- 第一七冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 寛文六年 自正月至十二月 三月御帰国
- 第一八冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 寛文七年 自正月至十二月 三月御参府
- 第一九冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 寛文八年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第二〇冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 寛文九年 自正月至十二月 三月御参府
- 第二一冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 寛文十年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第二二冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 寛文十一年 自正月至十二月 三月御参府
- 第二三冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 寛文十二年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第二四冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 延宝元年 自正月至十二月 三月御参府
- 第二五冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 延宝二年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第二六冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 延宝三年 自正月至十二月 三月御参府
- 第二七冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 延宝四年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第二八冊 瑞龍院様御代 公辺御日記 延宝五年 自正月至十二月 三月御参府

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態

数 量

第二九冊	瑞龍院様御代 公辺御日記	延宝六年	自正月至十二月	四月御帰国
第三〇冊	瑞龍院様御代 公辺御日記	延宝七年	自正月至十二月	三月御参府
第三一冊	瑞龍院様御代 公辺御日記	延宝八年	自正月至十二月	四月御帰国
第三二冊	瑞龍院様御代 公辺御日記	大和元年	自正月至十二月	三月御参府
第三三冊	瑞龍院様御代 公辺御日記	天和二年	自正月至十二月	四月御帰国
第三四冊	瑞龍院様御代 公辺御日記	天和三年	自正月至十二月	三月御参府
第三五冊	瑞龍院様御代 公辺御日記	貞享元年	自正月至十二月	四月御帰国
第三六冊	瑞龍院様御代 公辺御日記	貞享二年	自正月至十二月	三月御参府
第三七冊	瑞龍院様御代 公辺御日記	貞享三年	自正月至十二月	四月御帰国
第三八冊	瑞龍院様御代 公辺御日記	貞享四年	自正月至十二月	三月御参府
第三九冊	瑞龍院様御代 公辺御日記	元禄元年	自正月至十二月	四月御帰国
第四〇冊	瑞龍院様御代 公辺御日記	元禄二年	自正月至十二月	三月御参府
第四一冊	瑞龍院様御代 公辺御日記	元禄三年	自正月至十二月	五月御帰国
第四二冊	瑞龍院様御代 公辺御日記	元禄四年	自正月至十二月	三月御参府
第四三冊	瑞龍院様御代 公辺御日記	元禄五年	自正月至十二月	六月御帰国
第四四冊	瑞龍院様御代・泰心院様御代 公辺御日記	元禄六年	自正月至十二月	三月御参府
第四五冊	泰心院様御代 公辺御日記	元禄七年	自正月至十二月	五月御帰国
第四六冊	泰心院様御代 公辺御日記	元禄八年	自正月至十二月	三月御参府
第四七冊	泰心院様御代 公辺御日記	元禄九年	自正月至十二月	六月御帰国
第四八冊	泰心院様御代 公辺御日記	元禄十年	自正月至十二月	三月御参府
第四九冊	泰心院様御代 公辺御日記	元禄十一年	自正月至十二月	四月御帰国
第五〇冊	泰心院様御代・円覚院様御代 公辺御日記	元禄十二年	自正月至十二月	三月御参府
第五一冊	円覚院様御代 公辺御日記	元禄十三年	自正月至十二月	御滞府
第五二冊	円覚院様御代 公辺御日記	元禄十四年	自正月至十二月	御滞府

- 第五三冊 円覚院様御代 公辺御日記 元禄十五年 自正月至十二月 御滯府
- 第五四冊 円覚院様御代 公辺御日記 元禄十六年 自正月至十二月 御滯府
- 第五五冊 円覚院様御代 公辺御日記 宝永元年 自正月至十二月 御滯府
- 第五六冊 円覚院様御代 公辺御日記 宝永二年 自正月至十二月 御滯府
- 第五七冊 円覚院様御代 公辺御日記 宝永三年 自正月至十二月 御滯府
- 第五八冊 円覚院様御代 公辺御日記 宝永四年 自正月至十二月 御滯府
- 第五九冊 円覚院様御代 公辺御日記 宝永五年 自正月至十二月 御滯府
- 第六〇冊 円覚院様御代 公辺御日記 宝永六年 自正月至十二月 六月御帰国
- 第六一冊 円覚院様御代 公辺御日記 宝永七年 自正月至十二月 三月御参府
- 第六二冊 円覚院様御代 公辺御日記 正徳元年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第六三冊 円覚院様御代 公辺御日記 正徳二年 自正月至十二月 三月御参府
- 第六四冊 円覚院様御代・真巖院様御代・晃禪院様御代 公辺御日記 正徳三年 自正月至十二月 御滯府
- 第六五冊 晃禪院様御代 公辺御日記 正徳四年 自正月至十二月 御滯府
- 第六六冊 晃禪院様御代 公辺御日記 正徳五年 自正月至十二月 御滯府
- 第六七冊 晃禪院様御代 公辺御日記 享保元年 自正月至十二月 御滯府
- 第六八冊 晃禪院様御代 公辺御日記 享保二年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第六九冊 晃禪院様御代 公辺御日記 享保三年 自正月至十二月 三月御参府
- 第七〇冊 晃禪院様御代 公辺御日記 享保四年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第七一冊 晃禪院様御代 公辺御日記 享保五年 自正月至十二月 三月御参府
- 第七二冊 晃禪院様御代 公辺御日記 享保六年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第七三冊 晃禪院様御代 公辺御日記 享保七年 自正月至十二月 三月御参府
- 第七四冊 晃禪院様御代 公辺御日記 享保八年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第七五冊 公辺御日記 享保九年 自正月至十二月
- 第七六冊 公辺御日記 享保十年 自正月至十二月 御在国
- 第七七冊 公辺御日記 享保十一年 自正月至十二月

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

第七八冊	公辺御日記	享保十二年	自正月至十二月	
第七九冊	公辺御日記	享保十三年	自正月至十二月	
第八〇冊	公辺御日記	享保十四年	自正月至十二月	
第八一冊	公辺御日記	享保十五年	自正月至十二月	
第八二冊	公辺御日記	享保十六年	自正月至十二月	
第八三冊	公辺御日記	享保十七年	自正月至十二月	
第八四冊	公辺御日記	享保十八年	自正月至十二月	
第八五冊	公辺御日記	享保十九年	自正月至十二月	
第八六冊	公辺御日記	享保二十年	自正月至十二月	
第八七冊	瑞龍院様御代	御家御日記	慶安三年	自正月至十二月 十二月御帰国
第八八冊	瑞龍院様御代	御家御日記	慶安四年	自正月至十二月 三月御参府
第八九冊	瑞龍院様御代	御家御日記	承応元年	自正月至十二月 御滞府
第九〇冊	瑞龍院様御代	御家御日記	承応二年	自正月至十二月 御滞府
第九一冊	瑞龍院様御代	御家御日記	承応三年	自正月至十二月 御滞府
第九二冊	瑞龍院様御代	御家御日記	明暦元年	自正月至十二月 御滞府
第九三冊	瑞龍院様御代	御家御日記	明暦二年	自正月至十二月 御滞府
第九四冊	瑞龍院様御代	御家御日記	明暦三年	自正月至十二月 御滞府
第九五冊	瑞龍院様御代	御家御日記	万治元年	自正月至十二月 七月御帰国
第九六冊	瑞龍院様御代	御家御日記	万治二年	自正月至十二月 七月御参府
第九七冊	瑞龍院様御代	御家御日記	万治三年	自正月至十二月 十二月御帰国
第九八冊	瑞龍院様御代	御家御日記	寛文元年	自正月至十二月 十月御参府
第九九冊	瑞龍院様御代	御家御日記	寛文二年	自正月至十二月 四月御帰国
第一〇〇冊	瑞龍院様御代	御家御日記	寛文三年	自正月至十二月 三月御参府
第一〇一冊	瑞龍院様御代	御家御日記	寛文四年	自正月至十二月 四月御帰国

- 第一〇二冊 瑞龍院様御代 御家御日記 寛文五年 自正月至十二月 三月御参府
- 第一〇三冊 瑞龍院様御代 御家御日記 寛文六年 自正月至十二月 三月御帰国
- 第一〇四冊 瑞龍院様御代 御家御日記 寛文七年 自正月至十二月 三月御参府
- 第一〇五冊 瑞龍院様御代 御家御日記 寛文八年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第一〇六冊 瑞龍院様御代 御家御日記 寛文九年 自正月至十二月 三月御参府
- 第一〇七冊 瑞龍院様御代 御家御日記 寛文十年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第一〇八冊 瑞龍院様御代 御家御日記 寛文十一年 自正月至十二月 三月御参府
- 第一〇九冊 瑞龍院様御代 御家御日記 寛文十二年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第一一〇冊 瑞龍院様御代 御家御日記 延宝元年 自正月至十二月 三月御参府
- 第一一一冊 瑞龍院様御代 御家御日記 延宝二年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第一一二冊 瑞龍院様御代 御家御日記 延宝三年 自正月至十二月 三月御参府
- 第一一三冊 瑞龍院様御代 御家御日記 延宝四年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第一一四冊 瑞龍院様御代 御家御日記 延宝五年 自正月至十二月 三月御参府
- 第一一五冊 瑞龍院様御代 御家御日記 延宝六年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第一一六冊 瑞龍院様御代 御家御日記 延宝七年 自正月至十二月 三月御参府
- 第一一七冊 瑞龍院様御代 御家御日記 延宝八年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第一一八冊 瑞龍院様御代 御家御日記 天和元年 自正月至十二月 三月御参府
- 第一一九冊 瑞龍院様御代 御家御日記 天和二年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第一二〇冊 瑞龍院様御代 御家御日記 天和三年 自正月至十二月 三月御参府
- 第一二一冊 瑞龍院様御代 御家御日記 貞享元年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第一二二冊 瑞龍院様御代 御家御日記 貞享二年 自正月至十二月 三月御参府
- 第一二三冊 瑞龍院様御代 御家御日記 貞享三年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第一二四冊 瑞龍院様御代 御家御日記 貞享四年 自正月至十二月 三月御参府
- 第一二五冊 瑞龍院様御代 御家御日記 元禄元年 自正月至十二月 四月御帰国
- 第一二六冊 瑞龍院様御代 御家御日記 元禄二年 自正月至十二月 三月御参府

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態

数 量

第一二七冊	瑞龍院様御代 御家御日記	元禄三年	自正月至十二月	五月御帰国
第一二八冊	瑞龍院様御代 御家御日記	元禄四年	自正月至十二月	三月御参府
第一二九冊	瑞龍院様御代 御家御日記	元禄五年	自正月至十二月	六月御帰国
第一三〇冊	瑞龍院様御代・泰心院様御代 御家御日記	元禄六年	自正月至十二月	三月御参府
第一三一冊	泰心院様御代 御家御日記	元禄七年	自正月至十二月	五月御帰国
第一三二冊	泰心院様御代 御家御日記	元禄八年	自正月至十二月	三月御参府
第一三三冊	泰心院様御代 御家御日記	元禄九年	自正月至十二月	六月御帰国
第一三四冊	泰心院様御代 御家御日記	元禄十年	自正月至十二月	三月御参府
第一三五冊	泰心院様御代 御家御日記	元禄十一年	自正月至十二月	四月御帰国
第一三六冊	泰心院様御代・円覚院様御代 公辺御日記	元禄十二年	自正月至十二月	三月御参府
第一三七冊	円覚院様御代 御家御日記	元禄十二年	自正月至十二月	御滞府
第一三八冊	円覚院様御代 御家御日記	元禄十四年	自正月至十二月	御滞府
第一三九冊	円覚院様御代 御家御日記	元禄十五年	自正月至十二月	御滞府
第一四〇冊	円覚院様御代 御家御日記	元禄十六年	自正月至十二月	御滞府
第一四一冊	円覚院様御代 御家御日記	宝永元年	自正月至十二月	御滞府
第一四二冊	円覚院様御代 御家御日記	宝永二年	自正月至十二月	御滞府
第一四三冊	円覚院様御代 御家御日記	宝永三年	自正月至十二月	御滞府
第一四四冊	円覚院様御代 御家御日記	宝永四年	自正月至十二月	御滞府
第一四五冊	円覚院様御代 御家御日記	宝永五年	自正月至十二月	御滞府
第一四六冊	円覚院様御代 御家御日記	宝永六年	自正月至十二月	六月御帰国
第一四七冊	円覚院様御代 御家御日記	宝永七年	自正月至十二月	三月御参府
第一四八冊	円覚院様御代 御家御日記	正徳元年	自正月至十二月	四月御帰国
第一四九冊	円覚院様御代 御家御日記	正徳二年	自正月至十二月	三月御参府
第一五〇冊	円覚院様御代・真藏院様御代・晃禪院様御代 御家御日記	正徳三年	自正月至十二月	御滞府

第一五一冊	晃禪院様御代 御家御日記 正徳四年 自正月至十二月 御滞府
第一五二冊	晃禪院様御代 御家御日記 正徳五年 自正月至十二月 御滞府
第一五三冊	晃禪院様御代 御家御日記 享保元年 自正月至十二月 御滞府
第一五四冊	晃禪院様御代 御家御日記 享保二年 自正月至十二月 四月御帰国
第一五五冊	晃禪院様御代 御家御日記 享保三年 自正月至十二月 三月御参府
第一五六冊	晃禪院様御代 御家御日記 享保四年 自正月至十二月 四月御帰国
第一五七冊	晃禪院様御代 御家御日記 享保五年 自正月至十二月 三月御参府
第一五八冊	晃禪院様御代 御家御日記 享保六年 自正月至十二月 四月御帰国
第一五九冊	晃禪院様御代 御家御日記 享保七年 自正月至十二月 三月御参府
第一六〇冊	晃禪院様御代 御家御日記 享保八年 自正月至十二月 四月御帰国
第一六一冊	御家御日記 享保九年 自正月至十二月
第一六二冊	御家御日記 享保十年 自正月至十二月 御在国
第一六三冊	御家御日記 享保十一年 自正月至十二月 三月御参府
第一六四冊	御家御日記 享保十二年 自正月至十二月
第一六五冊	御家御日記 享保十三年 自正月至十二月
第一六六冊	御家御日記 享保十四年 自正月至十二月
第一六七冊	御家御日記 享保十五年 自正月至十二月
第一六八冊	御家御日記 享保十六年 自正月至十二月
第一六九冊	御家御日記 享保十七年 自正月至十二月 三月御参府
第一七〇冊	御家御日記 享保十八年 自正月至十二月
第一七一冊	御家御日記 享保十九年 自正月至十二月
第一七二冊	御家御日記 享保二十年 自正月至十二月

一四一 五 (事蹟録) (宝暦一三年序)

江戸 写

遠山景慶ほか(編)

蓬左 A・邸中 縦

二六

*慶長五年から元禄一三年までの尾張藩の編年記録。慶安三年正月より承応元年六月、明暦四年正月より寛文元年六月、寛文五年正月より同六年六月、延宝五年七月より天和三年六月の分を欠く。第七五冊より第七七冊は、原本虫損のため明治一九年に転写したもので、「邸中」印はない。

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番
号
表
題

刊
写
年

著
者
(作
成
者)

蔵
書
印

形
態

数
量

第一冊	序 慶長五庚子	第二冊	慶長六辛丑
第三冊	慶長七壬寅	第四冊	慶長八癸卯
第五冊	慶長九甲辰	第六冊	慶長十乙巳
第七冊	慶長十一丙午	第八冊	慶長十二丁未
第九冊	慶長十三戊申	第一〇冊	慶長十四己酉
第一一冊	慶長十五庚戌	第一二冊	慶長十六辛亥
第一三冊	慶長十七壬子	第一四冊	慶長十八癸丑
第一五冊	慶長十九甲寅	第一六冊	元和元乙卯
第一七冊	元和二丙辰	第一八冊	元和三丁巳
第一九冊	元和三丁巳(重複本)	第二〇冊	元和四戊午
第二一冊	元和五己未	第二二冊	元和六庚申
第二三冊	元和七辛酉	第二四冊	元和八壬戌
第二五冊	元和九癸亥	第二六冊	寬永元甲子
第二七冊	寬永二乙丑	第二八冊	寬永三丙寅
第二九冊	寬永四丁卯	第三〇冊	寬永五戊辰
第三一冊	寬永六己巳	第三二冊	寬永七庚午
第三三冊	寬永八辛未	第三四冊	寬永九壬申
第三五冊	寬永十癸酉	第三六冊	寬永十一甲戌
第三七冊	寬永十二乙亥	第三八冊	寬永十三丙子
第三九冊	寬永十四丁丑	第四〇冊	寬永十五戊寅
第四一冊	寬永十六己卯	第四二冊	寬永十七庚辰
第四三冊	寬永十八辛巳	第四四冊	寬永十九壬午
第四五冊	寬永二十癸未	第四六冊	正保元甲申
第四七冊	正保二乙酉	第四八冊	正保三丙戌

第四九冊 正保四丁亥
 第五一冊 慶安元戊子下卷(七月～十二月)
 第五三冊 慶安二己丑下卷(七月～十二月)
 第五五冊 承応二癸巳上卷(正月～六月)
 第五七冊 承応三甲午上卷(正月～六月)
 第五九冊 明暦元乙未上卷(正月～六月)
 第六一冊 明暦二丙申上卷(正月～六月)
 第六三冊 明暦三丁酉上卷(正月～六月)
 第六五冊 寛文元辛丑下卷(七月～十二月)
 第六七冊 寛文二壬寅下卷(七月～十二月)
 第六九冊 寛文三癸卯下卷(七月～十二月)
 第七一冊 寛文四甲辰下卷(七月～十二月)
 第七三冊 寛文七丁未上卷(正月～六月)
 第七五冊 寛文八戊申上卷(正月～六月)
 第七七冊 寛文九己酉上卷(正月～六月)
 第七九冊 寛文十庚戌上卷(正月～六月)
 第八一冊 寛文十一辛亥上卷(正月～六月)
 第八三冊 寛文十二壬子上卷(正月～閏六月)
 第八五冊 延宝元癸丑上卷(正月～六月)
 第八七冊 延宝二甲寅上卷(正月～六月)
 第八九冊 延宝三乙卯上卷(正月～六月)
 第九一冊 延宝四丙辰上卷(正月～六月)
 第九三冊 延宝五丁巳上卷(正月～六月)
 第九五冊 貞享元甲子上卷(正月～六月)
 第九七冊 貞享二乙丑上卷(正月～六月)

第五〇冊 慶安元戊子上卷(正月～六月)
 第五二冊 慶安二己丑上卷(正月～六月)
 第五四冊 承応元壬辰下卷(七月～十二月)
 第五六冊 承応二癸巳下卷(七月～十二月)
 第五八冊 承応三甲午下卷(七月～十二月)
 第六〇冊 明暦元乙未下卷(七月～十二月)
 第六二冊 明暦二丙申下卷(七月～十二月)
 第六四冊 明暦三丁酉下卷(七月～十二月)
 第六六冊 寛文二壬寅上卷(正月～六月)
 第六八冊 寛文三癸卯上卷(正月～六月)
 第七〇冊 寛文四甲辰上卷(正月～六月)
 第七二冊 寛文六丙午下卷(七月～十二月)
 第七四冊 寛文七丁未下卷(七月～十二月)
 第七六冊 寛文八戊申下卷(七月～十二月)
 第七八冊 寛文九己酉下卷(七月～十二月)
 第八〇冊 寛文十庚戌下卷(七月～十二月)
 第八二冊 寛文十一辛亥下卷(七月～十二月)
 第八四冊 寛文十二壬子下卷(七月～十二月)
 第八六冊 延宝元癸丑下卷(七月～十二月)
 第八八冊 延宝二甲寅下卷(七月～十二月)
 第九〇冊 延宝三乙卯下卷(七月～十二月)
 第九二冊 延宝四丙辰下卷(七月～十二月)
 第九四冊 天和三癸亥下卷(七月～十二月)
 第九六冊 貞享元甲子下卷(七月～十二月)
 第九八冊 貞享二乙丑下卷(七月～十二月)

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態

数 量

第九九冊	貞享三丙寅上巻(正月～六月)	第一〇〇冊	貞享三丙寅下巻(七月～十二月)
第一〇一冊	貞享四丁卯上巻(正月～六月)	第一〇二冊	貞享四丁卯下巻(七月～十二月)
第一〇三冊	元禄元戊辰上巻(正月～六月)	第一〇四冊	元禄元戊辰下巻(七月～十二月)
第一〇五冊	元禄二己巳上巻(正月～六月)	第一〇六冊	元禄二己巳下巻(七月～十二月)
第一〇七冊	元禄三庚午上巻(正月～六月)	第一〇八冊	元禄三庚午下巻(七月～十二月)
第一〇九冊	元禄四辛未上巻(正月～六月)	第一一〇冊	元禄四辛未下巻(七月～十二月)
第一一一冊	元禄五壬申上巻(正月～六月)	第一一二冊	元禄五壬申下巻(七月～十二月)
第一一三冊	元禄六癸酉上巻(正月～六月)	第一一四冊	元禄六癸酉下巻(七月～十二月)
第一一五冊	元禄七甲戌上巻(正月～六月)	第一一六冊	元禄七甲戌下巻(七月～十二月)
第一一七冊	元禄八乙亥上巻(正月～六月)	第一一八冊	元禄八乙亥下巻(七月～十二月)
第一一九冊	元禄九丙子上巻(正月～六月)	第一二〇冊	元禄九丙子下巻(七月～十二月)
第一二一冊	元禄十丁丑上巻(正月～六月)	第一二三冊	元禄十丁丑下巻(七月～十二月)
第一二三冊	元禄十一戊寅上巻(正月～六月)	第一二四冊	元禄十一戊寅下巻(七月～十二月)
第一二五冊	元禄十二己卯上巻(正月～六月)	第一二六冊	元禄十二己卯下巻(七月～十二月)
第一二七冊	元禄十三庚辰上巻(正月～六月)	第一二八冊	元禄十三庚辰下巻(七月～十二月)

〔四一〕 〔御系図〕(寛永一八年以降)

江戸前期筆

徳川義直〔筆〕

帖

* 綴子を用いた装幀で書帙・木箱に収められている。木箱には「御太切 甲 壹番」という貼紙あり。書帙には「壹号御箱 大切甲 御系図壹折」という下ケ札あり。

〔四二〕 系譜(寛政四年)

江戸後期写

松平摂津守義裕〔著〕

縦

* 袋入り。一四四一二～一四四一五はまとめて木箱入り。徳川光友の次男義行を祖とする分家(四ツ谷家)の系譜。

〔四三〕 寛政四年壬子正月公義江御指出ニ相成候 四谷・大久保 江戸後期写
御系譜

縦

* 一四四一二・一四四一四を転写したもの。

一四一四 松平出雲守義則家 系譜(寛政四年) 江戸後期写 縦 一

*袋入り。訂正の付箋が多数貼られている。徳川光友の三男義則(のち義昌)を祖とする分家(大久保家)の系譜。

一四一三 源明様御代以後 御黒印初御印譜 江戸末期写 帖 一

*尾張藩九代藩主徳川宗睦から一五代藩主茂徳までの印譜。包紙とも。包紙には「廿四号御箱 尊 源明様御代以後 御黒印初御印譜 三折半」と書かれた下ケ札あり。一四四一―一二―一四四一―一八は一括して木箱入り。

一四一三 御代々様 御花押 江戸末期写 帖 二

*尾張藩歴代藩主などの花押を記したもので、初代義直より一二代斉温までと庶子の分を収めた第一帖と九代宗睦より一五代茂徳までを収めた第二帖からなる。第一帖の冒頭には「御用人手前ニ有之候帳を以与之」という記述がある。第一帖に「廿四号御箱 尊 御代々様御花押墨附 八折・五折二帖」と書かれた下ケ札あり。

一四一五 尾張系譜(明和六年自序) 明和六年筆 徳川勝當(筆) 張府 A 縦 一

*尾張徳川家について記した第一冊と四ツ谷家・大久保家について記した第二冊からなる。著者の徳川勝當は、尾張藩八代藩主徳川宗勝の七男で、寛政七年には四ツ谷家を相続する。第一冊に「廿四号御箱 尊 尾張系譜 花押附録 三冊」と書かれた下ケ札あり。

一四一七 (御花押) 江戸中期写 張府 A 縦 一

*尾張藩初代藩主徳川義直より第九代宗睦までの藩主および庶子の花押を記したものの。

一四一六 (花押) 江戸後期写 縦 一

*初代徳川家康より一一代家斉までの歴代将軍、および御三家・御三卿の当主などの花押を記したものの。

一四一九 系譜(尾張徳川家・寛政九年) 江戸後期写 縦 二

*寛政四年に幕府へ提出した系譜書を寛政九年の指示に従って修正したもの。第一冊に「八号 大切戌 御系譜御扣 二冊」と書かれた下ケ札あり。

一四一三 尾張補任 江戸後期写 縦 一

*徳川義直より宗勝に至る尾張藩歴代藩主の官職補任の年月日を記したもの。「八号 大切戌 尾張補任 一冊」と書かれた下ケ札あり。

一四一三 系譜(紀州徳川家・寛政四年) 江戸後期写 縦 一

一四一四 系譜(松平左京大夫家・寛政四年) 江戸後期写 松平左京大夫頼謙(著) 縦 一

*松平左京大夫家は、徳川頼宣の三男頼純を祖とする紀州徳川家の分家で伊予西条藩主をつとめた。

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態

数 量

一四一 二五 系譜(水戸徳川家・寛政四年)

江戸後期写

縦

一

一四一 二六 系譜(松平大学頭家・寛政四年)

江戸後期写

松平大学頭頼亮(著)

縦

一

* 松平大学頭家は、徳川頼房の四男頼元を祖とする水戸徳川家の分家である。

一四一 二七 系譜(松平大炊頭家・寛政四年)

江戸後期写

松平大炊頭頼救(著)

縦

一

* 松平大炊頭家は、徳川頼房の七男頼雄を祖とする水戸徳川家の分家である。

一四一 二八 系譜(松平播磨守家・寛政四年)

江戸後期写

松平播磨守頼前(著)

縦

一

* 松平播磨守家は、徳川頼房の五男頼隆を祖とする水戸徳川家の分家である。

一四一 二九 御系図(徳川将軍家)

江戸前期写

尾陽

帖

一

* 四代将軍徳川家綱の代までを収録したもの。

一四一 三〇 御家御統帳

江戸・明治写

日記所

縦

三

* 寛政頃までの記述がみられる原本に異なる紙質の増補部分を加え、製本し直したもの。第三冊には四ツ谷家・川田久保家の系譜を付す。

一四一 三一 御統帳

江戸 写

縦

一三

第一冊 乾(公義)

第二冊 兌(御家・同御門)

第三冊 離(紀州・同御家門)

第四冊 震上(水戸・同御家門)

第五冊 震下(越前)

第六冊 巽(加賀・薩摩・安芸)

第七冊 坎(毛利・有馬・上杉)

第八冊 艮(内藤・伊東・織田)

第九冊 坤(榊原・丹羽・本庄)

第一〇冊 元(禁裏)

第二冊 亨(伏見・京極・有栖川・閑院・広幡・正親町・櫛笥・梅沢・樋口)

第三冊 利(五摂家)

第三冊 貞(日光・両本願寺)

一四一 三二 御統帳(卷二欠)

江戸 写

縦

一二

* 卷二(御家・同御家門)は欠本。一四四―三二とはば同内容だが巻数順に一部錯誤がみられる。

第一冊 卷一(公義)

第二冊 卷三(紀州・同御家門)

第三冊 卷四(水戸・同御家門)

第四冊 卷五(加賀・薩摩・安芸)

第五冊 卷六(毛利・有馬・上杉)

第六冊 卷七(内藤・伊東・織田)

第七冊 卷八(榊原・丹羽・本庄)

第八冊 卷九(伏見・京極・有栖川・閑院・広幡・正親町・櫛寄・梅溪・樋口)

第九冊 卷十(禁裡)

第一〇冊 卷十一(越前)

第十一冊 卷十二(五摂家)

第十二冊 卷十三(日光・両本願寺)

一四一 四 (御家譜吟味下)

江戸 写

邸中

縦 四

第一冊 源敬様御家譜吟味下

第二冊 瑞龍院様御家譜吟味下 瑞龍院様御家譜附録吟味下 欽喜院・靈仙院 附自証院 二之丸宗隆院 三之丸松寿院 御子様方

第三冊 泰心院様御家譜吟味下 泰心院様御家譜附録吟味下 瑩珠院様 二之丸梅昌院様 御子様方 円覚院様御家譜吟味下

第四冊 四谷・大久保・川田久保御家譜吟味下

一四一 五 御家御系傍系譜

江戸 写

縦 一

一四一 六 御家御統帳(後欠)

江戸後期写

縦 一

*徳川義直より徳川宗睦まで記載されている。中表紙に「乾參拾四番」と書かれた貼紙あり。

一四一 元 御系譜下

明治 写

縦 一

*徳川義直より徳川義宜まで記載されている。

一四一 四〇 御略系

明治 写

縦 一

*徳川義直より徳川義宜まで記載され、付録として分家である大久保家・川田久保家を添えている。

一四一 四二 (彈正大弼様御撰述 御系譜御草稿)

江戸 写

縦 二

*表紙には「尾張系譜」という後筆がある。二種類の系譜書からなり、両者ともに訂正のための付箋が多数施されている。なお、表紙にある「彈正大弼」は徳川勝當を指すものと考えられるが、勝當の著作である「尾張系譜」では明和六年の自序があるのに対し、この系譜書は寛政期まで記述がおよんでおり、本書を徳川勝當の著作と考えるには注意が必要である。

一四一 四三 御家譜(源敬公事蹟書下書)

江戸 写

縦 一

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

*中表紙に「乾五番式冊」という朱筆があり、冒頭に「巻第二」と記されているところから、本来は二冊以上で構成されていたものの一部であると考えられる。

一四一四 系譜(元治元年成立)

江戸末期写

*徳川義直より徳川茂徳まで記載されている。中表紙に「乾式拾式番ノ七」という朱筆および「元治元年公義江御差出相成候下書」と書かれた貼紙あり。

一四一五 〔御系譜〕

享和二年写

*徳川義直より徳川斉朝まで記載されている。冒頭に「享和二年壬戌以江戸御記録所本繕写之」という記述あり。

一四一六 〔御系譜〕

江戸後期写

尾記録・日記懸

*徳川義直より徳川宗睦まで記載。冒頭に「此一冊者旧記録所ニ有之一本也、然るに享和壬戌の春江府御記録所の正本を以新に壹本を書写して尾藩の御記録所におさむ、記事少く異同あり、故に此事を誌して後覽の便とす」と記されている。

一四一七 御系譜草稿

江戸後期写

*徳川綱誠より徳川宗睦までを記載し、大久保家系図を付す。中表紙に「乾拾式番ノ七」という朱筆あり。

一四一八 御家譜(源敬公事蹟下書)

江戸写

*一四四一四五とはほぼ同内容であるが、本書で貼紙をもって削除されている部分の記述が一四四一四五では見られないことから、一一四一四五よりも前の段階で作成されたものと考えられる。中表紙に「乾十三番ノ三」という朱筆あり。

一四一九 御系譜草稿(御家御系譜)

江戸後期写

*徳川義直より徳川宗睦まで記載されている。題簽外題では「御家」という加筆があり、「草稿」の文字は塗抹されている。中表紙に「乾壹番」という朱筆あり。

一四二〇 系譜(寛政四年成立)

江戸後期写

*徳川義直より徳川綱誠まで記載されている。中表紙に「寛政四年三月朔日松平越中守殿江御指出被遊候泰心院様以前之御系譜」と書かれた貼紙あり。

一四二一 系譜

江戸後期写

*徳川義直より徳川宗睦まで記載されている。中表紙には「乾二番ノ四」という朱筆あり。

一四二二 系譜

江戸後期写

縦

一

* 徳川綱誠より徳川宗睦まで記載されている。中表紙に「三番ノ三」という朱筆あり。

一四―三 (補正 御系譜)

江戸後期写

邸中

縦

* 徳川義直より徳川斉温まで記載されている。

一四―七 尾州家〔尾州家御系譜〕

明治一二年写

縦

* 徳川義直より徳川義禮まで記載されている。朱筆による補訂が多数みられる。

一四―九 源敬様御統帳改正案

明治 写

縦

* 御統帳の原文を黒色で、改正案を朱色で記入したもの。

一四―八 系譜 改正案

明治 写

縦

* 徳川義直より徳川義禮まで記載されている。

一四―二 (御系譜調下)

明治 写

縦

一四―三 親族書(明治九年)

明治 写

従一位 徳川慶勝〔著〕

縦

* 督部長の岩倉具視に対して差し出されたものの写。

一四―三 親族書(明治九年)

明治 写

縦

* 一四四―八：とほぼ同内容だが、後半の一部に欠落がみられる。

一四―四 (源昭様 御部屋一卷)(役寄帳・安永年間)

江戸 写

縦

一四―五 (御系図御省ニ相成候 御子様方之儀ニ付吟味伺済之写)

江戸後期写

縦

一四―六 俊姫様・五郎太様御系

江戸後期写

縦

* 俊姫・五郎太は、尾張藩九代藩主徳川宗睦の養子治行の長女・長男にあたる。

一四―七 源戴様之御子様方〔源戴様御子様方〕

江戸後期写

縦

* 尾張藩八代藩主徳川宗勝の子女に関する系図。

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態数量

一四一六 御歴代様御譜伝草稿

江戸後期写

*徳川義直より宗睦まで記載されている。中表紙に「十三番ノ四」という朱筆あり。

一四一六 瑞龍公御家譜附録草稿

江戸写

*中表紙に「乾拾七番ノ四」と朱書された貼紙あり。

一四一七 〔彈正大弼様御撰述御系譜之内 源敬様・瑞龍院様御譜
伝書抜〕

文化九年写

尾記録・日記懸

縦一

*「彈正大弼様御撰述御系譜」とは、徳川勝富の「尾張系譜」(一四四―一五)を指す。

一四一七 源敬様・瑞龍院様御統書抜

江戸写

*中表紙に「乾三拾四番」と朱書された貼紙あり。

一四一七 系譜(公義へ御指出相成候 系譜)

江戸末期写

日記所

縦一

*徳川義直より慶藏まで記載されている。

一四一七 寛政九年巳十月 御系譜御訂一卷

江戸後期写

邸中

縦二

*幕府より寛政四年に提出した系譜の修正を命じられた際の記録。第一冊の中表紙に「乾十式番ノ三式冊」と書かれた貼紙あり。

一四一七 〔泰心院様御覺官之事〕

江戸写

縦一

一四一七 光友卿御年譜草稿

江戸写

*中表紙に「乾拾貳番ノ一」と書かれた貼紙あり。

一四一七 福君様御統書(御簾中様御統書)

江戸末期写

*「福君」は鷹司政熙の女で、尾張藩二代藩主徳川斉温の継室となった人物である。

一四一七 〔御側方下 磯姫様御養女被仰出候節覚書〕(宝永五年)

江戸写

邸中

縦一

*磯姫は尾張藩三代藩主徳川綱誠の女で、宝永五年三月に將軍徳川綱吉の養女となり、同年十一月には前田吉徳に嫁した。

一四一六 泰心公御家譜附録草稿 瑩珠院様 二之丸梅昌院様 御子 江戸 写 縦 一

一四一七 御系〔源敬様 御系〕 江戸 写 縦 一

一四一八 泰心公御家譜草稿〔泰心院様御家譜草稿〕 江戸 写 縦 一

一四一九 〔円覚院様改正草稿〕 江戸 写 縦 一

*冒頭には「御家譜卷第四」と記されている。

一四二〇 真巖院様御家譜 江戸 写 縦 一

*冒頭には「御家譜卷第五」と記されている。

一四二一 〔御家御系譜 附録御連枝方〕 江戸 写 縦 一

*徳川義直より宗睦まで記載されている。末尾に四谷家・大久保家系図を付す。

一四二二 〔御統書附屬之品〕 江戸末期写 横・縦 三

*「御統帳訂継ニ相用ひ候御帳之覚」二冊（文久元年・万延元年作成）と「〔御統帳訂正案〕」一冊（寛文二・延宝三年の内容）からなる。

一四二三 〔御統帳〕 江戸後期写 縦 五

*第三冊・第五冊は別種本である。

第一冊 西園寺・徳大寺・今出川・広幡・樋口・正親町・野宮・裏辻・四条・高倉

第二冊 近衛・九条・二条・一条・鷹司

第三冊 伏見・京極・有栖川・閑院・広幡・正親町・櫛崎・梅溪・樋口

第四冊 安芸・上杉・毛利・島津・加賀・井上・内藤・織田・伊東

第五冊 榊原・丹羽・本庄

一四二四 〔御系譜公義 江御指出ニ付御吟味之留写〕 弘化四年写 縦 三

第一冊 泰心公以前之御系譜公義 江御指出ニ付御吟味伺済之写（寛政四年）

第二冊 泰心公以来之御系譜公義 江御指出ニ付御吟味等之留写（寛政二・三・四年）

旧蓬左文庫所蔵史料目録（下）

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態 数量

第三冊 四谷御家 公義江御指出之御系譜写(寛政四年)

一四一 二 (公義江御指出之御系譜写)(寛政四年)

江戸後期写

縦 九

第一冊 公義江御指出之敬公・瑞龍公御系譜写

第二冊 公義江御指出之泰心公以来御系譜写

第三冊 大久保御家 公義江御指出之御系譜写

第四冊 紀州 公義江御指出之御系譜写

第五冊 左京大夫様御家 公義江御指出之御系譜写

第六冊 水戸 公義江御指出之御系譜写

第七冊 大学頭様御家 公義江御指出之御系譜写

第八冊 播磨守様御家 公義江御指出之御系譜写

第九冊 大炊頭様御家 公義江御指出之御系譜写

一四一 三 寛政八辰年より 公義御系図ニ可被注哉之ヶ条年々公義江御書出之一巻留

江戸後期写

縦 一

*寛政八年より天保一〇年までの内容を収める。見返しに「旧日記所本甲 公義御系図ニ可被注哉之ヶ条年々公義江御書出之留 壹冊 第七十二番」と書かれた貼紙あり。

一四一 六 系譜(弘化四未年公義へ御指出相成候扣 系譜)

弘化四年写

縦 一

*中表紙に「乾六番ノ四」という朱書、「弘化四未年公義江御指出相成候扣」と書かれた貼紙あり。

一四一 七 弘化元辰年方 公義御系譜ニ可被注哉之ヶ条年々調出候一卷留

江戸末期写

御日記所附(編)

日記所

縦 一

*弘化元年より文久三年までの内容を収める。

一四一 八 (嘉永五子五月 公義江御差出ニ相成候御系譜之内御側御扣本之分御訂統一巻)

江戸末期写

御日記所(編)

日記所

縦 一

一四一 九 弘化四未年 公義江御指出相成候御系図取調ニ付吟味并伺頭書等之留(公義へ御指出相成候御系譜取調ニ付吟味并伺頭書等之留)

江戸後期写

日記所

縦 一

*表題にある内容のほか「御用人衆より御年寄衆江伺相成候補下留」を収める。

一四一 一〇 (公義御系図ニ可被注哉之ヶ条年々公義ニ御書出之一巻)

弘化四年写

日記所

縦 一

留(寛政八、弘化三年)

一四一 二 御系譜・御家譜調方之規矩(寛政四年) 江戸後期写 縦 一

*見返しに「旧日記所本甲 御系譜・御家譜調方之規矩并雛形四冊 第三十八番」と書かれた貼紙あり。中表紙に「雛形三冊添」と添書されており、これは一四五―一二にあたるものと考えられる。

一四一 三 「御家譜雛形」 江戸後期写 縦 三

*本来は一四五―一一に添えられていたものと推定される。

一四一 三 「御家御統帳訂継調下 高須共」(文政一〇、天保一四年) 江戸後期写 縦 一

一四一 四 御系譜調方心得之大概(御系譜調方心得) 江戸 写 調方手伝方(編) 縦 一

一四一 五 御系譜調方心得帳写(御系譜調方心得) 江戸 写 邸中 縦 一

一四一 六 「寛政二戌年ヨリ 御系譜御用ニ付御家中始町在寺社所持之私録相尋候付諸向より差出候書籍之留」 江戸後期写 御系譜方(編) 縦 一

一四一 七 御系図・御家譜調ニ付御評議等之一巻(御系図・御家譜調ニ付御評議等ノ一卷)(寛政四年) 江戸後期写 縦 一

*中表紙に「乾十二番ノ六」という朱筆および「公義江出候御系譜調ニ付御吟味之趣ハ別帳ニ詳なり、見合へし」という添書あり。

一四一 八 「御系譜御記録御用留」(寛政一、九年) 江戸後期写 縦 一

一四一 九 「御系譜御用ニ付吟味書付留」 寛政二二年写 御右筆所 御日記懸(編) 縦 四

*この史料は本来、①「御系譜御用ニ付吟味書付」、②「同吟味ニ付状留」、③「同吟味書付」、④「御黒印由緒事」の四つにまとめられていたが、②が一四五―二〇となり、④は「御黒印由緒書」と題されて一三八―三三という番号を付与されて独立、現在は①と③が右の表題の史料として残されている。また①と③は後年の改装によってそれぞれ二冊され、現在の冊数は四冊である。第一冊の冒頭に「旧日記所本甲 御系譜・御記録三冊 第廿番」と書かれた貼紙、「乾八番三冊」と朱書された貼紙あり。

一四一 二〇 江戸方ニ有之御系譜・御記録吟味ニ付状留(御系譜・御記録吟味ニ付状留) 寛政二二年写 御右筆所 御記録懸(編) 尾記録 縦 二

*もともとは一四五―一九に含まれていたもの。後年の改装により二冊に分冊されている。

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態 数量

一四一三 御年譜略抜萃〔御年譜抜萃〕

江戸 写

縦 一

* 徳川家康・秀忠の事蹟を上下二段に分けて記したもの。

一四一三 徳川系譜(文政年間)

江戸 後期写

寺社

縦 一

* 源経基より徳川家斉まで記載されている。

一四一四 御年表調下(文政元弘化二年)

江戸 後期写

日記所

縦 三

* 第一冊は禁裏・五摂家、第二冊は公義・御三卿、第三冊は御三家・御庶流を収める。

一四一六 〔御親類書〕

江戸 写

横半 一

* 徳川慶藏の「御親類書」と「慶藏卿・斉朝卿御養実御統略系」を収めた一冊、および安政二年の「中納言様御親類書」一冊を合綴したもの。

一四一三 〔御統使覧〕

江戸 後期写

縦 一

一四一三 松平出雲守義則家系譜〔大久保御系譜〕(寛政四年)

江戸 後期写

縦 一

一四一三 〔四谷・大久保御縁家御心易〕

江戸 後期写

縦 一

* 尾張徳川家の分家である四ツ谷・大久保の御縁家、「御心易」の諸侯の家々に関する略系図。各家とも文政と天保頃の内容が中心となっている。

一四一四 四谷御家御系譜

江戸 後期写

縦 一

* 尾張徳川家の分家である四ツ谷家の系譜書。記述は、徳川光友の次男義行に始まり松平義裕に至る。

一四一五 松平久五郎殿系譜写(寛政二年)

江戸 後期写

縦 一

* 徳川綱重の第3子清武を祖とする越智松平家の系譜書。代目にあたる松平武雅が四ツ谷家(尾張徳川家の分家)より養子に入った関係から書き写されたものと考えられる。

一四一六 四ツ谷・大久保・川田久保御家譜草稿

江戸 写

縦 一

一四一四 水戸(水戸御系)

江戸 写

縦 二

一四一三 紀州(紀州御系)

江戸 写

縦 二

*第一冊の見返しに「旧日記所本甲 紀州 式冊 第八番」と書かれた貼紙あり。

一四一 三 公義(系図)

江戸 写

縦

*中表紙に「乾二拾一番ノ四」という朱書あり。

一四一 四 御統書 公卿衆

江戸 写

縦

*見返しに「旧日記所本甲 御統書公家衆・御統簿御三家 式冊 第八十九番」と書かれた貼紙があるが、御三家に関する分は現存していない。

一四一 五 寛政四年壬子正月廿五日 公義江御差出有之候 紀州

江戸後期写

縦

・水戸御系譜写 御家門方共

*表紙に「乾十九番ノ三」という朱筆あり。

一四一 六 寛政四年壬子正月廿五日 公義江御指出有之候 紀州・

江戸後期写

縦

水戸御系譜写 御家門方共(紀州・水戸御系譜写 御家門様方共)

一四一 七 公義御統帳

江戸後期写

縦

*徳川家治より家慶まで記載されている。

一四一 八 公義御統帳

江戸後期写

縦

*松平広忠より徳川家重まで記載(御三卿を含む)。もともとは一四五―一四九と一組であったものと考えられる。

一四一 九 四谷御系譜

江戸後期写

縦

*中表紙に「乾二拾一番ノ五」という朱書あり。各所に「問合」のための付札がある。

一四一 一〇 撰関家略系図

江戸 写

縦

一四一 一一 宮門跡・撰家門跡・准門跡系譜

江戸後期写

縦

*各所に安政・慶応期の事項に関する増補の貼紙がみられる。

一四一 一二 御心易

江戸後期写

縦

*「御心易」の諸侯一二家に関する略系譜。文政年間の記述が中心となっている。

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番 号 表 題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態 数量

一四一 六 源敬様御自撰之御書物校合被仰付候以来取扱之一卷

江戸後期写

御記録所(編)

邸中

縦 一

(寛政二)享和四年)

一四一 七 (御記録編集并校合方根居)(寛政二)文化三年)

文政元年写

*文政元年の御記録調再興に際して、中絶以前の仕法を吟味してとりまとめたもの。

一四一 八 (天明四年五月 御日記 江戸・尾州)

江戸 写

蓬左 A

縦 一

一四一 九 (小笠原長昌寛書日記)(寛文元)六年)

江戸 写

邸中

縦 六

*尾張藩士で寄合に属し、元禄五年より御用人、同六年より寺社奉行をつとめた小笠原長昌(新蔵・三郎右衛門)の日記。各年ごと一冊ずつにまとめられている。

一四一 一〇 (御城帳書抜)

天明七年写

*第一冊の冒頭に御用人星野八左衛門旧蔵本を取り寄せて御右筆部屋の備え付けにした旨の記述あり。

第一冊 (慶安四年六月)延宝八年)

第二冊 (延宝九)元禄一六年)

第三冊 (元禄一七)正徳五年)

第四冊 (享保元)寛延三年)

第五冊 (寛延四)安永四年)

縦 五

一四一 一一 (御直書抜抄 御国政之部・内国之部・同附録)(嘉永四)安政五年)

写年未詳

縦 一

*尾張藩主徳川慶恕のもとで授受された書簡や布達などをまとめたもの。

一四一 一二 戸山御土蔵入御鉄炮目録(戸山附東都總炮録)

江戸後期写

縦 一

一四一 一三 (御冥加自普請御称詞之記・御冥加自普請日記之中抜書)(天明三)四年)

江戸 刊

日々新

縦 一

押切村 小出大助(著)
版元未詳

一四一 一四 (御縁家方)(略系図)

江戸後期写

縦 一

*文化)文政年間の記述が中心となっている。

一四一 一五 (御判鑑帳)(御老中・御用人衆)

江戸 写

横・小 二

*第一冊の表紙に「第四拾三号 事務」の貼紙、第一丁表に「廿三番 弍拾号」と書かれた下ケ札あり。

一四一三 御印影台帳(徳川義禮印譜) 明治 写 縦 一

*徳川義禮が使用する印判を印箱ごとに分類して示したもの。

一四一六 御花押(歴代尾張藩主等花押影) 江戸末期写 縦 一

*徳川家康および徳川義直より慶恕までの歴代尾張藩主・庶子の花押を示したもの。

一四一七 (御祠堂御神位図) 江戸 写 鋪 一

*歴代尾張藩主および夫人らの神位の位置を示したもの。小図二枚の下端を厚紙に貼り付け、折り上げることによって立体的に表現できるようになっている。

一四一八 (御祠堂御祭事御手扣) 江戸 写 横・小 一

*半切の状ものの史料を貼り合わせて冊子に仕立てている。

一四一九 (御祠堂沿革図) 弘化二年写 縦 一

一四二〇 前大納言様御精進日帳 天保一五年写 縦 一

*末尾に「天保十五辰年十一月御側懸留役通用ニ而尾州より取寄候事」という記載あり。弘化年間の書き継ぎがみられる。

一四二二 (御誌之銘・御位牌写) 江戸 写 邸中 縦 一

*歴代尾張藩主などに関する誌石の銘文・位牌の記載について、寺院ごとに分類してまとめたもの。

一四二三 (桜御殿御精進日) 江戸 写 御広敷御用部屋(編) 帖 一

*表紙に「万延元申改」という押印あり。見返しに「桜御殿御精進日 一折 御家記録 たノ箱」と書かれた貼紙あり。

一四二四 (梅御殿御精進日) 江戸 写 御広敷御用部屋(編) 帖 一

*表紙に「天保庚子」「万延元申改」「広」という押印あり。見返しに「梅御殿御精進日 一折 御家記録 たノ箱」と書かれた下ケ札あり。

一四二五 (乗蓮院様御精進日) 江戸 写 帖 一

*表紙に「天保庚子」「万延元申改」「広」という押印、裏表紙に「辰改」という貼紙あり。見返しに「乗蓮院様御精進日 一折 御家記録 たノ箱」と書かれた下ケ札あり。

一四二六 (御祠堂御祭奠式) 江戸後期写 縦 一

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

一四一六 (日記之内 御祠堂取扱事便覧)

弘化二年写

御城 御小納戸頭取(編)

縦

一

一四一七 源懿様御神主御虞祭・御耐祭等取扱一卷(弘化二年)

江戸写

縦

一

* 末尾に明治五年「貞慎院様御神主御虞祭・御耐祭一卷」を合綴している。

一四一八 大久保村御抱屋敷御譲請一卷(安政三・慶応三年)

江戸末期写

問瀬権右衛門(編)

縦

一

一四一九 市買御添地御拝領・向御屋鋪御上ケ地・大草御屋敷御上ケ地一件留(明和五年・後欠)

江戸写

縦

一

一四二〇 紀州様系譜

江戸後期写

縦

一

* 徳川光貞より治貞まで記載されている。

一四二一 (紀州御統帳)

江戸末期写

縦

一

* 徳川頼宣より茂承まで記載されている。末尾に分家である伊予西条松平家の系譜書を付す。

一四二二 (水戸御統帳)

江戸末期写

縦

一

* 徳川頼房より親敬(慶馬)まで記載されている。末尾に分家である高松松平家・守山松平家・長沼松平家・穴戸松平家の系譜書を付す。

一四二三 紀州御統帳訂継調下 西条共

江戸末期写

縦

二

一四二四 (水戸御統帳訂継調下 高松・守山・長沼・穴戸共)

江戸末期写

縦

二

一四二五 信濃国両郡歴代(信濃国両郡歴代)

江戸後期写

蓬左 A

縦

一

* 見返しに昭和八年九月七日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。両見返しには、本書が大保二三年に貸本として使われていたことを示す記述がみられる。

一四二六 信濃国城主得代記(城主得代記)

江戸写

蓬左 A

縦

一

* 昭和八年九月一三日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。

一四二七 編年録(元禄一四〜寛延三年)

写年末詳

縦

一

* 見返しに名古屋図書館本「元禄十四ヨリ寛延三迄日記」(武道要話雑抄録 九十八)の抜粋をもって校合した旨の昭和十二年二月付の貼紙あり。

一四一 〇 〔編年便覧〕 江戸末期写 蓬左 A 縦 一

*慶安三年より安政三年までの尾張藩主の参府・帰城の月日と経路、月の大小を示したもので、後半には尾張徳川家の略系図、将軍家・紀州家・水戸家の歴代一覧が添えられている。昭和八年九月一三日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。

一四一 一 町奉行所分限帳(天保一五年改) 江戸後期写 蓬左 A 横・小 一

*昭和八年九月一三日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。

一四一 二 竹腰系図 明治四五五年写 縦 一

*末尾に中村修所蔵本をもって謄写した旨の植松安による朱筆あり。

一四一 三 家譜 初代・二代旧記(成瀬隼人正家譜)(享和三年) 大正元年写 成瀬隼人正(著) 蓬左 B 縦 一

*末尾に中村修所蔵本をもって謄写した旨の後藤鍊次郎による朱筆あり。

一四一 四 人見弥右衛門上書(安永七年) 大正二年写 人見弥右衛門(著) 縦 一

*末尾に中村修所蔵本をもって謄写した旨の植松安による記述あり。

一四一 五 〔視聽実記〕(宝暦一一年成立・卷一欠) 江戸写 縦 五

*卷二・卷六のみ現存。見返しに「五百廿九番ノ上 視聽実記 六冊一ノ卷欠」と書かれた貼紙あり。名古屋図書館本と校合した際に施された付箋が多数みられる。

一四一 六 蓬左旧記(異本蓬左旧記) 江戸写 日記所 縦 一

*見返しに「蓬左旧記 壹冊 城外西西ヲ分チ記ヒノ箱」と書かれた貼紙あり。

一四一 七 〔蓬左旧記〕 江戸写 邸中 縦 一

*紙帙には「異本」というペン書きあり。ただし内容は一四六一一とは異なる。

一四一 八 〔尾陽旧記〕 写年未詳 縦 一

*武衛家より尾張徳川家に至る名古屋の領主に関する略伝。

一四一 九 名古屋旧話録 下(張藩事始) 江戸写 縦 一

*卷之上は欠本。「張藩事始」と「名古屋町附小名字附」の二つの部分からなる。なお本書には、本来は末尾にくるべき部分が第一丁に入っているなど、錯綴と思われる箇所がある。

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番 号 表 題	刊 写 年	著 者 (作 成 者)	蔵 書 印	形 態	数 量
一四一六 尾張国名蹟略志考(名蹟略志考)(延享二年跋)	江戸 写	佐分清円(著)	張府 A	縦	三
一四一七 金城創業志	昭和七年写		蓬左 C	縦	一
	* 末尾に中井憲三所蔵本を津田応助が転写した旨の記述あり。				
一四一八 (愛知県海西郡弥富町荷上近傍旧記写)	大正六年写	服部弥兵衛(編)		縦	一
	* 末尾に海西郡弥富町荷上の服部弥兵衛方より借用し謄写した旨の植松安による記述あり。				
一四一九 尾藩老談録(文化六年起筆)	昭和八年写	中山和清(著)		縦	一
	* 末尾に久野保心所蔵の自筆本をもって謄写した旨の記述あり。				
一四二〇 御出入之衆御・由緒(御心安人名衆・御役人衆其外書上帳・安永年間)	江戸 写			横・小	一
	* 書き上げられた人物と職名から安永六年から同八年の間のもものと推定される。				
一四二一 聚聞雑書	江戸後期写	野口義門(著)		縦	一
一四二二 古武鑑写	寛政八年写	邸中		縦	一
	* 尾張藩の役人が本屋を通じてある旗本より古武鑑を借り受け、御三家・御連枝に関する部分を抜き出して転写したもの。書き写した紙片を貼り込む体裁をとっている。				
一四二三 (米倉蔵書)	弘化三年写	御日記所(編)		縦	一
	* 尾張藩の御弓役を勤める米倉半兵衛の蔵書の中からさまざまな記事を書き抜いたもの。				
一四二四 美濃国産物之内絵図注書	江戸 写	御石筆部屋附(編)		縦	一
一四二五 (御当家之書)	江戸 写			縦	五
	第一冊 一(御当家軍陳之書) 軍ノアトエ(御当大家大將六具之次第) 軍ノ跡へ入(軍陳にて頸対面の事ほか)				
	第二冊 五(御当家弓之書) 六(御当家馬の書) 七(御当家鷹請取渡様の事)				
	第三冊 八(御当家御祝言の事) 九(御当家御祝言之次第) 十(御当家御男子御祝の次第) 十一(御当家御女子御祝儀の次第)				

第四冊 十二(御当家太刀之事并諸色寸法の書) 十三(御当家書札色紙短冊之書) 十四(御当家御膳部の書) 十五(御当家御能并鞠の書) 十六(御当家硯の書) 十七(御当家香炉灰香之次第)

第五冊 十八(御当家御通の書) 十九(御当家披露物の書) 二十(御当家主人江礼儀之書) 二十一(御当家物の喰やう并諸色の書)(追加・長柄銚子かへ請取渡しやうの事ほか) 二十二(御当家諸色積物の書) 大尾(御当家方の書)

一四一 九 (御当家年中行事)

江戸後期写

日記所

縦

一

*幕府の年中行事について記したもの。

一四一 〇〇 (御婚礼御規式留)(文政一一年)

江戸後期写

縦

三

*「御婚礼御規式留」(第一冊)、「御婚礼諸色寸法并仕様書」(第二冊)、「御婚礼御用御下知并進達留」(第三冊)の三種類からなる。

一四一 〇四 (年中御登城之節之御式御覚書)(寛政八年)

寛政八年写

小笠原總左衛門(編)

縦

一

*野村佐太夫による写。

一四一 〇六 (年中御登城之節之御式御席図)(寛政八年)

寛政八年写

縦

一

一四一 〇七 (年中御豫参之極)

江戸後期写

縦

七

第一冊 卷一 年中御豫参之極

第二冊 卷二 年中御豫参御次第書

第三冊 卷三 年中定例之外并御自拝之御次第書

第四冊 卷四 定例之外御豫参并御自拝之例寄

第五冊 卷五 年中御自拝之極

第六冊 卷六 年中御自拝并定例之外御自拝之御次第書

第七冊 卷七 御自拝之御例寄

一四一 二三 (当家諸祝式秘抄)

江戸写

邸中

縦

一

一四一 二五 (当家諸抄大成)(天明元年)

江戸写

秋鹿政友(著)

邸中

縦

一

*犬追物・八張弓・眉作など有職故実に関する秘書・口伝を集めたもの。

一四一 二六 (御小納戸・御錠口番打込勤向等覚書)

江戸写

縦

一

一四一 二三 (年中御通記)

江戸写

縦

一

*城中などで行われる飲食儀礼に関するもの。

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態 数 量

一四一三 〔御膳番・奥御番・御小納戸・御錠口番勤向〕

江戸 写

縦 一

一四一四 尾地震農家田畑破損帳(安政元年)

江戸末期写

縦 一

* 安政元年一月四日・五日に発生した地震の被害を報告したもので、原表題は「内密書」となっている。

一四一五 〔高潮浸田記〕(安政二年)

江戸末期写

縦 一

* 安政二年八月二〇日に起こった高潮の被害状況を報告したもの。原表題は「内密書」となっている。

一四一六 〔勝繰合算〕

江戸 写

尾藩 無名居士(著)

縦 一

* 御勝手御繰合筋に関する私案を示したもの。

一四一七 〔御当家礼式〕

江戸 写

縦 一

一四一八 御当家之御軍器(正徳四年)

江戸 写

邸中

縦 一

* 尾張藩が軍陣で用いる旗・指物などを図示したもの。

一四一九 〔公裁要務〕

江戸後期写

縦 三

* 第一冊の見返しに「五百三十号上ノ六 公裁要務 三冊」と書かれた貼紙あり。

一四二〇 山崎川瀬達用水御堀替 一卷(用水御堀替)(嘉永・安政三年)

江戸末期写

縦 一

一四二一 御側御囲金覚(弘化三・元治元年)

元治元年写

縦 一

* 題簽に「二六二号」という記載あり。

一四二二 潰銀 一卷(慶応二・明治三年)

明治 写

江戸 御広敷御用部屋(編)

縦 一

* 題簽に「三〇八号」という記載あり。

一四二三 御勘定所江御下ケ金 一卷(御勘定所へ御下ケ金 一卷)(安政七・元治元年)

元治元年写

縦 一

* 題簽に「三一六号」という記載あり。

一四一六 美濃国惣高帳(元禄年間) 江戸 写 縦 一

*伊藤祐隆による写。題簽に「三八八号」という記載あり。末尾に記された幕府代官の名前から判断して元禄年間に作成されたものを転写したと考えられる。元禄郷帳を基礎にして各項目ごとに領主名を肩書きしたものか。

一四一三 東京御屋鋪地一卷(東京御屋敷一卷)(明治元〜五年) 明治 写 縦 一

*題簽に「御記録第九十六号」という記載あり。内表紙に「維新史137」と書かれたラベルがはさま込まれている。

一四一五 (当用書札法式)(慶安四年成立・卷一〜六欠) 江戸後期写 久保正之(著) 縦 二

*卷七〜卷十一のみ残存。題簽に「御記録第一四〇号」という記載あり。

一四一七 御朱印・御黒印・寺領高有之寺社寄物(御朱印・御黒印・寺領高有之寺社)(文政六年カ) 江戸後期写 縦 一

*題簽に「御記録第五十九号」という記載あり。

一四一六 公義江御系譜御差出ニ付 御吟味等之留(公義江御系譜 御差出付 御吟味等之留)(寛政一〜四年) 江戸 写 縦 一

*後半に「御系譜訂方吟味」を付す。題簽に「御記録第四十号」という記載あり。

一四一六 泰量院様御遺領撰津守様へ御相続ニ付取扱一卷 前中 江戸後期写 御番方(編) 縦 一

納言様・御簾中様・維学心院様取扱共(泰量院様御遺領撰津守様御相続ニ付取扱一卷)(天保二年)

*四ツ谷家の松平義建(撰津守)が父義和(泰量院)の遺領を相続した際の記録。題簽に「御記録第一百四十四号」という記載あり。

一四一七 (御雲譜日記)(弘化頃) 江戸後期写 御小納戸頭取(編) 縦 一

*表紙には「尾州定置」とある。弘化年間頃につくられたと考えられる日記帳を書き継いでいったもの。記載は將軍家や尾張徳川家関係者のみならず、御心易の大名・旗本やその家族にもおよんでいる。

一四一七 靈仙院祠堂記(靈仙院様御祠堂記)(元禄一二年成立) 天保一一年写 並河子建(著) 縦 一

*靈仙院は三代將軍徳川家光の長女千代姫のことで、第二代尾張藩主徳川光友に嫁した。表紙に「御年回線箱江入置」という貼紙、末尾に建中寺にある本書より転写した旨を記した貼紙あり。

一四一七 源白様御位記口宣写(安永三年) 江戸 写 縦 一

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

*「源白様」とは四ツ谷家四代当主松平義敏の長男(はじめは松平義柄を名乗る)で、安永六年に第九代尾張藩主徳川宗睦の養子となった徳川治行のことを指す。題簽に「御記録第三十七号」という記載あり。

一四一七三 源戴様御位記口宣写(享保一七年)

江戸 写

縦

一

*「源戴様」とは、はじめ松平義淳を名乗り、元文四年に四ツ谷家から本家である尾張徳川家の養子となり、第八代尾張藩主となった徳川宗勝のことである。題簽に「御記録第三十六号」という記載あり。

一四一七五 御歴代御一字・御諱・懸緒免状并世子庶子方位記・宣旨・口宣

江戸後期写

縦

一

*題簽に「御記録第三十五号」という記載あり。

一四一七七 御忌日録

天保二年写

縦

一

*市ヶ谷邸の御広敷御用部屋によって転写されたもの。

一四一七九 御年回繰(上巻のみ)

江戸 写

縦

一

一四一七九 江戸(慶安三)寛文八年

江戸 写

縦

一

*御小納戸などの藩主側近の者が記した日記から第九代尾張藩主徳川光友の江戸における行動に関する部分を抜き書きしたものと考えられる。着衣についての記述が詳細なのが特徴である。

一四一八〇 尾州(慶安三)天和三年

江戸 写

縦

三

*一四六一・一七九と同様の性格を有する史料で、徳川光友の尾張における行動について抜き書きしたもの。

一四一八二 寛政年以來役々人数調一卷(寛政年以來役々人数調帳)

江戸 写

御広敷御用人(編)

縦

一

(弘化四年)

一四一八三 御上国・御参府諸留

江戸後期写

蓬左 A

横・小

一

*昭和十三年五月九日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。

一四一八五 信濃国昔姿(大凡諏方 信濃国昔姿)

江戸 写

蓬左 A

縦

一

*昭和十三年五月九日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。

一四一〇三 敬公梅花詩書片 石摺写〔敬公梅花詩書片〕 江戸 写 縦 一

一四一〇三 〔奥向分限帳〕〔元治元年〕 江戸末期写 蓬左 A 横・小 一

*見返しに「旧日記所本乙 奥向分限帳 老冊 第九十番」「奥向分限帳 老冊 やノ箱」と書かれた貼紙あり。

一四一〇二 大君言行録〔頼宣公言行録〕〔天和二年序〕 江戸 写 真如〔著〕 縦 一

一四一〇三 〔徳川世記〕 江戸 写 張府 B 縦 一

一四一〇五 松永道斎聞書 江戸 写 松永良明〔著〕 縦 一

一四一〇九 太閤秀吉公御代分限帳 江戸 写 邸中 縦 一

一四一一二 〔御朱印・御花押集〕 江戸末期写 日記所 縦 一

*歴代将軍の朱印と花押、御三家当主の花押を列挙したもの。

一四一一五 祖父物語〔祖父物かたり〕 江戸 写 柿屋喜左衛門〔著〕 縦 一

*別題「朝日物語」「清須翁物語」。

一四一一七 寛永遺事 江戸 写 縦 一

一四一一三 〔知多郡之記〕 写年未詳 徳図記 縦 一

*見返しに「義禮侯 ちノ七八七号 知多郡之記 一冊」と書かれた紙片がはさみ込まれている。

一四一四〇 〔富士見原之図〕 大正六年写 縦 一

*若山喜三郎が吉川弘道所蔵本「尾陽雑話 遊女濃阿都」を底本として奥村定所蔵本と校合した際に、校合不可能であった箇所を抜き出してまとめたもの。

一四一四三 〔尾陽雑話 遊女濃阿都〕〔文化八年跋〕 大正六年写 縦 一

*若山喜三郎による写と推定される。昭和九年に行った名古屋図書館本・鈴木半右衛門本との校合の結果が青色・緑色で追記されている。

一四一五三 尾張国人物志略〔正徳元年成立〕 江戸 写 天野信景〔著〕 邸中 縦 一

旧蓬左文庫所蔵史料目録〔下〕

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

一四一六 御関船之記(卷之上のみ)

江戸 写

縦 一

一四一七 (御成之記)(元禄二年)

江戸 写

記録所

縦 一

*元禄二年三月二十八日に將軍徳川綱吉が尾張藩邸へ御成した際の記録。表紙に「へ」と朱書された貼紙あり。

一四一八 (月並張出帳)

江戸 写

御小納戸頭取(編)

縦 一

*見返しに「慶応二年十二月上旬訂、同三年正月上旬訂」と書かれた貼紙あり。

一四一九 (大猷院様御代慶安四年以後 御記録)

江戸 写

縦 一

*慶安四年四月の將軍徳川家光の死去より元禄二年三月の將軍綱吉による尾張藩邸への御成に至る間の幕府との関係を中心とした尾張藩主の行動について、「事蹟録」「留書方目帳」などをもとにまとめたもの。

一四二〇 尾張敬公(尾張敬公伝)(明治四四年自序)

写年未詳

西村時彦(著)

縦 一

*紙帙入り。

一四二一 (佐屋宿御本陣留)(明治元年)

大正元年写

蓬左B

縦 二

*野村智則による写。第一冊には「御東臨・御還幸之節 行在所御用留初御本陣留」など一〇種類の史料が、第二冊には「御再幸三月十八日御休養并皇后宮様十月十日御休ヲ初 御本陣留」をはじめとする一七種類の史料が転写されている。

一四二二 元千代様御上京御発駕調(慶応二年)

江戸末期写

御番方(編)

縦 一

*「元千代様」とは第一六代尾張藩主徳川義宣の幼名である。

一四二三 熱田旧記

安政四年写

縦 一

*崇軒と号した人物による写。

一四二四 熱田本紀(熱田本記)(元禄二年成立)

安政二年写

縦 一

*横山有道による写。「熱田宮旧記」とほぼ同内容であるといわれる。

一四二五 風土記 尾張国(尾張国風土記)

寛政六年写

縦 一

*埜田重堅による写。享和二年に高力氏所蔵本により校訂した旨の追記あり。

一四一 六 風土記 尾張国〔尾張風土記〕 江戸 写 縦 一

一四一 〇 尾張国人物志略〔正徳元年成立〕 江戸 写 天野信景〔著〕 尾府 A 縦 一

一四一 二 〔戸山御庭御見物之記 附和田戸山の記〕 昭和一二年写 整三堂主人〔著〕 蓬左 A 縦 一

*文政一三年閏三月に日光准后の舜仁親王が江戸戸山藩邸を訪れたときのもの。藤浪剛一所蔵本より転写した旨の奥書がある。昭和一二年九月四日付〔蓬左文庫蔵本〕の貼紙あり。

一四一 五 〔御側物頭江被仰渡候後 覚書〕〔文化二二〕〔文政一〇年〕 江戸後期写 杉山源六郎〔著〕 縦 一

*尾張藩士杉山源六郎が御側物頭兼御小納戸頭取に就任して以降の公用に関する心覚帳。

一四一 七 〔日光・名〕^{〔山相〕}東照宮御祭礼記 江戸 写 蓬左 A 縦 一

一四一 八 尾濃葉栗見聞集〔享和元年自序〕 江戸後期写 吉田正道〔編〕 縦 六

第一冊 序 卷之天上〔葉栗・中島・海西三郡美濃ニ属スル始之事ほか〕 第二冊 卷之天下〔黒田村名前之事ほか〕

第三冊 卷之地上〔杭瀬川美濃堺之事ほか〕 第四冊 卷之地下〔伊木山城墟の事ほか〕

第五冊 卷之入上〔濃州厚見郡岐阜之事并図ほか〕 第六冊 卷之入下〔尾州葉栗郡神社并庄之事ほか〕

一四一 九 〔女中分限帳〕〔文久三年〕 江戸末期写 横・小 一

*「元千代」「道姫」「岑姫」などの名前が見られることや各人の年齢を示す部分に「癸亥」と記されていることから、文久三年の改めに基づく内容であると推定できる。

一四一 〇 〔寺社〕〔礼席等書上帳〕 江戸 写 横・小 一

一四一 二 〔定法〕〔普請心覚帳〕 江戸 写 横山〔著〕 横・小 一

一四一 三 〔尾張藩大工方心得〕 江戸 写 横・小 一

一四一 三 〔駿府御分物御道具帳〕 江戸 写 横・小 一

一四一 六 〔国府宮追儼禁遏始末〕 江戸 写 人見泰〔著〕 横・小 一

一四一 六 信州筑摩郡木曾上松駅 寢覚浦島太郎略縁起〔寢覚浦島 江戸 刊 蓬左 A 縦 一

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

太郎略縁起)

* 昭和八年九月一三日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。

一四一〇〇

〔御狩鹿御留帳〕(明暦四〜天和三年)

江戸 写

* 見返しに「尾張国名護屋城坤広井県鍾兵堂蔵本」という押印があるところから、近松茂矩旧蔵本と考えられる。

一四一〇〇イ

〔御笛山御留帳〕(寛文三〜貞享元年)

江戸 写

* 見返しに「尾張国名護屋城坤広井県鍾兵堂蔵本」という押印があるところから、近松茂矩旧蔵本と考えられる。

一四一〇一

御仕置御定(安永四年)

大正元年写

蓬左 A

* 戸田鈞所蔵本を植松安が転写したもの。

一四一〇二

〔御糺品規則〕(土道之条理ニ不合所行取調ニ付・慶応三年)

江戸末期写

一四一〇三

〔御糺類書抜〕(土道之条理ニ不合所行取調ニ付・慶応三年)

江戸末期写

* 一四七一一〇二に関わる吟味が行われた際の「別帳」と推測される。

一四一〇四

御規式書付(公義方出候御規式書)(元禄二年)

江戸 写

* 元禄二年三月の將軍綱吉による尾張藩邸への御成に関する手順を記したもの。

一四一〇五

晃禪院様・章善院様・源戴様・源明様・前大納言様・源傳様・御当代様御代米金納払書抜(晃禪院様御始御代米金納払書抜)(享保三〜大保二年)

江戸 写

一四一〇六

尾張殿御領分郡村帳(尾張殿領分郡村帳)

写年未詳

徳図記

* 明治以降の写。

一四一〇七

御為筋一卷(万延元〜元治元年)

大正一四年写

蓬左 A・徳蔵書

* 信州三浦三ヶ村御山守の内木清衛らが木曾山などの材木の「御手仕出」について改善を求めた際の一件留。

一四一〇八

国家金銀錢譜(延享三年自序)

江戸 写

青木昆陽(著)

張府 B

縦

一

四一―二六 御国法検地古伝司農記 写年未詳 縦 一

*徳図記とは異なる「徳川蔵書」という押印がある。

四一―二九 〔張藩官録記〕(明和三年) 江戸 写 鈴木洪重〔編〕 蓬左 A 縦 二

*尾張藩士のいろは寄分限帳。第一冊には「い」から「む」が、第二冊には「う」から「す」が収められているが、表紙の題簽は入れ違って貼られている。

四一―三二 御役名順 天保二年写 蓬左 A 縦 一

*重英と名乗る人物による写。昭和九年七月二十四日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。

四一―三三 〔役名規式〕 文化九年筆 縦 一

*尾張藩における大寄合以下の諸役の役順や支配系統を記したもの。短冊状の紙片を貼り込む形式をとる。

四一―三四 岡田村古代沿革史〔知多郡岡田村誌〕 明治二八年刊 竹澤保太郎〔著・発行〕 蓬左 A 縦 一

四一―三六 御用水江之事条 附中下水道御達文言件々証書抜〔御用水江之事条〕 明治二二年写 縦 一

四一―三〇 〔階級録〕(尾張藩いろは寄分限帳) 江戸後期写 縦 三

*上(いゝか)・中(よゝて)・下(あゝす)の三冊からなる。内題は「文化年中階級録」となっているが、後筆であると思われる。文化一四年前後の役職の移動などを示した貼紙や朱筆が多数みられる。

四一―三三 明公御行状 写年未詳 縦 一

*「明公」とは第九代尾張藩主徳川宗睦のことを指す。

四一―三三 〔分限考拔萃〕 写年未詳 縦 一

四一―三四 御誓文大意 明治五年刊 和泉屋市兵衛ほか〔版〕 梅柳園 縦 一

*三島神社蔵版本。末尾に徳川慶勝による書き入れがある。

四一―三五 御代々御法要之節 香語并墓碑銘 写年未詳 縦 一

四一―三六 泰心公御一世大概 写年未詳 縦 一

*明治以降の写。「泰心公」とは第三代尾張藩主徳川綱誠のことをいう。

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態 数量

一四一三 尾張国郡村仮名附帳(尾張国郡村字訓)

江戸 写

* 第一冊に愛知郡・春日井郡・丹羽郡、第二冊に葉栗郡・中島郡・海東郡・海西郡・知多郡の村々を収める。

縦 一

一四一三 白華随筆(白華園随筆)

写年未詳

天野信景(著)

蓬左 A

縦 一四

* 天野信景の随筆「塩尻」の一部であると考えられる転写本。第一冊の内表紙に「共廿一冊」とあり、本来は三十一冊からなっていたと思われるが、残存しているのは一四冊のみである。『日本随筆大成』第二期第三卷(第一八卷)にある「塩尻」の記事と重複する内容も散見されるが、配列は異なる。左の細目には、各冊の内表紙に示された巻数および巻頭に「塩尻」などと記されたものについては、その巻数を「」つきで表示した。昭和十二年一月二八日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。

第一冊 一・二

第二冊 三[塩尻三]・四[塩地理四]

第三冊 五[塩地理五]・六[塩尻六]

第四冊 七[志保字利卷之七]

第五冊 八・九[塩尻七]・十[塩尻八]

第六冊 十一・十二

第七冊 十三・十四・十五

第八冊 十六[塩尻卷之廿七]・志本字梨卷之廿八

第九冊 十七[塩字利卷之三十九・四十]

第一〇冊 十八[四十一]・志保次利卷之四十二

第一一冊 十九[塩尻卷之四十三]・詩保地理卷之四十四

第一二冊 二十[四十五]・子保字里卷之四十六

第一三冊 二十一[子保字里卷之四十七・四十八]

第一四冊 二ノ一ヨリ二十六[六十八]・志保次理卷之六十九

一四一四 (律の滴 有得漫記)

昭和十二年写カ

細野忠陳(著)

蓬左 A

縦 七

* 「律の滴」は尾張藩士で儒者・国学者として知られた細野忠陳(要齋)の筆録群の総称である。昭和十二年一月二八日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。

一四一五 (律の滴 諸家雑談)

昭和十二年写カ

細野忠陳(著)

蓬左 A

縦 七

* 昭和十二年一月二八日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。

第一冊 一(天保一五年春・嘉永二年夏)

第二冊 二(嘉永二年夏・安政二年冬)

第三冊 三(安政三年正月・同六年六月)

第四冊 四(安政六年七月・文久元年八月)

第五冊 五(文久元年八月・同三年八月)

第六冊 六(文久三年一月・慶応二年七月)

第七冊 七(慶応二年八月・明治六年一〇月)

一四一六 (律の滴 感興漫筆)

昭和十二年写

細野忠陳(著)

蓬左 A

縦 四二

*第一冊〜第二〇冊・第四一冊は名古屋市立図書館本、第二一冊〜第四〇冊は神宮文庫本、第四二冊は首藤本を底本として転写したもの。昭和二年一月二十九日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。

第一冊	一(天保四年五月〜同三年一〇月)	第二冊	二(天保一二年一月〜弘化二年二月)
第三冊	三(弘化二年正月〜同四年六月)	第四冊	四(弘化四年三月〜同五年正月)
第五冊	五(弘化五年二月〜嘉永元年二月)	第六冊	六(嘉永二年正月〜八月)
第七冊	七(嘉永二年九月〜同三年七月)	第八冊	八(嘉永三年八月〜同四年七月)
第九冊	九(嘉永四年六月〜二年二月)	第一〇冊	十(嘉永五年正月〜七月)
第一一冊	十一(嘉永五年七月〜二年二月)	第一二冊	十二(嘉永六年正月〜七月)
第一三冊	十三(嘉永六年七月〜同七年四月)	第一四冊	十四(嘉永七年四月〜安政元年二月)
第一五冊	十五(安政二年正月〜一〇月)	第一六冊	十六(安政三年一月〜同三年九月)
第一七冊	十七(安政三年九月〜同四年三月)	第一八冊	十八(安政四年四月〜八月)
第一九冊	十九(安政四年八月〜二年二月)	第二〇冊	二十(安政五年正月〜四月)
第二一冊	廿一(安政五年四月〜二年二月)	第二二冊	廿二(安政六年正月〜六月)
第二三冊	廿三(安政六年六月〜二年二月)	第二四冊	廿四(安政七年正月〜万延元年五月)
第二五冊	廿五(万延元年六月〜一〇月)	第二六冊	廿六(万延元年一〇月〜二年二月)
第二七冊	廿七(万延二年正月〜三月)	第二八冊	廿八(文久元年三月〜八月)
第二九冊	廿九(文久元年八月〜同二年六月)	第三〇冊	三十(文久二年七月〜二年二月)
第三一冊	卅一(文久三年正月〜二年二月)	第三二冊	卅二(文久四年正月〜元治元年二月)
第三三冊	卅三(元治二年正月〜慶応元年二月)	第三四冊	卅四(慶応二年正月〜二年二月)
第三五冊	卅五(慶応三年正月〜二年二月)	第三六冊	卅六(慶応四年正月〜明治元年二月)
第三七冊	卅七(明治二年正月〜二年二月)	第三八冊	卅八(明治三年正月〜二年二月)
第三九冊	卅九(明治四年正月〜同五年二月)	第四〇冊	四十(明治六年一月〜同八年二月)
第四一冊	四十一(明治八年一月〜同九年二月)	第四二冊	四十二(明治一〇年二月〜同十一年九月)

一四一六イ〔律の滴 涉獵雜抄〕〔抜粋本〕

昭和一五年写

細野忠陳(著)

縦

*細野忠陳自筆本や神宮文庫本をもとにして名古屋市立図書館が明治四四年に転写した本を、昭和一五年に再転写したもの。

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番 号 表 題	刊 写 年	著 者 (作 成 者)	蔵 書 印	形 態	数 量
一四一六 〔御代々様御参府御帰城年月留〕(慶安三・文政四年)	江戸後期写			帖	一
一四一六 〔名古屋藩庁日誌〕(明治三年)	明治 写		蓬左 A	縦	一
一四一七 由緒功分書〔江崎祐八由緒功分書〕	明治三年筆	小牧村 江崎祐八〔著〕	蓬左 A	縦	一
一四一七 和田戸山伝聞之記	江戸 写			縦	一
一四一七 御船々并御道具帳〔弘化年間以後 御船々并御道具帳〕	写年未詳		蓬左 A	縦	一
一四一七 尾陽医学館 浅井家歴代諸先生校定診候秘訣 診法秘奥 弁〔尾藩医学館 浅井家歴代諸先生診候秘訣〕	写年未詳	世民正晨〔著〕	蓬左 A	縦・小	一
一四一八 〔近代式目〕(公儀法度・触書集)	江戸 写			縦	七
一四一八 福井侯行実	写年未詳			縦	一
一四一八 〔丁酉 大坂記〕(慶応元年自序)	江戸末期写	細野忠陳〔編〕	蓬左 A	縦	二
一四一八 〔連城あつめ草〕	写年未詳	小寺文晁〔編〕	蓬左 A	縦	一
一四二〇〇 〔千賀与八郎航海日誌〕(文久三・元治元年)	文久三・元治元年筆	千賀与八郎〔著〕	蓬左 A	縦	一

* 明治三年三月付の「第七号」、同年四月付の「第八号」「第九号」の三つを転写したもの。

* 小牧出張所にあてて差し出されたものの写。

* 末尾に本史料作成の経緯を記した朱筆あり。

尾陽医学館 浅井家歴代諸先生校定診候秘訣 診法秘奥 弁〔尾藩医学館 浅井家歴代諸先生診候秘訣〕

* 元禄・享保期の幕府法令などが順不同で書き写されたもの。第一冊の末尾に「徳川慶勝蔵」と朱書された貼紙、各冊の末尾に「七号ノ四套」と墨書された貼紙あり。

* 松平慶永の逸話を記したもの。

* 天保八年の大塩平八郎一件に関するもの。紙帙に貼られた題簽には「細野要斎自筆本」とある。

* 紙帙の題簽には「小寺文晁自筆本」とある。

* 文久三年九月の航海日誌と元治元年九月の上京御供日記(ただし記述は三日分のみ)からなる。題簽に「手稿」という朱筆あり。

一四一五 前大納言様熱田々桑名江御渡海御船御行列〔前大納言様熱御船御行列〕 写年未詳 蓬左 A 縦 一

* 昭和一〇年六月七日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。

一四一八 〔宮田敏上書〕〔元治元々慶応元年〕 写年未詳 宮田敏〔著〕 蓬左 A 縦 一

* 昭和一〇年六月七日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。

一四一二 古渡旧記 江戸 写 華月楼主人〔著〕 蓬左 A 縦 一

* 尾張国愛知郡古渡村に関するもの。昭和一〇年七月一日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。

一四一三 尾張古今人物志 写年未詳 修徳堂主人〔編〕 蓬左 A 縦 四

* 昭和一〇年七月一日付「蓬左文庫蔵本」の貼紙あり。

一四一四 〔休泊割〕〔嘉永四年〕 江戸 写 蓬左 A 縦 一

* 徳川慶勝による写。嘉永四年の帰国のときのもの。「維新史49」のラベルあり。

一四一五 〔張藩武術師系録〕〔文化八年〕 江戸後期写 山高信篤ほか〔編〕 横・小 一

一四一六 〔尾張・美濃御領分いろは分村附〕 写年未詳 横・小 一

* 各村名の上に大区・小区を記した朱筆(後筆)あり。

一四一七 松井甫水上書〔元禄七年〕 寛政三年写 張府 A 横・小 一

* 冒頭に庵原本より転写した旨の割書あり。

一四一八 〔尾記〕〔寛永一〇〇慶安三年〕 江戸 写 張府 B 縦 一

* 徳川義直に関する事蹟を編年体で記したもの。

一四一三 〔当地御手紙留〕〔明治三々四年〕 昭和一〇年写 蓬左 A 縦 一

* 名古屋県志水大参事が授受した書簡などを書き留めたもの。昭和一〇年に大脇鉄次郎が志水忠平所蔵の原本から転写している。

旧蓬左文庫所蔵史料目録(下)

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態 数 量

一四一 五 御文庫御書物便覧

江 戸 写

小澤鎮盈(編)

縦 四

*表紙に「七号」と書かれた貼紙あり。

一四一 三 御文庫御蔵書目録(天明二年)

江 戸 写

蓬左 A・張府 B

縦 五

*表紙に「参号」と書かれた貼紙、第一冊の見返しに「拾七号」という貼紙あり。

一四一 元 源敬様御撰述御書目

天保一一年写

縦 一

*天保一一年に御書物方より転写した旨の奥書がある。

一四一 四 (戸山御庭 御書物目録)

江 戸 写

尾府 B

縦 一

一四一 四 (禁中御借御戻之御書籍)(寛保三年)

江 戸 写

赤林新助(編)

縦 一

一四一 五 巖邑府誌(寛延四年自跋)

江 戸 写

首藤元震(著)

蓬左 A・尾府 A 縦 四

一四一 五 (紅葉集・吹毛集共 同後編)

江 戸 写

尾記録・日記所 縦 三

*尾張藩における刃傷・切腹などに関する記録で正編(享和二年写)・後編(冊からなる。正編は慶長一五年より宝暦九年まで、後編は宝暦一一年より万延元年までの記事を収める。蔵書印は、正編が尾記録、後編が日記所となっている。

一四一 五 (尾濃参信村名附)

文久元年写

横・小 一

*中島光太郎による写。

一四一 五 礼物軌式(文化一三年序)

江戸後期写

縦 五

*尾張藩より幕府への献上品の調進に関するもの。

第一冊 序 凡例 春(御包熨斗・御盃台ほか)

第二冊 夏(宿継鮎鮓・延命酒ほか)

第三冊 秋(甘干柿・宮重大根ほか)

第四冊 冬(松御重・杉御重ほか)

第五冊 附録(御鏡餅・連飯ほか)

一四一 六 儀物軌式(文化一四年序)

江戸 写

縦 八

*御音信物の調進に関するもの。

第一冊 序 凡例 一(原始)

第三冊 三(武家之部)

第五冊 五(御女中向之部)

第七冊 八(祇門之部) 九(祇門之部)

第二冊 二(武家之部)

第四冊 四(御女中様方之部)

第六冊 六(公家衆之部) 七(公家衆之部)

第八冊 十(神仏御献備)

一四一 四 (木曾の山ふみ)(享保一三年成立)

江戸 写

連阿(著)

縦

一四一 五 (縮図)(本陣間取図帳)

江戸末期筆

徳川慶勝(筆)カ

縦

* 休泊する各宿場の本陣の間取り(御座之間付近)を記した絵図を貼り込んだもの。

一四一 六 円覚院様御伝十五ヶ条 蘊奥相伝之事(蘊奥相伝)(明和元年) 嘉永三年写

近松茂矩(著)

盛斎

縦

* 「円覚院」とは第四代尾張藩主徳川吉通のことを指す。

一四一 七 円覚院様御伝十五ヶ条之儀ニ付貞磨謹而奉附録候書付(蘊奥相伝附録)(嘉永三年成立) 嘉永三年写

山崎貞磨(著)

盛斎・子忠

縦

* 徳川慶恕による写。

一四一 八 亀山志(宝永六年成立)

江戸 写

亀岡逸堂(著)

縦

一四一 九 巡河日課(宝暦八、九年)

江戸 写

松平秀雲(著)

尾府A

縦

一四一 一〇 続巡河日課(宝暦一一年)

江戸 写

松平秀雲(著)

尾府A

縦

一四一 一一 巡河日課三編(宝暦一二年)

江戸 写

松平秀雲(著)

尾府A

縦

一四一 一二 智多郡産物書上帳(尾州知多郡産物書上帳)(享保一〇年)

江戸 写

尾府A

縦

一四一 一三 (和田戸山記事)

江戸 写

尾府A

縦

一四一 一四 埋火(宝永三年)

江戸 写

張府B

縦

番 号 表 題

刊 写 年

著 者 (作 成 者)

蔵 書 印

形 態 数 量

一四一三 〔宣命・宣旨・口宣案・御位署写〕

江戸 写

日記所

縦 一

*表題のものほか「続修御系図訂正ニ付禁中江問合事取扱候官人江被下物」「東照宮御祭礼楽之儀ニ付源敬様江南龍院様方被進候御書」「摂津守様御添書付御附添状」を収める。

一四一四 〔加藤唐四郎伝記〕(享保九年)

江戸 写

尾府 A

縦 一

一四一五 〔入唐藤四郎之系図・織部竈焼出シ根元・志野織部之事・御庭焼之根元〕

江戸 写

蓬左 A・張府 B

縦 一

一四一六 明倫堂(明倫堂明細図)(青焼図)

刊年未詳

鋪 一

一四一七 〔御菜園畑ニ関スル書類〕(天保年間)

江戸 写

縦 一

一四一八 文久三年ヨリ明治二年五月迄 従一位様御履歴調参考箇条(従一位様御履歴参考)

明治 写

角田弟彦〔著〕

縦 一

一五一二 康熙字典

第一冊 序 凡例 総目 検字 弁似

刊年未詳

徳川

縦 四〇

第三冊 子集中

第二冊 子集上

第四冊 子集下

第五冊 丑集上

第六冊 丑集中

第六冊 丑集中

第七冊 丑集下

第八冊 寅集上

第八冊 寅集上

第九冊 寅集中

第一〇冊 寅集下

第一〇冊 寅集下

第一二冊 卯集上

第一三冊 卯集中

第一三冊 卯集中

第一三冊 卯集下

第一四冊 辰集上

第一四冊 辰集上

第一五冊 辰集中

第一六冊 辰集下

第一六冊 辰集下

第一七冊 巳集上

第一八冊 巳集中

第一八冊 巳集中

第一九冊 巳集下

第二〇冊 午集上

第二〇冊 午集上

第二二冊 午集中

第二三冊 午集下

第二三冊 午集下

第二三冊	未集上	第二四冊	未集中
第二五冊	未集下	第二六冊	申集上
第二七冊	申集中	第二八冊	申集下
第二九冊	酉集上	第三〇冊	酉集中
第三一冊	酉集下	第三二冊	戌集上
第三三冊	戌集中	第三四冊	戌集下
第三五冊	亥集上	第三六冊	亥集中
第三七冊	亥集下	第三八冊	補遺(総目・子集・亥集)
第三九冊	備考(総目・子集・亥集)	第四〇冊	等韻切音指南

一七十八 本草綱目 附本草図翼・結髦居別集(本草綱目)(正徳四 江戸 刊 蓬左A・尾府B 縦 四五
 年成立)

第一冊	新校正本草綱目例言・新校正本草綱目序・題重訂本草綱目後・本草綱目序・重刊本草綱目序・本草綱目総目首卷・凡例・重刻本草綱目小 引・進本草綱目疏	第三冊	新校正本草綱目第二卷(序例下)
第二冊	新校正本草綱目第一卷上(序例上)・第一卷下(序例下)	第五冊	新校正本草綱目第三卷下(百病主治藥上)
第四冊	新校正本草綱目第三卷上(百病主治藥上)		
第六冊	新校正本草綱目第四卷上(百病主治藥下)		
第七冊	新校正本草綱目第四卷中(百病主治藥下)・第四卷下(百病主治藥下)		
第八冊	新校正本草綱目第五卷(水之一・水之二)・第六卷(火之一)・第七卷(土之一)		
第九冊	新校正本草綱目第八卷(金石之一・石之一)	第一〇冊	新校正本草綱目第九卷(石之三)・第十卷(石之四)
第一一冊	新校正本草綱目第十一卷(石之五)	第二二冊	新校正本草綱目第十二卷(草之一)
第一三冊	新校正本草綱目第十三卷(草之二)	第一四冊	新校正本草綱目第十四卷(草之三)
第一五冊	新校正本草綱目第十五卷(草之三)	第一六冊	新校正本草綱目第十六卷(草之五)
第一七冊	新校正本草綱目第十七卷上(草之六)・第十七卷下(草之六)		
第一八冊	新校正本草綱目第十八卷上(草之七)・第十八卷下(草之七)		
第一九冊	新校正本草綱目第十九卷(草之八)・第二十卷下(草之九)・第二十一卷(草之十)・草之十一)		

番号表題

刊写年

著者(作成者)

蔵書印

形態

数量

第二〇冊 新校正本草綱目第二十二卷(穀之一)・第二十三卷(穀之二)

第二一冊 新校正本草綱目第二十四卷(穀之三)・第二十五卷(穀之四)

第二二冊 新校正本草綱目第二十七卷(菜之一)・第二十八卷(菜之二)・第二十九卷(菜之三)・第三十卷(菜之四)・第三十一卷(菜之五)

第二三冊 新校正本草綱目第三十九卷(果之一)・第四十卷(果之二)

第二四冊 新校正本草綱目第三十一卷(果之三)・第三十二卷(果之四)・第三十三卷(果之五)・第三十四卷(果之六)

第二五冊 新校正本草綱目第三十四卷(木之一)・第三十五卷(木之二)

第二六冊 新校正本草綱目第三十六卷(木之三)・第三十七卷(木之四)・第三十八卷(木之五)・第三十九卷(木之六)

第二七冊 新校正本草綱目第三十八卷(服器之一)・第三十九卷(服器之二)

第二八冊 新校正本草綱目第三十九卷(虫之一)・第四十卷(虫之二)

第二九冊 新校正本草綱目第四十一卷(虫之三)・第四十二卷(虫之四)

第三〇冊 新校正本草綱目第四十三卷(鱗之一)・第四十四卷(鱗之二)・第四十五卷(鱗之三)・第四十六卷(鱗之四)

第三一冊 新校正本草綱目第四十五卷(介之一)・第四十六卷(介之二)

第三二冊 新校正本草綱目第四十七卷(禽之一)・第四十八卷(禽之二)・第四十九卷(禽之三)・第五十卷(禽之四)

第三三冊 新校正本草綱目第五十卷(獸之一)

第三四冊 新校正本草綱目第五十二卷(人之一)・第五十三卷(人之二)・第五十四卷(人之三)・第五十五卷(人之四)

第三五冊 新校正本草綱目第五十六卷(草之一)・第五十七卷(草之二)・第五十八卷(草之三)・第五十九卷(草之四)

第三六冊 新校正本草綱目第六十卷(木之一)・第六十一卷(木之二)・第六十二卷(木之三)・第六十三卷(木之四)・第六十四卷(木之五)・第六十五卷(木之六)

第三七冊 新校正本草綱目第六十六卷(果之一)・第六十七卷(果之二)・第六十八卷(果之三)・第六十九卷(果之四)・第七十卷(果之五)・第七十一卷(果之六)

第三八冊 新校正本草綱目第七十二卷(蟲之一)・第七十三卷(蟲之二)・第七十四卷(蟲之三)・第七十五卷(蟲之四)・第七十六卷(蟲之五)・第七十七卷(蟲之六)

第三九冊 新校正本草綱目第七十八卷(魚之一)・第七十九卷(魚之二)・第八十卷(魚之三)・第八十一卷(魚之四)・第八十二卷(魚之五)・第八十三卷(魚之六)

第四〇冊 新校正本草綱目第八十四卷(鳥之一)・第八十五卷(鳥之二)・第八十六卷(鳥之三)・第八十七卷(鳥之四)・第八十八卷(鳥之五)・第八十九卷(鳥之六)

第四一冊 新校正本草綱目第九十卷(獸之一)・第九十一卷(獸之二)・第九十二卷(獸之三)・第九十三卷(獸之四)・第九十四卷(獸之五)・第九十五卷(獸之六)

第四二冊 新校正本草綱目第九十六卷(蟲之一)・第九十七卷(蟲之二)・第九十八卷(蟲之三)・第九十九卷(蟲之四)・第一百卷(蟲之五)・第一百零一卷(蟲之六)

第四三冊 新校正本草綱目第一百零二卷(魚之一)・第一百零三卷(魚之二)・第一百零四卷(魚之三)・第一百零五卷(魚之四)・第一百零六卷(魚之五)・第一百零七卷(魚之六)

第四四冊 新校正本草綱目第一百零八卷(鳥之一)・第一百零九卷(鳥之二)・第一百一十卷(鳥之三)・第一百一十一卷(鳥之四)・第一百一十二卷(鳥之五)・第一百一十三卷(鳥之六)

第四五冊 新校正本草綱目第一百一十四卷(獸之一)・第一百一十五卷(獸之二)・第一百一十六卷(獸之三)・第一百一十七卷(獸之四)・第一百一十八卷(獸之五)・第一百一十九卷(獸之六)

第四六冊 新校正本草綱目第一百二十卷(蟲之一)・第一百二十一卷(蟲之二)・第一百二十二卷(蟲之三)・第一百二十三卷(蟲之四)・第一百二十四卷(蟲之五)・第一百二十五卷(蟲之六)

二七一九 重訂 本草綱目(新刊) 本草綱目(卷四十三・卷四十四欠)

江戸 刊

稻生若水(校閱)

蓬左A・張府A 縦

四一

第一冊 本草綱目序・重刻本草綱目序・重刊本草綱目序・進本草綱目序・本草綱目總目・本草綱目凡例・重刻本草綱目小引

第二冊 本草綱目圖卷上(金石部・草部)

第三冊 本草綱目圖卷中(草部・穀部・菜部・果部・木部)

第四冊 本草綱目圖卷下(木部・虫部・鱗部・介部・禽部・獸部)

第五冊 第一卷上(序例上)

第六冊 第一卷下(序例下)

第七冊 第二卷(序例上)

- 第八冊 第三卷上(百病主治藥上)
 第一〇冊 第三卷下(百病主治藥上)
 第二冊 第四卷中(百病主治藥下)・第四卷下(百病主治藥下)
 第三冊 第五卷(水之一・水之二)・第六卷(火之一)・第七卷(土之一)
 第四冊 第八卷(金石一・石之一)
 第一六冊 第十一卷(石之五)
 第一八冊 第十三卷(草之一)
 第二〇冊 第十五卷(草之四)
 第二二冊 第十七卷上(草之六)・第十七卷下(草之六)
 第二四冊 第十九卷(草之八)・第二十卷(草之九)・第二十一卷(草之十)
 第二六冊 第二十四卷(穀之三)・第二十五卷(穀之四)
 第二八冊 第二十七卷(菜之一)・第二十八卷(菜之二)
 第三〇冊 第三十一卷(果之三)・第三十二卷(果之四)・第三十三卷(果之五)
 第三二冊 第三十四卷(木之一)
 第三三冊 第三十六卷(木之一)・第三十七卷(木之四)・木之五・木之六
 第三四冊 第三十八卷(服器之一)・服器之二)・第三十九卷(虫之一)
 第三五冊 第四十卷(虫之一)・第四十一卷(虫之三)・第四十二卷(虫之四)
 第三六冊 第四十五卷(介之一)・第四十六卷(介之二)・第四十七卷(禽之一)
 第三七冊 第四十八卷(禽之三)・第四十九卷(禽之三)・禽之四
 第三八冊 第五十卷(獸之一)
 第四〇冊 第五十一卷(獸之二)
 第九冊 第三卷上(百病主治藥上)
 第二冊 第四卷上(百病主治藥下)
 第一五冊 第九卷(石之三)・第十卷(石之四)
 第一七冊 第十二卷(草之二)
 第一九冊 第十四卷(草之三)
 第二一冊 第十六卷(草之五)
 第二三冊 第十八卷上(草之七)・第十八卷下(草之七)
 第二五冊 第二十二卷(穀之一)・第二十三卷(穀之二)
 第二七冊 第二十六卷(菜之一)
 第二九冊 第二十九卷(果之一)・第三十卷(果之二)
 第三三冊 第三十五卷(木之一)
 第三九冊 第五十一卷(獸之一)・獸之三)・獸之四)
 第四一冊 重刻脈學奇經八脈

【訂正】

本紀要第三四号に掲載した「旧蓬左文庫所蔵史料目録(上)」の記事に以下のような誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

「旧蓬左文庫所蔵史料目録(上)」三七～三八頁 「尾張名所図会」(史料番号二八一五)の項

誤

正

第九冊	後編卷之二(中島郡中)	↓	第九冊	後編卷之二(中島郡下)
第一〇冊	後編卷之三(中島郡下)	↓	第一〇冊	後編卷之三(春日井郡上)
第一一冊	後編卷之四(春日井郡上)	↓	第一一冊	後編卷之四(春日井郡下)
第一二冊	後編卷之五(春日井郡下)	↓	第一二冊	後編卷之五(葉栗郡)